

全国果樹優良経営事例調査報告書  
(中央果実協会資料 No.274)

# 第26回 全国果樹技術・経営コンクール 受賞者概要

令和7年3月

主催 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会

全国農業協同組合中央会  
全国農業協同組合連合会  
日本園芸農業協同組合連合会  
全国果樹研究連合会  
公益財団法人 中央果実協会

後援 農 林 水 産 省

日 本 農 業 新 聞

## はじめに

### 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会 委員長 村上 秀徳

当コンクールは、平成11年度から、生産技術や経営方式等において他の模範となる先進的な農業者、生産団体等を表彰し、その成果を広く紹介することにより、我が国果樹農業の発展に資することを目的として発足したものです。

近年の果樹農業を取り巻く環境には厳しいものがあり、高齢化が進展する一方で、次世代への園地の継承が円滑に進まず農地の荒廃が加速するなど、生産基盤の脆弱化がみられるほか、需要の伸び悩みや価格の変動、資材費の高騰などの問題にも直面しています。

このような状況に対応するため、令和2年4月に公表された新たな果樹農業振興基本方針に即し、果樹農業の生産基盤の強化、市場拡大に向けた生産供給体制の構築に向けて労働生産性を高めた生産体系の導入や消費者ニーズに対応した果実の生産拡大等のための諸施策が進められています。

このような施策が所期の成果をあげるためには、関係者の主体的な活動、とりわけ、産地の自助努力が必要かつ不可欠であり、産地振興の中核的役割を担っている方々の活動が最も重要です。

当コンクールは、技術・経営のモデルとして受賞者の成果を広く普及するとともに、先進的な取組を実践している産地・生産者を励まし、施策の具体的な推進の中核的役割を担っていただくという視点から実施されており、現下の情勢において大変大きな意義があるものと考えております。

受賞者の技術・経営の概要は、以下に取りまとめられているとおりですが、いずれも、各地域において困難な諸条件を克服しつつ、独自の創意工夫や最新の知見の活用、計画的・効果的な投資、集団・地域の合意形成など、主体的、積極的な実践によって、高い水準の技術・経営を身をもって達成し、他の模範となる方々です。

受賞者の皆様には、長年にわたるご努力、ご研鑽に対し深く敬意を表し、心からのお祝いを申し上げます。受賞を契機に、今後とも地域更には全国の果樹農業の中核的な先導者として一層ご活躍されるよう期待する次第です。

結びに、ご指導・ご協力を賜りました農林水産省をはじめ関係機関・団体の皆様、厳正な審査に当たられた福元座長をはじめとする審査委員の方々に対し、深甚の感謝を申し上げます。引き続き、本事業が多くの果樹農業者の啓発や士気・意欲の高揚、更には我が国果樹農業の新たな発展に資する意義深いものとなるよう、今後ますますのご理解とご支援をお願い申し上げます。

第26回全国果樹技術・経営コンクール 受賞者一覧

農林水産大臣賞

氏名・集団名	住 所	
とどめ ひでき とどめ さちこ 留目 秀樹・留目 佐智子	青森県南部町	おうとう、りんご
あわの としひろ 粟野 寿広	茨城県下妻市	なし
くつな しげお くつな ようこ 忽那 恵雄・忽那 葉子	愛媛県松山市	柑橘
ふくおか やめ 福岡八女農業協同組合ぶどう部会	福岡県八女市	ぶどう

農林水産省農産局長賞

氏名・集団名	住 所	
うるしやま かずし うるしやま ようこ 漆山 和志・漆山 陽子	山形県南陽市	ぶどう
のざわ のぼる 野沢 昇	山梨県山梨市	ぶどう
こんどう きみお こんどう きょうこ 近藤 喜美雄・近藤 京子	静岡県静岡市	柑橘
ながた ひろとし 永田 広敏	愛知県刈谷市	ぶどう
やまだ ひとし 山田 均	鳥取県湯梨浜町	なし
みえふき 笛吹農業協同組合八代支所八代統合桃部会	山梨県笛吹市	もも
たなべじろし 田辺印の会	和歌山県田辺市	うめ

関係団体賞

【全国農業協同組合中央会会長賞】

氏名・集団名	住 所	
のべ かずや のべ ようこ 野辺 和哉・野辺 容子	宮城県串間市	施設キンカン

【全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞】

氏名・集団名	住 所	
ＪＡおおいたあまがせ 天瀬ぶどう部会	大分県日田市	ぶどう

【日本園芸農業協同組合連合会会長賞】

氏名・集団名	住 所	
しらかわ とおる しらかわ あきこ 白川 徹・白川 明子	香川県三豊市	うんしゅうみかん
ほり あきとし ほり えり 堀 秋利・堀 衣梨	長崎県諫早市	うんしゅうみかん(施設)

【全国果樹研究連合会会長賞】

氏名・集団名	住 所	
ＪＡ徳島かみやま 徳島県神山すだち振興部会	徳島県神山町	スダチ

【中央果実協会理事長賞】

氏名・集団名	住 所	
みやご えいこ 宮後 英子	北海道七飯町	りんご・ブルーベリー

## 第26回全国果樹技術・経営コンクール表彰式

日 時 令和7年2月20日(木)  
(午前11時30分より写真撮影)

場 所 東京都千代田区霞が関1-1-1  
法曹会館 2階「高砂」

### 表 彰 式 次 第

(写真撮影 11:30～11:40)

1 開会	11:40	
2 主催者挨拶	11:40～11:45	村上 秀徳 実行委員長(中央果実協会理事長)
3 祝辞	11:45～11:50	農林水産大臣
4 表彰状授与	11:50～12:15	大臣・局長賞(農林水産省) 団体賞(各団体)
5 審査講評	12:15～12:25	福元 審査会座長
6 受賞者のことば	12:25～12:30	受賞者の代表
7 閉会	12:30	
	受賞者との懇談会	12:40～14:00



## 目 次

### ○農林水産大臣賞

青森県	留目秀樹・留目佐智子	3
茨城県	栗野寿広	15
愛媛県	忽那恵雄・忽那葉子	29
福岡県	福岡八女農業協同組合ぶどう部会	39

### ○農林水産省農産局長賞

山形県	漆山和志・漆山陽子	57
山梨県	野沢昇	73
静岡県	近藤喜美雄・近藤京子	87
愛知県	永田広敏	99
鳥取県	山田均	112
山梨県	笛吹農業協同組合八代支所八代統合桃部会	123
和歌山県	田辺印の会	137

### ○全国農業協同組合中央会会長賞

宮崎県	野辺和哉・野辺容子	153
-----	-----------	-----

### ○全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

大分県	J Aおおいた天瀬ぶどう部会	161
-----	----------------	-----

### ○日本園芸農業協同組合連合会会長賞

香川県	白川徹・白川明子	173
長崎県	堀秋利・堀衣梨	187

### ○全国果樹研究連合会会長賞

徳島県	J A徳島県神山すだち振興部会	196
-----	-----------------	-----

### ○中央果実協会理事長賞

北海道	宮後英子	207
-----	------	-----



## 農林水産大臣賞

青森県 留目秀樹・留目佐智子

茨城県 栗野寿広

愛媛県 忽那恵雄・忽那葉子

福岡県 福岡八女農業協同組合ぶどう部会





# 留目 秀樹・留目 佐智子

住所及び氏名

住所 青森県 南部町  
氏名 とどめ ひでき 留目 秀樹(61歳)・とどめ さちこ 留目 佐智子(57歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

とめちよう留長果樹園主である留目秀樹、佐智子夫妻は、青森県南部町でおうとう140 a、りんご280 aの果樹複合経営を行っており、おうとうのうち30 aは青森県唯一の加温栽培である。

生産面では、おいしい果実を生食で提供したいという思いから、高品質生産を心がけており、おうとうでは、県内でもトップクラスの栽培技術に加え、全ての露地栽培で雨よけ施設を導入し、高品質で安定的な収穫量を確保している。また、おうとうの収穫時期と作業が重なるため、りんごでは積極的に摘花・摘果剤を使用しているほか、着色系統の良食味品種や着色管理の必要がない黄色品種を導入するなど作業の省力化にも積極的に取り組んでいる。

販売面では、従来の農協や市場出荷だけでなく、自分で値段を決めることができる宅配やEC販売を拡大したことで、安定的な所得を確保しているほか、顧客と直接つながることで、旬の情報を伝えるとともに、顧客のニーズを把握している。

経営規模が大きく、雇用への依存度が高い中で、夫妻は女性の活躍に期待していることから、女性従業員が働きやすいように、労働時間を15分単位の時給制にすることで、家事や子育ての合間でも働いてもらえるよう労働環境を整備している。

さらに、県内外で研修会等の講師として自身の技術を生産現場に惜しみなく還元しているほか、加温栽培のおうとうや、青森県独自のおうとう品種で令和2年に全国デビューした「ジュノハート」に関しての情報を積極的にマスコミ等を通して発信し、青森県のおうとうのPR活動も担うなど、生産者の中心的な存在として活躍している。

## 2. 対象経営を取り巻く環境

### (1) 立地条件

南部町は青森県の南東に位置し、県で第2位の人口を有する八戸市の西部に隣接し、町の中央部を1級河川である馬淵川が流れている。馬淵川の沿岸部は帯状に平野部が広がり、水稻や野菜栽培が行われている。町の南西部には町のシンボルである標高615mの名久井岳がそびえ、丘陵地帯では果樹栽培が盛んである。

気象は年平均気温が10.2℃、年日照時間が1,695時間、年降水量が1,131mmである。春の終わり頃から梅雨時期にかけての時期は「ヤマセ」と呼ばれる冷涼湿潤な北東風の影響で低温少照の日が多いが、夏は盆地特有で気温が高く、真夏日も珍しくない。秋から冬は太平洋型気候に類似しており、比較的少雪多照である。

交通は東北新幹線八戸駅から延びる青い森鉄道が町の中央を走っており、通勤や通学、観光等の交通手段として重要な役割を果たしている。また、岩手県安代から延びる高速道路八戸自動車道が町の南東部を走っており、八戸ICや南郷IC、一戸ICなどへのアクセスの利便性も高く、交通アクセスは比較的良い地域である。



図1 南部町位置図  
(南部町HPより)

### (2) 地域の果樹農業事情

青森県は全国のりんごの約6割を生産する日本一のりんご産地として知られているが、南部町ではりんごの他におうとう、うめ、西洋なし、もも、ぶどうなど多品目の果樹が栽培されており、りんご以外の果樹の栽培は、そのほとんどが県内の市町村別でトップの面積を誇っている。

2020年農林業センサスによる南部町の総農家数は1,368戸（うち販売農家数1,005戸）で、販売農家の約70%にあたる694戸で果樹が生産されている。地目別経営面積は町全体で1,866haあり、樹園地が752ha（約40%）で最も多く、次いで水田が615ha（約33%）となっている。

特におうとうの栽培が盛んで、昭和61年から開始した観光さくらんぼ園には、毎年県内はもとより、隣県や首都圏からも観光客が押し寄せている。

近年は、500円玉よりも大きく、大玉でハート形が特徴の青森県独自のおうとう品種である「ジュノハート」を積極的に導入し、現在では県内の「ジュノハート」の出荷量の約50%が南部町産となるなど、「ジュノハートのまち」としても積極的にPRを行っている。



図2 南部町にある防護柵



図3 南部町のふるさと納税の返礼品  
(ジュノハート)

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

##### ① 積極的な経営改善への取組

秀樹氏は昭和60年に大学卒業後就農し、りんご中心の経営から始め、昭和62年に経営移譲されてからは、経営主として積極的に経営改善に取り組んだ。昭和63年からは摘花・摘果剤の利用による作業の効率化を図るとともに、平成元年には有袋栽培から無袋栽培に切り替え、平成12年には、北斗主体のおい化園地をふじ主体に改植し、良品質安定生産のために、人工授粉+摘花剤の作業体系を組み込んだ。さらに、平成20年からはふじの着色系統である「コスモふじ」や、黄色品種で食味の良い「ぐんま名月」に積極的に更新し、着色管理の省力化に努めている。

##### ② おうとう栽培への挑戦

平成元年に収益性が落ち込んできた普通台のりんご園地90aのうち70aをおうとうに切替え、おうとう+りんごの果樹複合経営への転換を図った。

おうとう導入の理由としては、りんごに比べて所得率が高く、りんご宅配向けの顧客へのお中元商品として販売できるなどのメリットが大きいと考えたからである。おうとう導入と同時に、従来から栽培していたおうとう2本で雨よけの試験栽培を行い、平成6年からは計画的に雨よけ施設を導入し、現在では全ての露地栽培に雨よけ施設が導入されている。

また、平成7年には冬場の労働力の有効活用と所得向上を目指して、県内初のおうとう加温栽培を4.5aで試行し、安定生産の目処がたった平成9年に13a、平成17年に19.5a、平成22年に30aと順調に拡大している。

### ③ EC販売を取り入れ販路拡大

就農当時はりんごの市場価格が下落傾向にあったことから、それまでの農協や市場出荷主体からダイレクトメール等による宅配の拡大による所得向上を目指した。平成11年にはインターネット上のフリーマーケットに参画したほか、平成17年に立ち上げたホームページを令和2年にリニューアルし顧客の利便性を高めた。その結果、HP経由での注文が大幅に増え、今では販売額の約65%が宅配＋ECとなっている。



図4 留長果樹園のHP  
(<https://tomechou.com>)

## (2) 経営の状況

### ① 経営の柱になったおうとう栽培

全体の経営面積が420a、このうち加温栽培のおうとうが30a、露地栽培のおうとうが110a、りんごが280aの果樹複合経営であり、令和5年の収入のうちおうとうが加温、露地合わせて全体の54%を占めている。

### ② 有利販売と省力化を意識した品種構成

おうとうの加温栽培の品種構成は、早期出荷のメリットが大きく、主力品種である「佐藤錦」の授粉樹となる早生品種の「紅さやか」が30%、需要が多い「佐藤錦」が70%であったが、令和2年から青森県独自品種で高単価が期待できる「ジュノハート」についても加温栽培に取り組んでおり、「紅さやか」や「佐藤錦」からの更新で面積拡大を図っている。

露地栽培では、主力品種である「佐藤錦」が80%で、授粉樹の「紅さやか」が20%だが、加温同様に単価の高い「ジュノハート」を徐々に増やしている。

りんごについては、高温下でも着色しやすい優良系統のふじに切り替えるとともに、食味の良い黄色系品種を導入することで、着色管理の省力化を進めている。

### ③ 夫婦の役割分担と雇用の確保

当初は秀樹氏と佐智子氏で栽培管理及び事務作業をそれぞれ分担していたが、経営面積の増加に伴い、販売や雇用者の労務管理等に係る事務作業が増加してきたことから、現在では、秀樹氏が栽培管理全般を担い、佐智子氏が剪定以外の栽培管理に加え、パソコンによる簿記記帳や顧客管理及び雇用者の労務管理などの事務的な部分全般を担当している。また、販売方法や留長果樹園の箱のデザインなどは佐智子氏のアイデアによるものが多い。

雇用労働力は常時雇用1名のほか女性を中心としたパートを年間延べ544名雇用している。

### (3) 経営的特色

#### ① 多様な販売チャンネルによる有利販売への転換

就農後、それまでの農協や市場出荷主体の販売からダイレクトメールによる宅配を開始し、ゆうパックに参加するなど県外顧客の拡大を図り、収益性の向上と経営の安定化に取り組んだ。平成11年にインターネットのフリーマーケットへの参画、平成17年にホームページを開設するなど、自ら商品価格を決める売り方を行うことで、安定的な所得を確保している。

また、加温ハウスのおうとうは鏡詰めでの出荷に取り組み、農協経由で大阪や首都圏の高級百貨店等で有利販売を行っているほか、雨よけ栽培のおうとうを利用したお中元用ギフト商品や「ジュノハート」を留長果樹園独自の出荷箱にするなど販売先に合わせた商品を提供することで高単価での取引につなげている。

さらに、顧客には年間2回のダイレクトメールに加え、令和2年からはECサイトでのメールマガジンを通じて旬の情報を提供するとともに、顧客からも情報を積極的に収集し、そのニーズへの的確な対応を心がけている。



図5 加温栽培の鏡詰め



図6 留長果樹園オリジナルの箱  
(ジュノハート)

#### ② 女性が働きやすい雇用環境

おうとうの加温栽培を導入したことで、冬場も含めた周年での労働力が必要となったことから、年間労働力の均一化を図るために省力技術を導入するとともに、各作業のリーダーを決め、作業の効率化を図っている。

雇用は近所の女性が多いことから、パート従業員は、子供のいる女性でも働きやすいように労働時間を15分単位の時給制とし、家事や子育ての合間に働いてもらえるよう工夫している。

#### ③ 経営管理の合理化

平成8年から本格的にパソコンによる複式簿記記帳や顧客管理ソフトを導入したほか、令和2年には輸送業者と連携した流通システムを導入し、ネット上で伝票発送等ができるようにしている。また、EC販売の管理については、令和2年のHP

のリニューアルに伴い、佐智子氏がシステムの内容を理解した上でコンサルタントに委託することで、円滑な販売につなげるなど、経営管理や顧客管理等の合理化に努めている。

#### (4) 技術的特色

##### ① 青森県唯一のおうとう加温栽培

青森県内で初のおうとう加温栽培に取り組むにあたり、先進地である山形県の篤農家の指導を受けながら、試行錯誤を重ねた。結実量の多少が収支を大きく左右することが判明したこともあり、人工授粉に加え蜜蜂授粉により確実に結実させている。加温栽培では、温度が高いと果実が傷みやすくなり、逆に温度を下げると湿度が上がり、裂果が増えてしまうため、きめ細かな温湿度管理が重要となるが、当初は指導を受けた山形と青森の気象条件の違いに苦戦したものの、夜2回のハウスの見回りや、暖房機のダクトの穴あけなどの工夫により、ようやく当地に適した栽培技術を確立し、高品質、安定生産を実現した。

近年、新たに取り組んでいる「ジュノハート」の加温栽培では、当初は結実せず苦労したが、持ち前のチャレンジ精神で現在も試行錯誤を重ねており、独自の試験栽培により「佐藤錦」との開花前の適正温度の違いや低温要求量の違いなどを明らかにし、試験研究機関にも提案してその結果を確認しながら実践している。

##### ② 露地栽培おうとうの高品質化

留長果樹園では、「おいしい果実を生食で提供したい」という強い思いから、全ての露地栽培の園地に雨よけ施設を導入し、おうとうの収穫時期である6～7月の梅雨の時期であっても、裂果防止と高品質化に努めている。

また、防霜ファンの設置により健全花を確実に確保してから、蜜蜂による授粉を主体として省力化に努めるほか、授粉樹の適正配置により気象変動が大きい中で安定的に結実を確保している。

##### ③ 積極的な省力化技術の導入

経営規模が大きく、雇用の依存度が高い中で、積極的に省力化技術を導入している。

りんごの摘花・摘果時期は、おうとうの収穫時期と重なることから、摘花・摘果剤を使用しており、特に摘果剤は園地の花の咲き具合から適期を半日単位で判断し、一つなり摘果の手間を減らすことで、おうとうの着色管理や収穫作業に雇用労働力を集中するようにしている。

また、りんごはふじの着色系や着色管理の必要がない黄色品種を一部導入することで、着色管理の労力を可能な限り減らし、作業の効率化を図っている。

## (5) 地域への波及効果

### ① 地域をけん引する指導者

秀樹氏のおうとうの栽培技術は県内でもトップクラスであり、指導者としてその技術を惜しみなく県内外に還元するとともに、生産者の栽培技術向上のため、剪定講習会や栽培講習会の講師を務めるほか、おうとう加温栽培の技術向上を目的に設立された農業技術研究グループである「全国エンドー会（会員は東北を中心に約50名）」において3名しかいない指導農業士に認定され、県内はもとより、全国各地においても、その技術を普及・指導している。

さらに、加温栽培や「ジュノハート」に関する情報もマスコミ等を通じて積極的に発信しており、青森県南部町のおうとうのPRの一翼を担っている。

これらの実績が認められ、平成21年に地域農業のリーダーである青森県農業経営士に認定されているほか、令和4年からは八戸農協の果樹部会おうとう専門部長を務めるなど、担い手育成や地域農業の発展に貢献している。

### ② 担い手の育成

研修会等での講師のみならず、県内外から後継者等の研修生を積極的に受け入れ、自らの経験や栽培技術を伝授するなど担い手の育成に努めている。また、県の普及指導員や大学の実習生の受入れも行うほか、若手農業者等から経営や青色申告等についての相談にも応じるなど、後進の指導に熱心に取り組んでいる。



図7 研修会で講師を務める秀樹氏



図8 高級果実専門店での「ジュノハート」をPRする秀樹氏

## (6) 今後の経営展開

### ① 「ジュノハート」の生産拡大

「ジュノハート」は加温栽培での結実等の課題もあったが、品質や評価には手応えを感じており、現在の「佐藤錦」中心の品種構成から、全体の約7割まで「ジュノハート」の生産割合を高めていく予定である。

また、「ジュノハート」は青森県が南部町などとともにブランド化に取り組んで



いるため、高品質安定生産技術を確立・普及し、出荷量の拡大や知名度の向上に向けた地域のけん引役として積極的に取り組んでいく意向である。

## ② りんごの品種更新

これまでおい化栽培を進めてきたが、温暖化によって果肉の軟化や着色不良等、品質面で課題が見られるようになったことから、引き続き優良着色系統への品種更新や黄色品種の導入を進めるとともに、開心形の間接台方式の栽培の拡大に取り組むことで、高いレベルでの高品質化と省力化を進めていく。

## ③ 販売力の強化

おうとうの加温栽培は、品質が評価され高値での販売が期待される大都市圏の百貨店を中心に、生産量を増やしながらかつて継続出荷するとともに、将来的には海外への輸出も視野に入れている。

また、りんごや雨よけ栽培のおうとうでは、約1,500名の顧客への直接販売等を継続するほか、「ジュノハート」等の積極的な情報発信による新たな顧客の獲得も進め、安定的な収益を確保していく。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹専業・おうとう（露地・加温）、りんご複合
----------	------------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	420 a
水田	a
普通畑	a
果樹園	420 a

### (2) 果樹品目別面積 (1)の「果樹園面積」の内訳

品目	栽培面積 (うち成園)
① 露地おうとう	110 a ( 110 a )
② 加温おうとう	30 a ( 30 a )
③ りんご	280 a ( 220 a )

## 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
冷蔵庫	1	30 坪	S53	
トラクター	1	30PS	S61	
おうとう加温設備	4	ボイラー、自動換気装置、置灌水装置	H7, 9, 17, 22	
マニュアルスプレッダー	1	0.5 t	H8	
草刈機	3	乗用	H22, 29, R3	
開葯機・自動葯採取器	2		H21, 29	
自動車	3	軽トラック、軽ワゴン、2t ダンプ	H17, 19, 26	
スピードスプレーヤ	2	1,000ℓ、400ℓ	H27, R1	
フォークリフト	1	1 t	H27	
りんご選果機	1	7 レーン	H28	

### (2) 主要施設

摘要	構造	規模 (面積・延長等)	建築年	備考
倉庫	木造	145 坪	S30	冷蔵庫
鉄骨舎	鉄骨	40 坪	S39	
管理小屋	木造	24 坪	S41	
農具舎	木造	82 坪	S54	選果機
おうとう加温施設	パイプハウス	4.3a, 8.5a, 6.5a, 7.5a (施設面積)	H7, 9, 17, 22	
おうとう雨よけ施設	パイプハウス	110a	H6, 8, 16, R2, 3	
防風網	鉄骨支柱	69.3m	H29	
防霜ファン	鉄骨支柱	170a 21 基	H7, 27, R3	

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分担作業
					品目① (露地おうとう)	品目② (加温おうとう)	品目③ (りんご)	
	本人	61	240	240	60	40	140	栽培管理全般 栽培管理全般 (剪定以外) 労務・販売・顧客 管理、簿記記帳
	妻	57	240	240	80	60	100	
雇 用	常	性別	年令	年間雇用日数				
	雇	男	36	250				
	臨時雇用	11人	延べ雇用日数			544 (人・日)		

(2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
露地おうとう	204.0 ( 130 )
加温おうとう	347.0 ( 277 )
りんご	230.0 ( 168 )

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a 当たり
露地おうとう	a	a	a	kg	kg	kg	kg	kg
	100	100	110	3,938	2,364	3,448	3,250	315
加温おうとう	30	30	30	2,033	1,320	1,792	1,715	572
りんご	167	201	220	26,233	31,812	33,884	30,643	1,563

5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配合)	観光園	その他
露地おうとう	%	%	%	%	%	%	%
	23	—	—	9	68	—	—
加温おうとう	69	—	—	14	17	—	—
りんご	—	21	—	10	69	—	—
				EC 含む			

## 6. 園地の状況

### (1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
S60	りんご	70a	王林・北斗に改植（わい化）	補助事業
H元	りんご	20a	デリス系をふじに改植（わい化）	補助事業
〃	おうとう	70a	りんごをおうとうに改植	自己資金
H7	おうとう	4.3a	加温栽培施設設置	スーパーL資金
〃	りんご	15a	防霜ファン設置（3基）	自己資金
H9	おうとう	8.5a	加温栽培施設増設	スーパーL資金
H12	りんご	70a	北斗をふじに改植（わい化）	自己資金
H17	おうとう	6.5a	加温栽培施設増設	スーパーL資金 補助事業
H20	りんご	30a	着色系ふじとぐんま名月に改植（わい化）	補助事業
H22	おうとう	7.5a	加温栽培施設増設	補助事業
H27	りんご	35a	防霜ファン設置（4基）	補助事業
〃	りんご	37a	着色系ふじとぐんま名月を新植（わい化）	補助事業
H29	りんご	32a	着色系ふじとぐんま名月に改植（わい化） 防風網設置 69.3m	補助事業
R2	りんご	32a	着色系ふじとぐんま名月に改植（わい化）	補助事業
R2	おうとう	11a	雨よけ栽培施設設置	補助事業
R3	おうとう	2a	雨よけ栽培施設設置	自己資金
R3	りんご、おうとう	120a	防霜ファン設置（13基）	補助事業
R5	りんご	13a	着色系ふじとぐんま名月に改植（わい化）	補助事業

### (2) 現在の園地の状況

園地は分散されているが、全園地が自宅から車で10分程度で行ける距離である。
ほとんどが傾斜の無い園地である。
公道に近い園地が多く、管理作業や収穫物の搬出入の時間は短い。
おうとう加温ハウスは自宅の近くにある。
生育に合わせた水分管理を徹底するため、井戸や水源を確保している。

## 7. 10a 当たり総労働時間

	品目① (露地おうとう)	品目② (加温おうとう)	品目③ (りんご)
	時間(うち雇用)	時間(うち雇用)	時間(うち雇用)
整枝・剪定	24.0(18)	18.0(17)	29.0(17)
施肥	3.0(1)	3.0(2)	3.0(2)
中耕・除草	3.0(1)	4.0(3)	4.0(1)
薬剤散布	9.0(1)	8.0(0)	8.0(0)
授粉・摘果	22.0(20)	29.0(22)	25.0(24)
蒞かけ・防風・防霜管理	25.0(16)	37.0(20)	
かんがい・その他管理	21.0(12)	14.0(5)	35.0(27)
収穫・調製	50.0(36)	100.0(91)	52.0(45)
生産管理労働	17.0(9)	10.0(7)	20.0(6)
生産関係労働時間計	174.0(114)	223.0(167)	176.0(122)
選別・包装・荷造り	28.0(15)	120.0(110)	50.0(44)
搬出・出荷	2.0(1)	4.0(0)	4.0(2)
小計	30.0(16)	124.0(110)	54.0(46)
合計	204.0(130)	347.0(277)	230.0(168)

8. 写真



○趣味の登山を楽しむ秀樹氏と佐智子氏



○りんごの選果を行う留目秀樹氏



○加温ダクトの穴の位置も試行錯誤を重ねた



○おうとうの箱詰めを行う女性従業員



○加温栽培のジュノハート

# 栗野 寿広

住所及び氏名

住所 茨城県 下妻市

氏名 あわの としひろ 栗野 寿広 (46歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

栗野氏は、茨城県の西部に位置する下妻市で、市場出荷型のナシ大規模経営を営んでいる。下妻市は、平坦なほ場で作業効率が高く、東京へのアクセスが良いため、市場出荷に有利な立地となっている。

栗野氏は、ナシ4.1ha、水稻7.0haを、家族3名(本人、両親)、常時雇用1名、研修生1名、臨時雇用で経営している。経営の基本方針は「ナシの規模拡大」で、目標規模は7haとしている。目標到達に向け、以下の3つの課題解決に取り組んでいる。

#### ① 労力の確保

今後の規模拡大には、新たな常時雇用が3~4名必要であり、就農相談会への参加、学生や地域おこし協力隊の研修受入を積極的に行っている。令和5年度から1名の協力隊員が研修中であり、新たに2名の学生が次年度からの研修を検討している。

#### ② 園地の確保

地域の離農園地を集積することが多い。生産性の低下した高齢樹園であることも多く、生産性向上のため、改植を基本方針としている。改植に際しては、省力・低コスト化が図れ、改植後の未収益期間を最小限に抑えられるジョイント栽培を導入している。

#### ③ 生産性の向上

ジョイント栽培の導入、高齢樹の樹勢回復を実現する剪定技術等による生産性向上により、露地ナシの平均単収は、産地平均の124%となっている。

これら①~③の取組もあり、栗野氏の経営規模は、直近10年間で2.2haから4.1haに拡大し、ナシの粗収益は大きく増加した。

栗野氏の経営理念は、「強い産地があってこそその個人の経営発展」である。市場出荷において、産地の出荷数量は大きな力となる。また、栽培技術の切磋琢磨や災害時の助け合い等、産地の存在は経営発展に欠かせない。この理念のもと、栗野氏はこれまで、産地の発展にも大きく寄与してきた。

消費者ニーズを捉え、完熟で食味の良いナシを商品化した「しもつまかんじゅくなし下妻甘熟梨」の開発プロジェクトを、構想段階から17年間、リーダーとして牽引してきた。本商品開発の実績は産地関係者の自信となり、その後の海外輸出等のチャレンジにつながる大きな

一步となった。

栗野氏の経営事例は、今後、縮小が予想される国内の果樹産業に明るい変化をもたらす一つの提案になると考え、今回の推薦理由とするものである。

## 2. 対象経営を取り巻く環境

### (1) 立地条件

茨城県の西部に位置する下妻市は、標高23.4mで、市の東西を流れる小貝川、鬼怒川周辺の沖積土壌地帯と、両河川に囲まれたなだらかな台地の黒ボク土壌地帯に分けられる。ナシは、その両地帯の生産効率の高い平地で生産されている。

年間の平均気温、降水量、日照時間の平年値は、それぞれ14.3℃、1,232mm、1,978時間であり、ナシの栽培に適した気候となっている。

下妻市は東京から約60km圏に位置し(図1)、栗野氏の所属するJA常総ひかり下妻梨共同選果場からは、京浜市場及び県内市場へ効率的なナシの輸送が可能である。



図1 下妻市の東京からの距離と交通網  
(下妻市HPより)

### (2) 地域の果樹農業事情

#### ア. 市場出荷型の大規模産地形成

下妻市では、昭和に入り、葉タバコやクワからナシへの品目転換が進んだ。昭和40年代後半以降には、地域の出荷組合が統合し、下妻梨第一選果場及び第二選果場が建設された。共選共販体制が整備されたことで、出荷調整作業が大幅に効率化し、各経営体の規模拡大が促進された。令和5年度には、第一選果場と第二選果場の合併により、JA常総ひかり下妻梨共同選果場(以下、「選果場」)が発足した。

現在、下妻市のナシは、選果場と他のナシ出荷組合等が集まり、「下妻市果樹組合連合会(以下、「下妻市果樹連」)」として、市場出荷型の大規模産地を形成している。下妻市果樹連所属の生産者は94戸(ナシ生産者)で、ナシ栽培面積は約90ha、販売金額は約10億円である。

## イ. 消費者に選ばれる産地を目指す、様々なチャレンジ

平成10年頃からの市場単価の低迷、生産者の高齢化等への対策として、下妻市果樹連は、平成19年からブランド化や販路拡大等の様々なチャレンジを開始した(表1)。

これら一連の取組が評価され、令和元年には、第29回日本農業賞(集団の部)で大賞を受賞した。

表1 消費者に選ばれる産地を目指す主な取組

課題	ブランド化推進	販路拡大	安全安心なナシづくり	年間を通じたPR	生産性向上
テーマ	差別化商品の開発 「下妻甘熟梨」 「輝(ひかり)」	海外輸出推進	GAP推進	加工品 「梨リキュール」開発	新・改植推進のための 2年生大苗共同育苗
内容	<p>・「下妻の梨PRプロジェクトチーム」による、完熟に近い、食味にこだわった商品づくり。 ・その後の産地の様々な課題解決へのチャレンジにつながるきっかけとなった。</p>  <p>「下妻甘熟梨」専用箱</p> <p>・光センサーを利用した糖度保証の商品づくり。</p>  <p>「輝(ひかり)」専用箱</p>	<p>・H25から輸出開始。ベトナム等東南アジア、米国に輸出している。 ・下妻市は、国内最初のベトナム輸出解禁産地となり、最盛期にはベトナムへの出荷量は150tに増加した。</p>  <p>タイでの試食アンケート</p>	<p>・下妻市果樹連内に「GAP推進チーム」を組織し、茨城県GAP認証を取得。</p>  <p>県GAP審査の様子</p>	<p>・地元酒造メーカーと連携した6次産業化を推進。加工品ができたことで、年間を通じた産地PRが可能になった。</p>  <p>「梨のリキュール」</p>	<p>・希望本数に応じて、産地共同で大苗を育成。2箇所の育苗施設で苗を集中増殖。 ・下妻市果樹連青年部が1年生苗木をポットに移植し、共同育苗施設への運搬を担っている。</p>  <p>大苗育成施設(自動灌水で年間500本以上を育苗)</p>  <p>下妻市果樹連青年部によるポット移植</p>

## ウ. 産地規模の維持発展に向けた新たな取組(担い手対策)

下妻市果樹連、JA常総ひかり、下妻市、県が強く連携し、市場出荷型産地の強みとなるロット(出荷数量)確保のため、以下の3つの課題に対し、体制整備に取り組んでいる。

### ① 担い手の確保

東京や県内の就農相談会に積極的に出展し、現在、県外からの地域おこし協力隊2名、県立農業大学校卒業生3名が、栗野氏を含む大規模経営体2戸に、常時雇用または研修生として参入している。今年度も、新たに8名(6組)の産地見学者を受け入れている。



## ②園地(成園)の確保

新規参入者独立の際、すぐに収入が得られる成園を斡旋できるよう、離農園地を産地が預かり維持管理する取組「下妻市果樹園地継承事業」(図2)を、令和5年度から開始した。

### 離農園地を担い手に集積 「下妻市果樹園地継承事業」

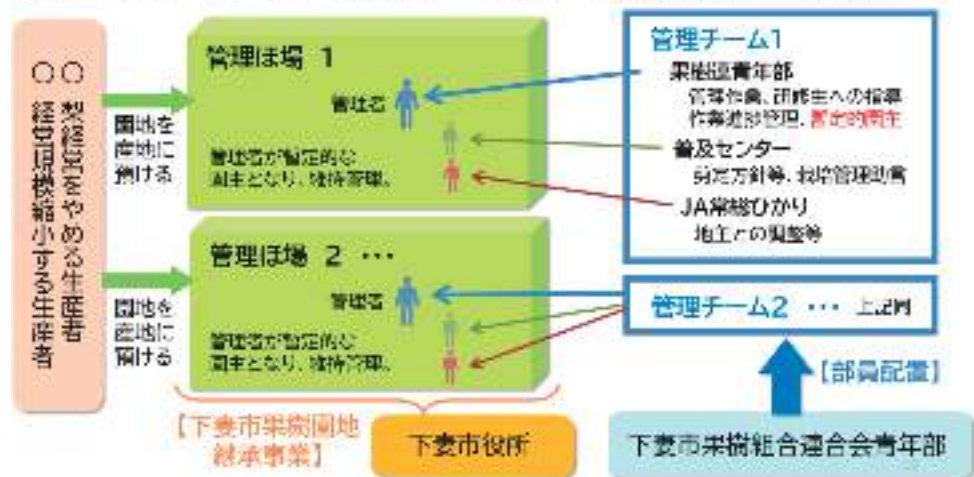


図2 「下妻市果樹園地継承事業」の模式図

## ② 研修受け皿の確保

新規参入者の産地受入には、栗野氏のように常時雇用により研修生の受け皿となる大規模経営体の存在が欠かせない。現在、栗野氏ら2戸がその役割を果たしているが、今後の離農園地の増加を考慮すると、新たな大規模経営体の育成が急務である。

## 3. 対象経営の概況

### (1) 経営の履歴

#### ア. 栗野氏の略歴

東京農業大学卒業後、24歳で実家のナシ経営(2.1ha)に就農した。就農当初は、父親から技術を学ぶとともに、部会や農業改良普及センターの講習会に積極的に参加し、知識、技術の習得に努めた。

30歳で父親から経営を継承し、経営主になると、繁忙期に積極的に臨時雇用を導入し、所得向上のため、規模拡大の方法を模索し始める。

37歳の時、規模拡大のためには、常時雇用労力の導入は避けて通れないと考え、家族経営中心のナシにおいては先進的に、県立農業大学校の卒業生を常時雇用した(現在も雇用中)。

また、自身の資質向上のため、農業分野外の活動にも積極的に参加してきた。40歳まではJC(公益社団法人日本青年会議所)に所属し、企画の立案・運営や他産業との交流の経験を積み、農業を多様な視点から評価することができるようになった。

令和4年(44歳)には、下妻市果樹連青年部の部長に就任した。

これまでの経営発展と、それを裏付ける高い栽培技術、ジョイント栽培導入等による生産性向上が評価され、令和5年度には、茨城県果樹生産力向上共励会において、個人の部で最優秀の農林水産大臣賞を受賞した(写真1)。



写真1 農林水産大臣賞授賞の様子  
(左から2人目が栗野氏)

## イ. 栗野氏の経営発展

就農当初2.1haだった経営は、常時雇用導入を経て規模拡大を続けてきた。当時、家族以外の人材を常時従業員として迎え入れることには迷いもあったが、結果として、労力の増加により管理作業にも一層手が入るようになり、単収は増加した。所得も増加傾向にあり、今年も昨年の所得を上回る見込みである。

栗野氏のもとには、離農するナシ生産者から、「園地を借りてもらえないか。」という相談が絶えない。この離農園地を集積することで経営規模は順調に拡大し、新植ほ場も含めて、現在、県内最大の4.1haとなっている。

## ウ. 産地発展に対する栗野氏の関わり

平成19年から産地で取組が始まった「下妻甘熟梨」の商品開発においては、栗野氏が、地域の若手有志とともに「下妻の梨PRプロジェクトチーム」を立ち上げ、チームのリーダーとして、商品の生産、販売を実現させた(写真2)。また、地元商工会とも連携し、加工品「梨のリキュール」の開発に取り組んだ際も、栗野氏がプロジェクトのリーダーとしてPRを行い、商品定着に大きく貢献した。

また、下妻市が海外輸出を開始したきっかけは、栗野氏らがタイで開催された



写真2 店頭で「下妻甘熟梨」をPRする栗野氏

イベントで、ナシの試食PR、アンケート調査(500名から回答)を行い、海外でのナシの需要について、好感触を得たことである。

令和5年度から開始した「下妻市果樹園地継承事業」(図2)においては、栗野氏が部長を務める下妻市果樹連青年部が、離農園地の維持管理の役割を担い、今年度、3ほ場(計90a)の離農園地の確保を実現した。

また、新規就農者の育成に関しては、自身の経営に研修生を受け入れ、独立に向けて指導を行っており、数年後には、地域内で研修生を独立させる計画である。

## (2) 経営の状況

ナシと水稲の複合経営であり、粗収益及び労働時間ともにナシが9割以上を占める。ナシは市場出荷で、粗収益は直近10年間で約2倍となり、21年前の就農当時から見ると約4倍の増加となっている。

ナシの作型は、露地栽培がメインであるが、ハウス栽培も導入し、労力分散、気象災害のリスク低減、収益向上を実現している。品種構成は表2の通り、「幸水」を中心に、茨城県育成のオリジナル品種「恵水」の導入を積極的に進めている。

表2 ナシの作型、品種の構成(未成園も含む)

作型	ハウス		露地					合計 (R6)
	幸水	豊水	恵水	あきづき	新高	王秋等		
面積(a)	17	253	40	50	20	27	3	410
比率	4%	62%	10%	12%	5%	7%	1%	100%

規模拡大実現のための労力確保については、県立農業大学校の校外学習、長期派遣実習の受入、就農相談会への参加(写真3)により、学生の雇用労力確保に努めている。また、地域おこし協力隊の研修受入も行っている。



写真3 県立農業大学校で就農相談に対応する栗野氏

## (3) 経営的特色

産地で初めて常時雇用を導入し、家族経営の限界とされる2.0haを大きく超える規模拡大を実現した。ナシの粗収益、所得は産地平均を大きく上回る。経営面積の数字的变化としては、10年前から年間平均19aずつの緩やかな増加とも言えるが、常時雇用就農者の人材育成のペースに沿った、着実な経

営拡大としている。

栗野氏は、経営の右腕となる人材育成にも力を入れている。現在就農10年目となる雇用就農者に対しては、技術指導だけでなく、各作業の時間配分や臨時雇用者に対する作業指示の出し方、地域のナシ生産者との接し方に至るまで、丁寧に伝えてきた。現在、この雇用就農者は、概ねすべての管理作業を1人でこなすことが可能で、研修生の指導役として給与に手当てが上乘せされており、経営に占める役割は大きい。

また、規模拡大時にジョイント栽培を導入する経営上のポイントは、定植後3年目から収穫可能であることに加え、3年目以降増加する年次ごとの収穫量が予測しやすいことである。栗野氏は、各ジョイント栽培ほ場の育成年次から、向こう数年間の収量及び粗収益増加の年次変化を計算し、新植・改植に伴う経費の増加と照らし合わせて、所得が毎年向上するよう、計画的に経営している。

#### (4) 技術的特色

栗野氏のジョイント栽培導入面積は95aで、今年度110aまで拡大予定である。県内の技術的リーダーとして、各研修会等でも助言者として活躍している(図3)。ジョイント栽培の省力効果を自ら実測調査し、慣行の3本主枝栽培に比べ摘果で70%、剪定で61%まで単位面積あたりの労働時間を削減できることを確認している。また、作業の簡易化により、雇用労力導入にも非常に有利な技術と評価している。

産地の大苗共同育苗ほの管理者にもなっており、ジョイント栽培用の大苗(2年生ポット苗)育成にも自ら取り組んでいる。

ジョイント栽培では、品種ごとに骨格枝からの新梢発生や花芽着生の程度が異なるため、品種特性に合わせた剪定、新梢管理を行っている。

また、害虫防除における昆虫性フェロモン剤の導入に取り組むとともに、毎年、全園地(25ほ場)の土壌診断に基づく適正施肥を励行し、環境にやさしい農業の実践に努めている。

県GAP認証取得の際には、下妻市果樹連のGAP推進チーム員も務めている。



図3 栗野氏が事例となったジョイント講習会資料(抜粋)

#### (5) 地域への波及効果

##### ア. 課題解決に向けた産地のチャレンジ精神を育んだ

栗野氏がリーダーを務めた「下妻甘熟梨」の商品開発においては、産地内での取組

への理解を得るための連絡調整、関係機関との連携はもちろん、売り先との交渉まで、様々な課題解決の壁が立ちはだかった。産地一丸となってこの壁を乗り越え、産地に新たな動きを定着させた経験は、下妻市果樹連はもちろん、JA、市、県関係者の自信につながり、産地課題に対するチャレンジ精神を産地内に生み出した。このことが、その後の海外輸出や加工品開発等の取組につながった。

## イ. 大規模ナシ経営モデルとしての役割

栗野氏は、産地の維持発展のためには、常時雇用を導入した大規模経営体を自身以外にも育成することが不可欠と考えている。まず、自身が規模拡大による魅力的な経営事例を実践し、若手のモデルになれるよう心掛けていく。

## ウ. 産地規模を維持することの重要性を発信

「下妻市果樹園地継承事業」では、下妻市果樹連青年部が離農園地を維持管理する。栗野氏は、産地規模を維持することは、自分たち個人の経営を維持発展させることにもつながっていることを説明し、労力的負担が大きい等の意見を持つ同青年部員を説得した。

また、規模拡大による常時雇用は、産地の新たな担い手育成でもあることを、会議で繰り返し発言している。

これらの結果、下妻市果樹連青年部の数名が規模拡大に取り組み始めており、1名の青年部員は、栗野氏からの助言を受けながら、常時雇用3名(うち研修生1名含む)を導入し、就農からわずか6年で3.6haを超える大規模経営を実践するまでになった。

## (6) 今後の経営展開

### ア. 個人の経営発展に向けて

ナシは、技術で単収が大きく変化する品目であるからこそ、雇用就農者の技術向上は、単収の増加につながることを実感しており、経営方針である7.0haへの規模拡大のため、今後も、常時雇用導入を推進する。

また、離農園地の集積による規模拡大も継続する。課題としては、分散したほ場の集約、団地化による営農の効率化が挙げられる。団地化に関して、個人で地権者の同意を集めることは非常に困難であり、現在は、他の大規模経営体と連携し、換地を行うことで、ほ場間の移動コストを削減する取組を検討している。

栗野氏の経営を継承するのは、従業員となる可能性もあると考え、法人化も検討している。自身のリタイアまでに、経営継承できる人材を育成するとともに、生産性の高い園地を次の代に継承できるよう、高齢樹園は、積極的にジョイント栽培への改植を進めていく。

## イ. 産地の維持発展に向けて

担い手確保は、産地にとっても重要課題である。市場出荷産地の強みである産地のロットを増加させることを第一に考えていく。

「下妻市果樹園地継承事業」を確立するためには、さらに多くの新規参入者を確保、育成することが必要である。就農相談会への積極的な参加とともに、研修受入可能な大規模経営体を早急に育成することが必要であり、今後も栗野氏は、大規模経営体のモデルとしての役割を担っていく。

## II. 経営概況

経営 類型	水稲との複合・ナシ（市場出荷型の大規模経営）
----------	------------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	810 a
水田	400 a
普通畑	0 a
果樹園	410 a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積 (うち成園)
①ナシ(露地)	393 a ( 340 a )
②ナシ(ハウス)	17 a ( a )
③水稲	400 a ( a )
④	a ( a )
⑤	a ( a )

## 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
スピードスプレーヤー	2	1,000リットル、600リットル	R1、H26	
トラクター	3	47ps、低床23ps、21ps	H21、H11、R1	
乗用草刈機	1		R1	
運搬車	3		H16、H21、R1	
トラック	4	1t車、軽、軽、軽	H16、H8、H20	

### (2) 主要施設

摘要	構造	規模(面積・延長等)	建築年	備考
作業場	鉄骨	65坪	H10	
機械格納庫	パイプハウス	40坪	H14	
果樹棚		410a		
ビニールハウス	パイプハウス	60a		(内訳) 被覆栽培 17a 露地栽培 43a
網張り棚		185a		多目的防災網 展開用

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分担作業
					品目① ( ナシ )	品目② ( 水稻 )	品目③ ( )	
	本人	46	315 日	300 日	300 日	15 日		全般
	父	79	300 日	280 日	280 日	20 日		薬剤散布以外の 全般
	母	76	150 日	150 日	250 日	0 日		〃
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用 日数	/			全般
		男性	28	280				
		臨時雇用 5 人 (研修生含む)	延べ雇用日数		420 (人・日)			(臨時雇用)受 粉、摘果、収穫 等 (研修生)薬剤散 布以外の全般

(2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
ナシ(露地)・幸水	246.3 時間
ナシ(ハウス)・幸水	291.4 時間

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3 年)	前年産 (R4 年)	当年産 (R5 年)	前々年産 (R3 年)	前年産 (R4 年)	当年産 (R5 年)	3 か年平均	
							収穫量	10a 当たり
ナシ(露地) ・幸水他	318 a	318 a	323 a	82,980kg	66,400kg	90,250kg	79,877kg	2,501kg
ナシ(ハウス) ・幸水	17 a	17 a	17 a	4,350kg	4,300kg	4,630kg	4,427kg	2,604kg



5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配合)	観光園	その他
ナシ(露地) ・幸水	100 %	%	%	%	%	%	%
ナシ(ハウス) ・幸水	100 %	%	%	%	%	%	%

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年 次	対象品目・品種	面 積	整 備 等 の 内 容	備 考
H22	ナシ・幸水	25a	区画整理による園地集積	
H26	ナシ・幸水他	30a	多目的防災網の更新	
H28	ナシ・豊水	30a	ジョイント栽培への改植	
H30	ナシ・幸水・恵水	20a	ジョイント栽培への改植	
R1	ナシ・幸水等	25a	多目的防災網の更新	
R2	ナシ・幸水	13a	ジョイント栽培への改植	
R3	ナシ・恵水	30a	更地への新植(ジョイント栽培)	
R3	ナシ・幸水他	20a	多目的防災網の更新	
R6	ナシ・恵水	15a	更地への新植(ジョイント栽培)	

(2) 現在の園地の状況

園地に傾斜は無く、農道に接しており、作業効率は良い。
一方、離農園地の集積による規模拡大のため、園地が分散しており、R6 現在で、25 箇所のほ場で経営している。給水可能な井戸は数カ所確保している。
園地の団地化(集約)を目指し、地権者を回って説得を試みたが、地権者の県外移住等も多く、難航しており、現在は、離農園地の集積に併せて、ほ場近くの更地を借りて新植する戦略も進めている。
また、雹害等の自然災害に左右されない経営を確立するため、多目的防災網の設置も進めている。

7. 10a 当たり総労働時間

	品 目 ① ナシ(露地)	品 目 ② ナシ(ハウス)	品 目 ③ ( )
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整 枝 ・ 剪 定	72.5 (14.5 )	81.0 (16.2 )	( )
施 肥	8.4 ( 1.68 )	1.1 (0.22 )	( )
中 耕 ・ 除 草	2.7 ( 0.54 )	4.4 (0.88 )	( )
薬 剤 散 布	4.0 ( 2.0 )	3.2 (1.6 )	( )
薬剤以外の防除	2.8 ( 1.4 )	( )	( )
授 粉 ・ 摘 果	88.5 (17.7 )	92.8 (18.56 )	( )
袋 か け	( )	( )	( )
菰かけ・防風・防霜管理	6.9 ( 1.38 )	32.0 (6.4 )	( )
かんがい・その他管理	12.8 ( 2.56 )	16.7 (3.34 )	( )
収 穫 ・ 調 製	46.2 ( 9.24 )	45.6 (9.12 )	( )
生 産 管 理 労 働	( )	( )	( )
生産関係労働時間 計	244.8 ( 51 )	291.4 (58.28 )	( )
選別・包装・荷造り	( )	( )	( )
搬出・出荷	1.5 ( 0.75 )	( )	( )
販売	( )	( )	( )
小 計	1.5 ( 0.75 )	( )	( )
合 計	246.3 ( 51.8 )	291.4 (58.28 )	( )

## 8. 写真



写真4 高齢樹の生産性向上  
優れた剪定技術で、樹勢を回復しながら多収を実現している。ジョイント栽培だけでなく、慣行の3本主枝栽培でも生産性は高い。



写真5 ジョイント栽培の様子(剪定後)  
集積した園地をジョイント栽培に改植した園。作業同線が直線になり、初心者にも作業しやすい。改植時には、果樹棚の修繕も行う。



写真6 県立農大の授業の講師を務める様子  
果樹専攻の学生に対し、ナシの経営やジョイント栽培の技術について説明。授業をきっかけにナシへの就農に興味を持つ学生もいる。



写真7 東京の就農相談会の様子  
就農相談に対応する様子。独立時に成園を確保できる「下妻市果樹園地継承事業」への関心は高く、産地見学者数の増加につながっている。



写真8 「下妻甘熟梨」のほ場巡回の様子  
(左から1番目が栗野氏)「下妻甘熟梨」を栽培するメンバーと生育状況を確認。互いの園を見比べて、栽培についての意見、情報を交換。



写真9 大学生に摘果作業を指導する栗野氏  
「下妻の梨PRプロジェクトチーム」では、筑波大学のPRサポーター育成の取組も行った。摘果、収穫の体験と試食販売PRを実施。

# 忽那 恵雄・忽那 葉子

## 住所及び氏名

住所 愛媛県 松山市

氏名 くつな しげお 忽那 恵雄 (73歳)・くつな ようこ 忽那 葉子 (71歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

忽那恵雄氏は、夫婦・息子の家族3人で施設柑橘栽培42aを柱に、当JAでもトップクラスの収入を誇る優れた経営手腕の持主である。

氏は昭和46年4月に20歳で就農した。当時は、温州、宮内伊予柑など山間部で急傾斜地の園地しかなかったが、アメリカの園地視察や平成3年台風19号の甚大な被害を契機に基盤整備に取り組んだり、平坦な園地の導入を進めていった。その後、清見やカラマンダリン、不知火、せとか等中晩柑類を導入し作業の分散化を図った。近年は愛媛果試第28号を計画的・積極的に施設化に取り組んできた。現在は園地645aのうち42aで施設愛媛果試第28号の栽培を中心に、安定した所得を確保している。今年8月には、後継者に経営移譲をする予定で、経営内容の見直しや品種更新に取り組んでいる。また、平成28年えひめ・みかん祭りほ場コンクールにて農林水産大臣賞（愛媛果試第28号）、平成29年えひめ・みかん祭りほ場コンクール愛媛県知事賞（未結果愛媛果試第28号）を受賞するなど優れた栽培技術を有している。自らは安定した経営に努めると共に支部支部長、支部生産部長を歴任され、地元組合員の生産意欲・所得の向上に向け活躍された功績は多大である。

以上のことにより、氏は栽培技術に優れ、経営は生産性が高く、所得は水準以上であることから、地域農業の模範となり、地域農業の発展に繋がるものと高く評価しここに推薦いたします。

### 2. 対象経営を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

##### ①気 象

松山市の年間平均気温16.8℃、降水量1,400mm、日照時間2,000時間と、降雨が少なく日照時間が長い。中島地区は冬季も温暖で降霜もほとんどなく温暖な気候である。

##### ②地 形

松山港の沖合約10kmの忽那諸島は全域が国立自然公園に指定されている。一番大きな中島は、花崗岩を母岩とする砂壤土で水はけが良く柑橘栽培に適している。

### ③水 利

大きな河川が無い中島では、農業用水の確保のため各地区にため池を設置しているが農業としては小規模で自然の流水が少ないため夏場の干ばつ時には不足することも多い。そのため個人で井戸を掘削しかん水を行っている農家も多い。

### ④経済的立地条件（消費地との距離等交通条件、公道へのアクセス等）

中島は、島内3か所の港と松山市陸地部3か所の港を結ぶ航路により交通の便は確保されている。橋が無いためトラック輸送に制限はあるが、古くから柑橘栽培が盛んで全国の離島の中でも有数の生産量がある。

## (2) 地域の果樹農業事情

忽那氏が所属するJAえひめ中央は、平成11年4月に愛媛県中予地区を中心とした当時の3市8町1村の12JAが合併した広域なJAで、柑橘を主体に落葉果樹、野菜など地域にあった多品目の取組みを行っている。その中でも中島地区は温暖な気候を活かして温州類、愛媛果試第28号、宮内伊予柑、せとか、カラマンダリン等と10月から5月中旬まで柑橘の出荷を行っている。

## 3. 対象経営の概況

### (1) 経営の履歴

忽那氏は、農林水産省果樹試験場興津支場で就農に向けた先進的な農業研修を受け、果樹試験場卒業後、昭和46年に20歳で就農した。

就農後は、温州みかんの大暴落があり、安定した所得を確保するため宮内伊予柑等への品種更新を行った。急傾斜地中心の経営であったが、作業性、収益性の向上を目的に平坦地の園地に移行していった。現在では、一部の温州みかん園地を除いてほとんどが平坦地の園地となっている。また、計画的・積極的に愛媛果試第28号の施設化に取り組んできた。

地域では、支部の生産部長、支部長を歴任し、地元組合員の生産意欲・所得の向上に向け活躍された。

### (2) 経営の状況（概況を記述し、経営的特色は(3)として特記する）

柑橘のみの経営で、総面積は645aである。（内訳は別表経営概況1-(2)参照）

経営の主体は42aの施設愛媛果試第28号で、5年度の粗収益の33%を占めている。年内は温州みかん類と施設愛媛果試第28号、年明以降は宮内伊予柑、せとか、カラマンダリンと中晩柑類を順次出荷している。忽那氏の主要品目の平均精算単価は、中島地区の平均単価を上回っている。これは、氏の基本管理の徹底により高品質な果実に仕上げていることの結果が表れている。（下記表参照）。

また、息子が令和元年より就農し、防除や選定、摘果等重要な作業の技術

を氏より学びながら行っている。近年は品種の更新先の検討や営農計画は息子が主体的に取り組んでおり、今年8月より経営委譲する予定である。妻は、高品質生産に重要な摘果などの細かな作業を中心に行っており、高収入には欠かせない存在になっている。

経営面では、作業性や収益性から平坦地の園地の取得を継続して行っており、令和6年も20aの園地を取得している。

労働面においては、作業が集中しない栽培体系や品種構成で経営している。袋掛けや収穫等は、雇用者に委託しているが、剪定、防除、重要品目の摘果は氏が中心に行うことで適期を逃すことなく高品質安定生産につながっている。

#### 令和5年産

品目	忽那氏平均精算単価 (円/kg)	J A えひめ中央 中島地区平均精算単価 (円/kg)
中生温州	218	203
施設愛媛果試第28号	840	718
露地せとか	472	449
カラマンダリン	255	241

#### (3) 経営的特色

氏が就農した直後の昭和47年に温州みかんの大暴落があり、その後品種更新が進んだ。温州みかん中心の品種構成から、宮内伊予柑やネーブル等に品種更新を行っていった。当時は山間部の急傾斜の園地が殆どであったが、平成3年アメリカへ研修に行く機会があり、カリフォルニア・アリゾナで広大な平坦地の園地を見て今までの価値観が大きく変わった。帰国した直後、台風19号により中島は過去に経験したことがないほどの甚大な被害を受けた。復旧のため多くの苗木を導入したが、将来を見越して平成5年に22名で3haの基盤整備を行った。氏も20aの園地に早生温州を導入した。基盤整備を行う際に、出来るだけ平坦な園地を整備したいということから傾斜角4%の団地を整備した。また、栽培できなくなった園地は参画農家が引き受けて管理することを決めており、現在では1.2haを管理している。平成9年頃より宮内伊予柑の価格が低迷してくると、清見、不知火、カラマンダリン等を導入していった。その後、地域では新品种導入に関して慎重な方であったが、現在の主力品目となっている、せとかや愛媛果試第28号など有望な品種は積極的に導入し短期間で面積を拡大していった。

最盛期には11haの園地を経営していたが現在は6.5haに減少している。面積

は減少したが、傾斜地の園地を減らし平坦地中心の園地とすることにより、効率的に各作業が行え、収量や品質は大きく向上した。現在では一部の温州みかんを除き平坦地の園地で経営を行っている。

愛媛果試第28号は当初露地栽培を行っていたが、補助事業を活用してA Pハウスを平成25年に導入し高収益を得ることができた。この収益を基に3年ごとに順次A Pハウスを導入し合計42aとなり、現在の経営の柱となっている。愛媛果試第28号は品質向上対策として10月中旬よりタイバックマルチを被覆している。毎年安定して高品質生産を行っていることは、既出の精算単価の高さから明らかである。

#### (4) 技術的特色：

柑橘生産において各品種の特徴を把握し、防除、施肥、摘果、剪定等あらゆる面から優れた技術を持ち実践している。栽培を通じて特に日々の観察を重視している。特別な作業をすることはないが、長年培った経験を基に適期作業を逃さないようにすることで高品質安定生産につながっている。

苗木管理では、育苗専用の園地を用意しており、購入苗木をそのまま定植するのではなく、1年間育苗してから2年生苗として定植している。育苗園地で集中管理することで細かな管理が行えるうえに作業時間の短縮が図られている。新規圃場に定植する際には、生育のそろった苗木のみを植えることにより生育差が殆どなくなり園地全体の早期成園化が可能になっている。その結果、通常より2年成木までの期間を短縮することが可能になっている。自家育苗苗木のため果樹経営支援対策事業を利用する事はできないが、早期成園化はそれ以上のメリットを得られている。

食の安全・安心のため、息子が教員時代に培ったG A Pの手法を生かし品種・作型毎に生産履歴台帳（農薬・肥料施用履歴）の記帳を徹底している。また、倉庫内においても農薬・肥料の整理や在庫状況の把握に努め、誤散布することの無いよう安全管理を徹底している。

#### (5) 地域への波及効果

自ら「高品質生産は基本管理の積み重ね」をモットーに、どの農家よりも観察眼を磨き、適期に作業を行うことで高収益を上げてきた。忽那氏が所属する吉木支部を中島で一番にしたいという思いから支部内に営農研究会を立ち上げ、新品種の導入や技術の研究などを会員とともに行ってきた。その並外れた行動力で地域の生産者を先導しており、周囲から常に注目されている存在である。氏の栽培方法は出し惜しみすることなく披露し、地域の栽培技術発展に大きく貢献している。その結果、近年は吉木支部が中島地区で1戸当たりの精算金で1番となっている。

(6) 今後の経営展開

令和6年8月から息子に経営移譲を行うが、安定した農業収入が得られるよう毎年園地の若返りを20a程度行っている。自身の高齢化に伴い、より一層の作業効率化が求められる。栽培技術等の継承を進めるが、ドローンの導入も検討始めた。新しい技術を導入しながら経営の安定化を図っていく方針である。



## II. 経営概況

経営 類型	柑橘専作「温州みかん（露地）中晩柑（露地・施設）」
----------	---------------------------

1.

(1) 経営規模

総経営耕地面積	645a
水田	a
普通畑	a
果樹園	645a

(2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）
① 温州みかん	86 a ( 86 a )
② 施設愛媛果試第 28 号	42 a ( 42 a )
③ 宮内伊予柑	9 a ( 9 a )
④ 不知火	2 a ( 2 a )
⑤ 清見	7 a ( 7 a )
⑥ はるみ	39 a ( 39 a )
⑦ カラマンダリン	165 a ( 165 a )
⑧ せとか	178 a ( 158 a )
⑨ 甘平	40 a ( 40 a )
⑩ 愛媛果試第 48 号	54 a ( 34 a )
⑪ レモン	23 a ( 23 a )

2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

(1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
軽トラック	4		R2 他	
トラック (1 t)	1			
チップパー	1		R5	
クローラー	2		R3,5	
動力噴霧器	10	※かん水用 5 台		
モノレール	5			
クローラーかん水				

(2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
ハウス（愛媛果試第 28 号）	A P ハウス	14 a	H25	
ハウス（愛媛果試第 28 号）	A P ハウス	14 a	H29	
ハウス（愛媛果試第 28 号）	A P ハウス	8 a	R2	
ハウス（愛媛果試第 28 号）	A P ハウス	6 a	R4	
倉庫		225 m <sup>2</sup>	H4	

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (施設愛媛果試第 28号)	品目② (カラマンダリン)	品目③ (せとか)	
族	本人	73	300日	300日	36日	90日	107日	農作業全般 収穫・選別 農作業全般
	妻	71	280日	280日	33日	84日	100日	
	次男	39	280日	280日	33日	85日	100日	
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日 数	/			
	臨時雇用		延べ雇用日数			5人・178日 (人・日)		袋掛け・収 穫

(2) 10a当たり総労働時間

品目・品種	10a当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
① 施設愛媛果試第28号	233(197)
② カラマンダリン	151(121)
③ せとか	175(145)

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a当たり
①施設愛媛果 試第28号	42a	42a	42a	18,890kg	21,765kg	21,325kg	20,660kg	4,919kg
②カラマンダリン	163a	163a	163a	39,660kg	40,692kg	40,146kg	40,166kg	2,464kg
③せとか	119a	138a	178a	6,731kg	11,575kg	16,440kg	11,582kg	799kg

5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配合)	観光園	その他
①施設愛媛果 試第28号	87%	%	%	%	13%	%	%
②カラマンダリン	87%				13%		
③せとか	75%				25%		

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
令和6年	せとか	10a	改植	
	愛媛果試第48号	10a	改植	
令和5年	せとか	10a	改植	
	愛媛果試第48号	10a	改植	
令和4年	せとか	40a	改植	

(2) 現在の園地の状況

急傾斜地は少なく、一部の温州みかんを除き平坦地となっている。
農道が整備されており、全園地において車が横付けでき、収穫物の運搬作業が容易である。
作業効率をより向上するために、隣接していた園地や平坦地園地を購入し集積を進めた。
施設中心に主力品種園地にはボーリングによるかん水設備を設置している。

7. 10a 当たり総労働時間

作業	品目① (施設愛媛果試第28号)	品目② (カマンダリン)	品目③ (せとか)
	時間(うち雇用)	時間(うち雇用)	時間(うち雇用)
整枝・剪定	32(4)	16(2)	16(2)
施肥	10( )	8( )	8( )
中耕・除草	6( )	12( )	12( )
薬剤散布	36( )	32( )	28( )
薬剤以外の防除	1( )	1( )	1( )
授粉・摘果	56( )	4( )	24( )
袋かけ	( )	( )	12(12)
菰かけ・防風・防霜管理	8( )	4( )	4( )
かんがい・その他管理	8( )	4( )	4( )
収穫・調製	32(24)	36(16)	32(16)
生産管理労働	8( )	4( )	4( )
生産関係労働時間計	197(28)	121(18)	145(30)
選別・包装・荷造り	24(8)	24(6)	24(6)
搬出・出荷	4( )	4( )	4( )
販売	8(2)	2(1)	2(1)
小計	36(10)	30(7)	30(7)
合計	233(38)	151(25)	175(37)

## 8. 第26回全国果樹技術・経営コンクール

J A えひめ中央 忽那 恵雄、葉子 氏 園地写真

○忽那ご夫妻



○愛媛果試第28号枝吊り



○えひめみかん祭 28号ほ場コンクール園地



○愛媛果試第48号苗木



○カラマンダリン園地①



○カラマンダリン園地②



○ハウス 愛媛果試第 28 号①



○ハウス 愛媛果試第 28 号②



○ハウス 愛媛果試第 28 号③



# 福岡八女農業協同組合ぶどう部会

住所及び氏名

住所 福岡県 八女市

氏名 ふくおかやめ 福岡八女農業協同組合ぶどう部会

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

#### (1) 高品質果実の生産体制

福岡八女農業協同組合ぶどう部会では、作型、品種、支部単位で栽培講習会を実施し、個々の技術の均一化を図ることで高品質果実の生産を行っている。

また、出荷については、園地ごとの糖酸検査による食味重視の区分集荷、特にシャインマスカットについては、出荷時ごとの糖度検査による出荷基準の品質維持を図ることで、他の産地よりも市場ニーズに対応した品質の良いぶどうを提供することが可能となり、市場からも高い評価を得ている。

#### (2) 新しい技術へチャレンジする産地

昭和30年頃から巨峰の有核栽培で産地を形成していたが、安定生産のために昭和40年代にトンネル栽培、昭和45年頃からハウス加温栽培、平成13年から種なし栽培を導入した。これらの施設栽培や種なし栽培技術の向上と共に栽培面積が拡大し、収量も安定したことで農家所得も向上した。

しかし、早期加温栽培が拡大していく中で、花穂の減少や果粒肥大不良による秀品率低下が問題になるようになった。このため、平成17年に花芽確保と果粒肥大促進の効果が期待される夜間電照処理による電照栽培を全国の産地に先駆けて取り組み、秀品率の向上につながるようになった。

また、近年の高温化による着色不良が問題となっていたが、部会での優良品種の探索の中で高温でも着色良好なぶどうを発見し、選抜された「八女優良系巨峰・ピオーネ」の導入を図っている。

#### (3) 信頼される安全・安心なぶどう生産

消費者や市場等から信頼されるぶどうを出荷するため、園地ごとの生産履歴の提出やJAでの残留農薬分析を行っている。また、JAふくおか八女では果樹部会・研究会による独自のGAP活動に積極的に取り組んでいる。

#### (4) 積極的な情報提供による販売戦略

品種作型のリレーにより5月上旬から10月中旬まで安定して出荷できる産地であ

り、前半の種なし巨峰から後半のシャインマスカットまで長期間に渡り売り場を維持している。

また、市場に対してはこまめな生産状況と出荷計画の発信を行い、状況に合わせた売り場の確保・拡大に努めている。さらに、提案価格の提示を行うなど市場と連携して販売戦略を構築している。

## 2. 集団組織を取り巻く環境

### (1) 立地条件

福岡八女農業協同組合の管内の八女地域は福岡県南部に位置し、東部は大分県、南部は熊本県と境を接し、八女市、筑後市、広川町の2市1町で構成され、管内総面積は562.29km<sup>2</sup>で、標高1,200mをこえる県下最高峰の釈迦岳、御前岳を源とする総延長61kmの清流矢部川が有明海へ流れ、南北と東が山地に囲まれ、西は筑後平野が広がっている。

年間の平均気温は15～16度、降水量は2,000mm程度と温暖な気象条件に恵まれている。平坦地では水田が主であり、稲、麦、大豆等が栽培され、またブドウ、ナシ、モモ等の果樹類、イチゴ、トマト、ナス及びキク等の施設栽培が盛んである。中山間地では立地条件を活かし、ブドウ、カンキツ、キウイフルーツ等の果樹や茶などそれぞれの環境に適した多種多様な農産物の生産が展開されている。

地域のアクセス網としてはJR鹿児島本線、九州新幹線、九州自動車道、国道3号線が管内を縦断しているため、関東、関西を始めとする大消費地へのアクセスも良く、全国へ農産物を出荷している。



### (2) 地域の果樹農業事情

八女地域は県内最大の果樹産地であり、西部の平坦地ではブドウ、ナシ、モモ等の落葉果樹が盛んであり、中山間地域ではブドウ、カンキツ、キウイフルーツ、スモモ、イチジク、カキ、ウメ等多彩な果樹が栽培されている。

令和5年度におけるJAの果実販売実績は、ブドウ30億円、カンキツ18億9千万円、キウイフルーツ17億2千万円、ナシ10億円など合計約81億3千万円であり、県

内の果実販売高の約3割を占めている。

また、JAを利用する共販割合が高い地域で、地域全体で高品質な果実を組織的に生産する体制が構築されている。この体制を支えているのがJAの営農指導員による質の高い技術指導と、部会の組織活動、選果場やパッケージセンターの積極的な整備等である。

加えて、農産物の品目の多さと品質の高さの実現が、野菜や花き、茶などその他品目を含めた「JAふくおか八女」ブランドとして、市場などから高い評価を得ている。

### 3. 対象集団組織の概況

#### (1) 集団組織の履歴

管内では大正時代にキャンベルアーリーが導入され、戦後「平行整枝H型」の短しろう剪定の普及でベリーA、デラウェアの産地化が進み、昭和30年頃より巨峰が導入され拡大した。また、昭和40年代にトンネルの普及、昭和45年頃よりハウス栽培が普及し生産の安定化が図られた。

平成8年4月にJA八女市・JA筑後市・JA福岡立花・JA広川町・JA上陽町・JA矢部村・JA星野村・JA黒木町の8JAが合併し福岡八女農業協同組合が誕生した。

JA合併に伴い同年12月に八女・筑後・立花・広川・上陽・黒木のぶどう部会代表によるぶどう部会協議会を設立し、ぶどうの生産方針・指導内容、出荷資材のデザインや規格、運賃の統一を協議した。

平成13年12月に組織を統一し福岡八女農業協同組合ぶどう部会を設立した。部会では、全地区・全品種の共販共計を行っており、共販共計の年次別の動きは以下のとおりである。

- ・平成16年よりピオーネ全地区共販共計開始
- ・平成18年ぶどうパッケージセンター利用開始
- ・平成21年よりシャインマスカット全地区共販共計開始
- ・平成26年よりデラウェア全量パッケージセンター利用
- ・平成28年4月より全地区、全品種共販共計を開始

#### (2) 集団組織活動の状況

当地区は地域性を考慮し4支部（八女・立花支部、広川支部、筑後支部、黒木支部）で構成され、令和5年度の部会員は318名である。役員は部会長1名、副部会長1名、支部長4名、副支部長4名の計10名で構成されている。役員で構成される運営委員会では、販売、生産、部会活動について検討し、部会全体の運営方針を決定している。また、副部会長、副支部長4名で生産基本方針を検討し、「シャインマスカット栽培指針」など品種別、作型別の方針を作成し、栽培技術の統一を図っている。これらの方針の作成に当たっては、生産委員が栽培試験を行い、結果を反



映している。

青年部はおおむね40歳以下で構成され、現在36名が加入しており、青年部員の優良園視察や情報交換、他産地への視察研修などを行っている。また、関東関西など消費地での市場担当者との意見交換や女性部と一緒に試食宣伝販売を行い、消費動向の把握に努めている。

### (3) 経営的特色

#### ① 市場への情報提供と消費者ニーズに対応した供給体制

部会の被覆調査を基にして、品種別販売計画を作成し、園地巡回による生育状況の把握を行い、市場に対してはこまめな生産状況と出荷計画の発信、提案価格の提示を行い、状況に合わせた売り場の確保・拡大に努めている。

また、取引市場とは、運営委員による取引会議や市場調査、産地視察の受け入れや商談会議を随時開催し、情報の共有化を図っている。近年、温暖化の影響で出荷時期が早くなったり、異常気象等により計画出荷量の変動が危惧されることから、市場関係者には生育状況等の発信をこまめに行い、スムーズな販売が出来るように連携している。

さらに、部会として消費者ニーズを把握するために、試食宣伝活動や市場担当者を産地に招き次世代育成のための流通研修会を開催している。このような活動を通じて、すべての部会員が部会の生産販売方針への理解を深め、生産に活かせるように取り組んでいる。

#### ② 有利販売のための出荷時期分散と計画的な作型実施

当部会の大きな特色は、ブドウ専業農家が所得向上と労力分散のため、超早期加温～早期加温～無加温～トンネル栽培を経営に取り入れ、規模拡大してきたことである。

県内ブドウ産地で最も早く出荷が始まり、令和5年産で、巨峰が5月5日、博多ピオーネが5月12日、シャインマスカットが6月16日より出荷がスタートとなった。

加温は5月上旬から7月上旬、無加温・半加温は7月、大型トンネルは7月中旬、小型トンネルが8月盆前から出荷開始となり、11月には超加温の出荷終了後再剪定し、着果した2度切りぶどうを出荷している。前半の種なし巨峰から後半のシャインマスカットまで長期間に渡り売り場を維持している。

<各品種の位置づけ>

出荷時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
巨峰(有核)		←	←	←	←	←	←	←	←
種なし巨峰		←	←	←	←	←	←		
博多ピオーネ		←	←	←	←	←			
シャインマスカット				←	←	←	←	←	

### ③有核栽培から種なし栽培への転換による収益の向上

巨峰については、有核栽培を中心に施設化も進められていたが、消費者ニーズの変化に対応するため、平成13年頃から種なし栽培への転換を開始した。

種なし処理のタイミングや房づくりをわかりやすくマニュアル化し、営農指導員がこまめに巡回することで種なし栽培技術を確立し、収量・品質の安定、販売単価の上昇につながり、農家所得も向上している。

### ④パッケージセンターを活用した労働力の省力化

ぶどう生産者の省力化、高齢化対応、規模拡大の為に、収穫したぶどうをそのまま持込み、パック詰め作業を行うパッケージセンターの利用を平成18年度から開始した。生産者の省力化と様々な販売店のニーズに対応した販売規格が出来るようになり、生産者の栽培年齢の延長や栽培面積及びハウスの作型拡大にもつながっている。

## (4)技術的特色

### ①高品質果実を出荷するための技術支援

ぶどう部会では、適熟なぶどう出荷のため、生産委員会により新技術や優良系品種、現状の問題への対策を検討し、部会での講習会や防除暦などに反映させ、きめ細やかな指導を行っている。また、青年部や女性部でも講習会や管内優良園の視察研修を行うなど、栽培技術の底上げを行っている。

さらに、病害虫等対策については、講習会時の情報提供だけでなく、その年の気象状況に応じた情報を全部会員にFAXで確実に情報伝達している。これらを順守することで、他の産地より、安定的に生産・出荷が行われるようになり、品質の均一化されたぶどうを、市場に供給することが可能となり、高単価で取引されるようになった。

### ②ぶどうの早期加温栽培における電照栽培の普及拡大

管内のぶどう園の超早期加温から普通加温栽培では、翌年の花穂着生減少、果粒肥大不良による秀品率低下が問題となり、高品質果実の連年安定生産が課題となっていた。このため、花穂着生増加、果粒肥大促進の効果が期待される夜間電照処理による電照栽培を全国の産地に先駆けて導入し、現在は加温栽培の60%まで普及し、品質の安定したぶどうが供給されるようになった。今後はさらに普及拡大を推進していく方針である。

### ③シャインマスカットの品質向上対策

シャインマスカットは、ハウス加温・無加温栽培などでの肥大不足、糖度の不安定さが課題となっている。このため、400gの小房づくりと適正房数を徹底するとともに、新梢管理については、副梢を樹勢に応じて複数回に分散して、枝管

理を行うよう指導している。

#### ④優良品種への改植と早期成園化による園地の若返り

改植については、果樹経営支援対策事業を有効に活用し、毎年5ha前後の改植・新植を行いながら、品種更新を行っている。また、近年の高温化による着色不良に対応するため、高温でも着色良好な「八女優良系巨峰・ピオーネ」の導入を図るなど、産地全体の園地の若返りを推進している。

さらに、改植は全面改植を基本とし、早期成園化を図るため苗木の新梢を棚下で摘芯し、副梢を利用し樹冠拡大を行い、1年目で棚面を埋め、2年目で成園の60%程度の収量を目指している。また、加温ハウスで栽培を行っているため樹勢が低下するため、10年から15年間隔で改植を行っている。

#### ⑤信頼される安全・安心なぶどうの生産

安全・安心なぶどう出荷のため、園地ごとの生産履歴の提出やJAでの残留農薬分析を行っている。また、JAふくおか八女では果樹部会・研究会による独自のGAP活動に取り組んでいる。ぶどう部会員は、各チェックシートをもとに、必要とされる農薬管理記録や肥料施用等のチェック項目を点検し、必要であればJAの営農指導員が改善を促している。

#### (5) 集団組織活動による参加農家の経営効果

ぶどう部会での徹底した栽培指導、有利販売に向けた園地ごとの糖酸検査による食味重視の区分集荷、特にシャインマスカットについては出荷時ごとの糖度検査による出荷基準の品質維持を図る取り組みにより、市場では「JAふくおか八女」は高く評価され、揺るぎない地位を確立している。

また、「JAふくおか八女果樹部会・研究会」独自のGAPの導入効果として、農薬・肥料の在庫管理の定着や個々の作業体系の見直しが行われている。

その結果、ぶどう全体の販売単価は令和2年の1kg当たり1,438円から令和5年は1,693円に上昇している。また、部会全体の栽培面積は以前より減少したにもかかわらず、部会の販売実績も令和2年産の約25.7億円から令和5年産は30億円に向上している。このことから部会の組織活動により、ブドウ販売単価の向上と収益性の高い作型の規模拡大、経費節減が促され、参加農家の所得向上につながっている。

#### (6) 地域への波及効果

高品質果実生産による単価の向上により、収益の増加が見込まれることから、ぶどう部会員子弟のUターン就農や他の作物からの転換などで、新規就農者が毎年2～3名ずつ増えており、新たな若い担い手を確保し続けている。このことが、ぶどう青年部活動の活性化にもつながり、活気あるぶどう産地の形成に大きく貢献している。

また、食育活動の一環として、10年以上前から地元小中学校の学校給食への提供や黒木地区のぶどう部会青年部では、黒木西小学校生を対象に青年部が管理するほ場で「ぶどう栽培」の学習や袋掛け等の体験学習を行い、地域の代表的なぶどう栽培に対する理解を深めている。

## (7) 今後の経営展開

### ① 高品質安定生産のための栽培技術向上

近年の異常気象等の発生により安定生産が難しい状況となっている。高品質なぶどうを安定的に消費者に届けるため、新技術を積極的に導入するとともに生育状況に対応した灌水や肥料及び新梢管理の徹底を図っていく。

具体的には、黒系ぶどうの電照栽培の拡大、環状剥皮による着色促進対策、シャインマスカットの品質向上のための400gの小房づくりや新梢管理などを実践していく。

また、ハウス栽培の技術向上のため、優良生産者の園に環境測定機を導入してデータ収集を行い、調査結果をもとにハウス栽培技術の均一化を図っていく。

### ② 需要のニーズに対応した販売戦略

取引市場やJA直売所からの様々な要望に対応するとともに、引き続き取引市場と情報を共有しながら、有利販売に繋げていく。

また、「八女優良系巨峰・ピオーネ」を積極的に導入するとともに、計画的な作型ローテーションの実施により、出荷時期の分散を図る。

さらに、品質の良いぶどうを安定して供給するため、園地ごとの糖酸検査を継続して実施するとともに、特にシャインマスカットについては、出荷時ごとの糖度検査により食味重視の出荷を行っていく。

### ③ 信頼される安全・安心なぶどうの生産

園地ごとの生産履歴の提出やJAでの残留農薬分析、「JAふくおか八女果樹部会・研究会」による独自のGAPの取組を継続し、消費者や市場等に安全・安心な果実を提供できる産地として「JAふくおか八女」のブランドをさらに確立していく。

## II. 経営概況

### 1. 集団組織の現状

#### (1) 集団組織の参加戸数及び経営規模

全戸数	総戸数	0.5ha以下	0.5～1ha	1～2ha	2～3ha	3ha以上	1戸平均		
							経営面積	うち果樹作	
専業 第1種兼業 第2種兼業	318戸	181戸	98戸	36戸	3戸	戸	専業 第1種兼業 第2種兼業	0.6 ha	0.6 ha
計							全戸		

#### (2) 集団組織タイプ

選果場共同利用組織

#### (3) 集団組織の労働力構成

性別	男 (人)					女 (人)					合計	主たる 分担作業
	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計		
構成員	5	58	93	137	293		4	8	13	25	318	
構成員の家族												
計												

#### (4) 集団組織の雇用労働の状況

常雇	性別	人数	年間雇用日数	主たる分担作業
		人	日	
臨時雇用	延べ雇用日数		(人・日)	

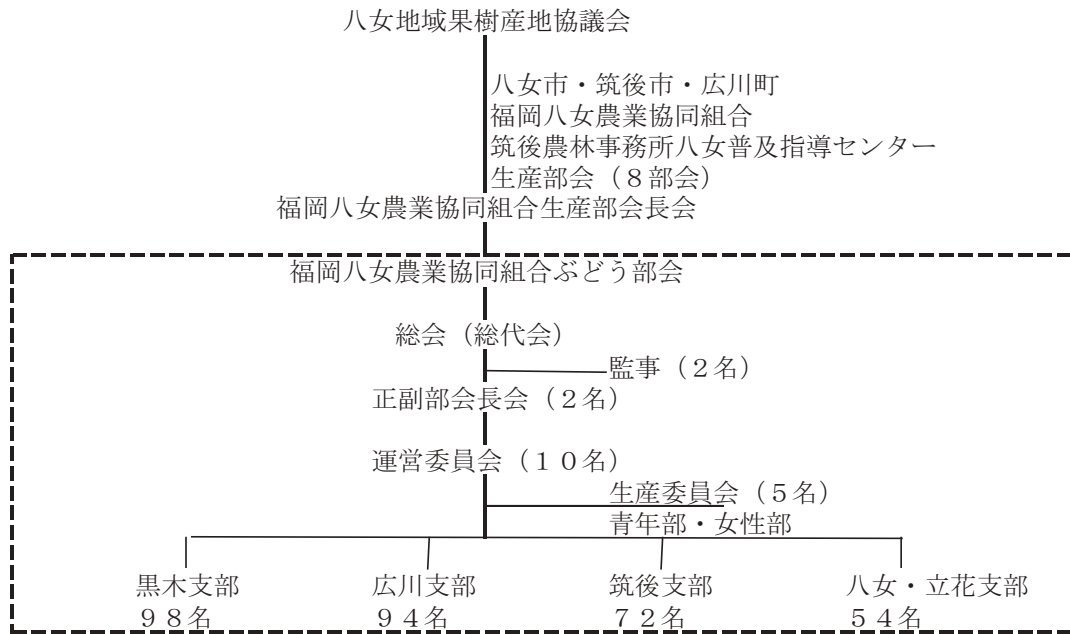
### 2. (1) 耕地の概況

総耕地面積	ha
水田	ha
普通畑	ha
果樹園	154 ha

### (2) 左表の果樹園のうち集団活動の 対象となる果樹園面積

品目	栽培面積 (うち成園)
①種なし巨峰	62.4 ha ( 62.4 ha)
②シャインM	44.4 ha ( 44.4 ha)
③有核巨峰	23.5 ha ( 23.5 ha)
④ピオーネ	20.1 ha ( 20.1 ha)
その他品種	3.6 ha ( 3.6 ha)
計	154 ha ( 154 ha)

3. 集団組織の組織図



4. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

(1) 主要機械

種 類	台 数	仕 様	導 入 年	備 考

(2) 主要施設

種 類	構 造	規模(面積・延長等)	建 築 年	備 考
稲富集荷場	鉄骨構造	1750㎡	S44.3.31	
筑後集荷場	鉄骨構造	2554㎡	S52.3.31	
広川集荷場	鉄骨構造	2662㎡	S56.5.29	
黒木集荷場	鉄骨構造	1314㎡	H4.6.30	
長峰パッケージ	鉄骨構造	2667㎡	S49.11.26	

5. 果樹生産・出荷の概況

(1) 生産の概況

品 目・品 種	収 穫 面 積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年) ha	前年産 (R4年) ha	当年産 (R5年) ha	前々年産 (R3年) t	前年産 (R4年) t	当年産 (R5年) t	3 年 平 均	
							収 穫 量 t	10 a 当 たり k g
種なし巨峰	64.2	65.4	62.4	766.7	777.3	746.2	763.4	1,192
シャインM	34.4	38.8	44.4	444.6	577.6	603.1	541.7	1,382
有核巨峰	32.3	27	23.5	329.6	293.6	260.6	294.6	1,067
ピオーネ	21.5	20.4	20.1	266.2	264.9	252.5	261.2	1,263
その他品種	5.5	4.5	3.6	55.3	59.2	46.9	53.8	1,186

(2) 選果及び出荷の概況

品目・品種	共同選果量			出荷額			
	前々年産 (R3年) t	前年産 (R4年) t	当年産 (R5年) t	前々年産 (R3年) 千円	前年産 (R4年) 千円	当年産 (R5年) 千円	3か年 平均 千円
種なし巨峰	766.7	777.3	746.2	1,154,081	1,211,912	1,197,218	1,187,737
シャインM	444.6	577.6	603.1	972,262	1,217,651	1,194,743	1,128,218
有核巨峰	329.6	293.6	260.6	446,450	420,722	377,927	415,033
ピオーネ	266.2	264.9	252.5	405,825	423,397	415,161	414,794
その他品種	55.3	59.2	46.9	56,463	59,213	48,159	54,611

(当年産出荷の特徴)

R5年産については、1月から4月にかけて平年より気温が高く推移したため生育は前進化し、加温ハウスで前年比3日、無加温で7日、大型トンネルで5日、小型トンネルで7日早い開花を迎えた。2月、3月の急激な温度上昇により発芽のバラツキ、花穂、葉焼け等が散見され、縮果症も発生した。梅雨明け後も高温が続き着色不良やカスリ症の発生により下位等級の発生が多かった。また、生育期全般高温のため、結実は良かったが肥大不足が見られた。
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 当年の販売方法別割合

品目・品種	販売方法別の割合						
	農協	集団組織で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
種なし巨峰		%	%	%	%	%	%
シャインM							
有核巨峰	100%						
ピオーネ							
その他品種							

7. 園地の状況

(1) これまでの対象集団組織の園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
昭和30年	ブドウ	38ha	黒木地区、自力での園地造成	
昭和50年	ブドウ	52ha	広川地区、事業での園地造成	
令和元年	巨峰・ピオーネ・シャインマスカット	4.1ha	果樹経営支援対策事業利用により 改植・新植で品種更新	
令和2年	巨峰・ピオーネ・シャインマスカット	4.8ha		
令和3年	巨峰・ピオーネ・シャインマスカット	5.2ha		
令和4年	巨峰・ピオーネ・シャインマスカット	6.4ha		
令和5年	巨峰・ピオーネ・シャインマスカット	4.1ha		

(2) 現在の集団組織の園地状況

当該地域は西南団地に位置し、降雨が多いため早くから施設化が進んでおり、ハウス、トンネルの園地が全体の99.9%あり、露地がほぼ無い。品種は巨峰を中心に黒系が全体の約70%あり、シャインマスカットが30%となっている。近年はシャインマスカットへの改植が多いが、着色が良い八女優良系（巨峰・ピオーネ）への改植も進んでいる。
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

8. 選果及び出荷の状況

(1) これまでの対象集団組織の選果及び出荷についての整備状況

年次	対象品目	能力	整備の内容	備考
平成10年	ブドウ		梱包ライン改修	八女地区
平成22年			梱包ライン改修	広川地区
平成26年			梱包ライン改修	筑後地区
平成28年			梱包ライン改修	黒木地区

(2) 選果及び出荷の改善状況

管内には集荷場4ヶ所とパッケージセンター1ヶ所があり、ピーク時は1日当たり集荷場で28t、パッケージセンターで9tほどの持ち込みがある。
パッケージセンターを活用することにより、生産者の出荷調整作業の負担が軽減され、栽培面積の維持拡大につながっている。また、生産者の急な病気、ケガ等の場合にも対応できるよう、受け入れ態勢を整えている。
集荷場、パッケージセンターは統一した出荷規格で行っているため、生産出荷目合わせ会、検査員目合わせ会を開催するとともに、運営委員やJA職員が集荷場を巡回し、品質が均一化するようにしている。



9. 集団組織活動の効果

項 目	集団組織に参加している農家	集団組織に参加していない農家又は地域の平均
収量	〔加温〕種無し巨峰 1,600kg/10a 〔無加温〕種無し巨峰 1,600kg/10a 〔トンネル〕シャインマスカット 1,800kg/10a 〔トンネル〕種無し巨峰 1,600kg/10a	〔トンネル〕シャインマスカット 1,800kg/10a 〔トンネル〕種無し巨峰 1,600kg/10a
労働時間	306時間/10a  ・加温、無加温の作型組み合わせが多いため、労働時間は地域平均より微増。	270時間/10a  ・主はトンネル作型。
品質	・早期作型により、糖度が高く、着色の良い高品質果実生産を行っている。	・夏季の高温による糖度低下と着色不良。
生産コスト	1,333千円/10a  ・加温施設の減価償却費等により生産コストは高くなる。	929千円/10a
平均的経営収支	粗収益 2,427千円/10a 経営費 1,333千円/10a 所得 1,094千円/10a	1,573千円/10a 929千円/10a 644千円/10a

10. 経営の優秀性等

(1) 集団組織としての栽培技術上のポイント

①高品質果実を出荷するための技術支援 (部会の生産委員会による講習会・防除暦説明会などのきめ細やかな指導)
②ぶどうの早期加温栽培における電照栽培の普及拡大 (加温栽培の高品質果実の安定生産確保のための技術)
③シャインマスカットの品質向上対策 (小房づくりと樹勢に応じた新梢管理による品質の均一化)
④優良品種への改植と早期成園化による園地の若返り(「八女優良系巨峰・ピオーネ」の導入)
⑤信頼される安全・安心なぶどう生産 (生産履歴の提出とJAふくおか八女独自のGAPへの取り組み)

(2) 集団組織としての経営管理上のポイント

①市場への情報提供と消費者ニーズに対応した供給体制 (市場との産地情報の共有化)
②有利販売のための出荷時期分散と計画的な作型実施 (品種作型リレーによる5月上旬から10月中旬までの安定出荷)
③有核栽培から種なし栽培への転換による収益の向上 (巨峰の収量安定と品質向上による販売単価の上昇)
④パッケージセンターを活用した労働力の分散 (労働力の省力化と栽培面積の拡大)

11. 写真



中原ぶどう団地（黒木町）



大型トンネルハウス（筑後市）



電照栽培（夜間電照処理）



作型・品種毎の講習会風景



ぶどう女性部講習会風景



ぶどう青年部研修会風景



生産者出荷目合わせ会



運営委員による集荷場巡回指導



長峰パッケージセンター風景



黒木集出荷場風景



出荷スタイル（5kg房詰）



出荷スタイル（350gパック）



ぶどう青年部の試食宣伝活動



量販店での八女ぶどうフェア風景



J Aふくおか八女果樹部会GAP冊子



ぶどう青年部による小学生の  
摘粒作業の体験



## 農林水産省農産局長賞

山形県 漆山和志・漆山陽子

山梨県 野沢昇

静岡県 近藤喜美雄・近藤京子

愛知県 永田広敏

鳥取県 山田均

山梨県 笛吹農業協同組合八代支所八代統合桃部会

和歌山県 田辺印の会



# 漆山 和志・漆山 陽子

## 住所及び氏名

住所 山形県 南陽市

うるしやま かずし うるしやま ようこ  
氏名 漆山 和志(55歳)・漆山 陽子(57歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

漆山和志氏と妻の陽子氏は、古くからのぶどう産地である山形県南陽市において、ぶどう大規模栽培と農業の6次産業化に取り組む地域を代表する農業者である。営農に当たっては、作業の平準化及び気象災害等の危険分散を考慮し、「デラウェア」加温ハウス栽培をはじめ、大粒種の「ピオーネ」「巨峰」「シャインマスカット」「安芸クイーン」など多彩な約30品種を栽培している。これらの品種において7月上旬頃から10月中旬頃まで長期の収穫・販売を行っており、高品質・良食味のぶどうを生産する優れた栽培技術が高く評価されている。

#### (果樹栽培)

ぶどうの栽培方法は、先々代が山林を開拓し造成した日当たり良好な南向きの斜面を活かすとともに、収穫期の調整や農薬使用量を必要最小限とするため、園地全てをハウス栽培としている。計画的に施設の更新を行いながら、近隣のリタイヤした生産者の園地を引き継ぎ、規模拡大を図っている。

#### (6次産業化の取組み)

妻の陽子氏を中心として、自家生産したぶどうや近隣農家が生産した果実等を用い、農産物の付加価値を高めるため農産加工品の製造に取り組んでおり、販売する農産加工品のほとんどを自家製造している。特に、食品添加剤不使用を基本とし原材料にこだわった本物志向の菓子類は、「日本ギフト大賞」最高賞をはじめ各種コンクールに入賞するなど県内外から高い評価を受けている。また、新たな加工技術の導入に積極的で、常に新商品の開発に取り組んでいる。

#### (経営の多角化及び地域への波及効果)

当農園では、ぶどうや農産加工品販売に加え、農産物直売所に農園カフェを併設し、旬の農産物を使ったジェラートやオリジナルスイーツ、フルーツアイスティー等を提供するなど、経営の多角化を図っており、経営改善意欲が高い。また、これらの取組みをWebサイトなどで積極的に情報発信することで、県内外から多くの観光客を地域に呼び込んでおり、産地全体のPRにもつながっている。

#### (経営拡大及び雇用創出)

新商品の開発や新規顧客の獲得などに力を入れることで、新型コロナウイルス感染拡大期にあっても売上が減少することなく、現在まで伸び続けている。また、経営拡大に伴って正規職員やアルバイト等の雇用労働力を増やすなど、地域の雇用創出にも貢献している。



(まとめ)

以上のように、漆山和志氏及び陽子氏は、ぶどうの栽培技術、6次産業化・経営多角化の取組み及び産地全体への貢献度等が非常に高いことから推薦するものである。

## 2. 対象経営を取り巻く環境

### (1) 立地条件

#### (自然的立地条件)

山形県南陽市は、山形県南部の置賜盆地の北東部に位置し、東に奥羽山脈、南に吾妻山系がそびえる、面積約160km<sup>2</sup>、人口約3万人の市である。

市の南側には肥沃な田園地帯が広がり、北・東側は丘陵の傾斜を活かし果樹や野菜等の生産が盛んである。園地がある南陽市松沢地区は、市の南東部に位置し、集落内の標高は235m程である。

気候は、積雪寒冷地帯の内陸性気候で、年間の寒暖差が著しく年平均気温11.2℃、年間降水量1,283mm、年間日照時間1,579時間、平年の最大積雪深は約70～80cmである。

#### (経済的立地条件)

南陽市には、東北中央自動車道、国道13号線・113号線とJR山形新幹線・奥羽本線、山形鉄道フラワー長井線が通っており、県南部における交通の要衝である。東京駅から山形新幹線で2時間20分と消費地からのアクセスは良好である。漆山氏の園地までは、東北中央自動車道・南陽高畠ICから車で10分程と利便性は高い。



図1 南陽市の位置



図2 漆山氏のぶどう園地

### (2) 地域の果樹農業事情

山形県はぶどうの栽培面積、収穫量とも全国4位を誇るぶどうの産地である。そのなかでも南陽市は、山形県南部の置賜地域を代表する果樹産地であり、令和4年の農業産出額90.4億円のうち、果樹は41.3億円(46%)を占める。

南陽市のぶどう栽培の歴史は古く、江戸時代初期にはぶどう栽培が始まっており、山形県

のぶどう栽培発祥の地である。明治後期に欧州種を中心にぶどうが広く栽培されるようになり、明治40年頃から米国系品種が導入された。昭和30年頃から山裾の傾斜地などで「デラウェア」を中心に栽培が広まり、その後、ジベレリン処理技術の普及とともに栽培が急速に拡大した。昭和40年代からの水稲減反政策を契機に、平坦部の水田転作地にもぶどうが導入され、栽培面積は昭和55年度にピークを迎えたが、その後は生産者の高齢化などの影響で減少傾向にある。

ぶどうの栽培品種は、「デラウェア」が最も多く、JA山形おきたまの「デラウェア」出荷量は、JAとしては全国一位となっている。一方で、「デラウェア」は減少傾向で、大粒種や醸造用品種の栽培が増えており、現在の大粒種の主力は「シャインマスカット」で、JA出荷量も年々増加している。

また、南陽市内にはワイナリーが6社と県内で最も多く、古くから醸造用ぶどうの栽培が盛んであり、現在も栽培面積及び生産量が増加傾向にある。

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

漆山和志氏は、南陽市内のぶどう農家の次男として生まれた。高校卒業後は、東京で会社員として働いた後、地元に戻り就職した。平成8年に陽子氏と縁あって漆山家に婿入りし、翌平成9年に先代である義父から経営を継承した。平成12年には経営拡大や養父の体調悪化のため、勤めていた会社を辞め農業専従となった。

漆山家のぶどう栽培は、先々代が自宅近くの山林を切り拓き栽培を開始。当時の栽培品種の主力は「デラウェア」で、販売はJA主体であった。昭和62年から先代が大粒種3品種の栽培を開始した。

和志氏の代になってからは、直販を始め、全国に顧客を広げていった。また、露地栽培から、雨除け栽培を含む施設栽培に切り替え、現在は全て全面被覆のハウス栽培としている。さらに消費者からの需要が高い大粒種の面積を拡大していった。

妻の陽子氏は、結婚を機に会社を辞め就農した。新たなことにチャレンジしたいと考え、平成18年に野菜ソムリエ資格を取得。また、従業員を通年雇用にして安定した労働力を確保するため、陽子氏が中心となり6次産業化に着手した。平成25年に菓子製造業許可の取得と加工施設を設置し、ドライフルーツや焼菓子の製造・販売を開始。また、飲食店営業許可を取得し果樹園カフェの営業を開始。平成27年にはアイスクリーム類製造業許可を取得。製造施設を設置し、ジェラートの製造・販売を開始した。

## 【主な沿革】

H 9 年	和志氏が先代の農業経営を継承し就農開始
H12年	和志氏が農業専従となる。同時に農場の規模を拡大
H18年	楽天市場店開店、自社ホームページ開設により全国展開を開始
H25年	果樹園カフェ(飲食店営業許可取得)と加工施設(菓子製造業許可取得・一次加工の乾燥施設)を設置。露店商営業許可取得。カフェ営業開始
H27年	アイスクリーム製造所(アイスクリーム類製造業許可取得)を設置
H29年	百貨店催事販売開始、酒類販売業許可取得(通信販売含む) かん詰又はびん詰食品製造業・ソース類製造業許可取得
R 3 年	加工施設を増設し、菓子製造業・密封包装食品製造業・漬物製造業許可取得
R 5 年	ジェラートの製造量拡大のため、大型アイスクリームフリーザーを導入

## (2) 経営の状況

### ① 生産状況

農作物の生産規模は、和志氏が経営継承後に規模拡大を行い、現在は約220 a のぶどう専作経営である。作業の平準化と長期販売を考慮し、3月中旬に加温ハウスの被覆を行い、4月中旬にかけて無加温ハウスの被覆を順次行っている。品種構成は「デラウェア」約30%、大粒種等は約70%である。

### 【ぶどう栽培規模拡大の経過】

	H 9 年	H14年	H27年	H28年	R 5 年
面積(単位a)	150	160	180	200	220

### ② 経営・販売状況

妻の陽子氏が中心となり、農産加工品の製造・販売、カフェの営業を行っている。レーズンに加え、近隣農家が生産したりんごなどの果実や野菜の規格外品を活用した乾燥加工品、バターサンドなどの焼菓子、ジェラート、漬物類を製造・販売し、複合経営を展開している。その他、近隣農家や県内で生産した果実や野菜の仕入れ販売も行っている。

次男の拓未氏は、令和2年に就農し、栽培管理の他に経営管理のシステム化や加工品製造にも携わっている。

令和6年現在の従事者は、家族3名、常時雇用6名及びパート3名であり、ぶどう栽培管理や販売業務などを時期に応じて分担している。



図3 年間の作業スケジュール

# 漆山果樹園が育てているぶどうの品種

## 黒玉ぶどう 粒が大きくボリュームがあるのが魅力！ それぞれに甘さや酸味、歯応えなど個性があります

<p>●収穫時期：5月中旬～ カニ <b>藤粒</b></p>  <p>粒が大きくボリュームがあるのが魅力！ 関東の人気品種！</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ <b>ブラックビート</b></p>  <p>新しい果実品種、歯が かかっていて、甘味も 強い</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ <b>ハニーブラック</b></p>  <p>黒玉で一歩甘く、酸 味のような香りと歯 応えが強い</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>巨峰</b></p>  <p>粒がずと粒の詰まった 先果品種！しっかりと した歯ごたえ</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>高尾</b></p>  <p>果実をきれいで「高尾 山」から命名、実がし かかって濃厚な味</p>
<p>●収穫時期：9月上旬～ カニ <b>伊豆錦</b></p>  <p>実がしまっていてボ リューム満点の食べ 応え！</p>	<p>●収穫時期：9月上旬～ カニ <b>ピオーネ</b></p>  <p>大粒の粒と、甘味 と酸味のバランスが 良い</p>	<p>●収穫時期：9月中旬～ カニ <b>ウインク</b></p>  <p>粒長い粒が特徴的で 甘いマスク！平らな 歯を引く高級品種</p>	<p>●収穫時期：9月中旬～ カニ <b>高妻</b></p>  <p>黒玉の中では甘く、コ クのある巨峰に近い</p>	<p>●収穫時期：9月中旬～ カニ <b>オリエンタルスター</b></p>  <p>酸味・酸味が少なく、 食べやすい</p>

## 赤玉ぶどう 女性に人気！酸味が少なく希少な品種が多くあります

<p>●収穫時期：5月中旬～ カニ <b>サニールージュ</b></p>  <p>早生品種の中で大 実！粒が小さめで甘く 食べやすい</p>	<p>●収穫時期：5月上旬～ カニ <b>ベニバラード</b></p>  <p>バラバラとした食感が 新しい果実品種</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>ゴルビー</b></p>  <p>ボリュームで上品な 味わいの高級品種</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>サニードルチェ</b></p>  <p>サニールージュの良さが 美しい珍しい品種</p>	<p>●収穫時期：5月下旬～ カニ <b>クイーンニーナ</b></p>  <p>特長が大きい甘味 種、酸味が少なく甘み がある</p>
<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>安芸クイーン</b></p>  <p>「巨峰」を再現した ぶどうの女王！歯応え が高く濃厚な味わい</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>バイオレットキング</b></p>  <p>大粒で舌ごと食べら れる、イタリアの品種</p>	<p>●収穫時期：9月上旬～ カニ <b>ロザリオロッシ</b></p>  <p>ロザリオビアンコの赤 玉品種、酸味が少な く、甘みが強い</p>	<p>●収穫時期：9月中旬～ カニ <b>シナノスマイル</b></p>  <p>食べやすさとともに 粒がしっかりとした 実で歯応えも強い</p>	<p>●収穫時期：9月中旬～ カニ <b>ルビーオクヤマ</b></p>  <p>黒皮の赤玉と酸味 が低く、果実の味 が濃厚な品種</p>

### ぶどう狩り体験

お家で味わえない新鮮なぶどうを収穫体験してください！

本園では、一日づつ産量を限り、グループなどで収穫させていただいておりますので、一歩からお好きな人数で収穫が可能です。すべてビニールハウスで理解していただけますので雨でも楽しめることな体験できます！（予約見学は9月下旬まで）

ぶどう狩りの体験期間

- デラウェア 7月上旬～8月中旬
- 高級ぶどう 7月下旬～8月下旬

### 直売コーナー＆カフェ

直売コーナーでは、お土産加工品の販売を行っています。高級果樹園の産物もいろいろありますので、ぜひぶどうシーズンを満喫してください。なお、全園のカフェは通常営業しております。



## 小玉・中玉ぶどう

<p>●収穫時期：7月上旬～ カニ <b>デラウェア</b></p>  <p>手塚の栽培で親しま れる小粒の早生品種</p>	<p>●収穫時期：7月下旬～ カニ <b>キングデラウェア</b></p>  <p>デラウェアより1割 大きいのが特徴</p>
<p>●収穫時期：8月中旬～ カニ <b>シャインマスカット</b></p>  <p>厚皮の中身がジューシー で甘い、マスカットの女王 と呼ばれる人気品種！</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>白玉ぶどう</b></p> <p>糖度が高い、特徴的な 香りなど、個性的な 特長品種が多くあります</p>

<p>●収穫時期：8月中旬～ カニ <b>黄玉</b></p>  <p>白玉の中でトップクラ スの甘さ、ジューシーな ような香りがする</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>ロザリオビアンコ</b></p>  <p>上品な香りと酸が薄 く、食べやすい人気品 種！</p>
<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>イタリア</b></p>  <p>白玉の中でトップクラ スの甘さ、ジューシーな ような香りがする</p>	<p>●収穫時期：8月下旬～ カニ <b>ハニービーナス</b></p>  <p>実玉に注水甘さで、神 童のような香りと濃厚 な味</p>
<p>●収穫時期：9月上旬～ カニ <b>多摩ゆたか</b></p>  <p>上品な香りと味、歯 ごたえに果実が あふれるのが特徴</p>	<p>●収穫時期：9月上旬～ カニ <b>瀬戸ジャイアンツ</b></p>  <p>甘い香り高い品種、粒 の大きさを活かした粒 ごはき</p>

図4 栽培している品種

### (3) 経営的特色

#### ① ぶどう販売戦略

販路拡大のため、平成18年から「楽天市場」等の大手ECサイトへの掲載や、ホームページの開設を進め、全国展開を図った。また、平成25年に露店商営業許可を取得し、地元のほか県内外の各種イベント等での出張販売の開始に加え、平成28年からは南陽市へのふるさと納税返礼品の出荷、平成29年からは百貨店での催事販売を行っている。

これらの取組みにより、大手ECサイトやふるさと納税サイトのランキングでは上位に入り、高い口コミ評価からリピーターや新規顧客の獲得につながっており、生産するぶどうのほとんどは、高単価で直接販売を行っている。

#### ② 多様な加工品製造・販売

加工品の製造では、消費者ニーズを的確に捉え、自家生産及び地元農家が生産した農産物を厳選して使用するとともに、菓子等の加工品製造においては乳化安定剤などを無添加としている。特に、素材にこだわり、風味や色、栄養価を壊さず発色良く仕上げる「常温乾燥機」（山形大学と県内企業の共同開発）の導入や、瞬間冷凍技術の利用などの新技術を積極的に導入することで、素材の持ち味を最大限に活かした商品を生産している。

衛生面では、酸性電解水による殺菌処理や、HACCPの考え方を取り入れ、衛生管理に万全を期し、安全・安心な商品の提供を心がけている。

また、これらの加工品の製造において、生食販売できない規格外品も商品化することで、生産したぶどうや仕入れ品の商品化率を向上させている。

原料と鮮度にこだわった本物志向のジェラートやレーズン入りバターサンド等の菓子類は、国際見本市「フードメッセinにいがた」6次産業化賞、「日本ギフト大賞」最高賞及び「ジャパンフードセレクション」金賞を受賞するなど、数々のコンクール等で表彰を受け、高い評価を受けている。

また、ぶどう果実と詰め合わせ販売する商品等を充実させるため、自家栽培したぶどうを市内のワイナリーに醸造委託し、平成29年に酒類販売業許可を取得してワイン等の販売を開始した。さらに、令和4年には漬物製造業・密封容器製造業許可を取得し、なす漬け、ピクルス、フルーツソースの販売も開始している。

直売所に併設するカフェでは、無添加のできたてジェラート、ぶどうをふんだんに使用したパフェ、自社製造のパウンドケーキ・ベーグルや、フルーツたっぷりのアイスクリームなどを提供しており、県内外の利用者から好評を得ている。

#### ③ 販売管理の効率化等

当日収穫した新鮮なぶどうを迅速に発送するため、宅配業者の産直用システムを利用し、前年の購入履歴からダイレクトメールを郵送して注文を受け、予約順に発送するよう工夫するとともに、宅配伝票の作成、納品請求書管理、売上管理、売掛金管理等を効率的に行っている。

また、複数のクラウドサービスを利用して、製造・在庫管理、業務日報の作成、スタッフ間の業務連絡、見積書管理、従業員の勤怠管理や給与計算、確定申告書の作成

を行っている。

このように、販路拡大、カフェ営業、加工品の新商品開発などの取組により、売上高は順調に伸び続けている。

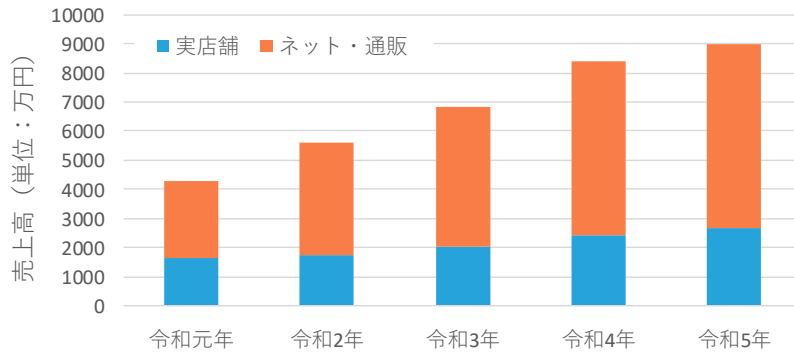


図5 年間売上高の推移

#### (4) 技術的特色

##### ① 安全・安心なぶどうづくり

園地の全てをハウス栽培にして病害の発生を抑えるとともに、病害虫の発生状況に応じて効率的な防除を心がけており、農薬の散布回数を最小限に抑え、効果的な防除を実践している。令和5年の年間の農薬成分使用回数は、慣行レベルに比べ3～4割少なく、大幅な削減が可能となっている。

施肥は、有機質配合肥料を使用し、令和5年の化学肥料由来の窒素施用量は、慣行レベルに比べ8割少なく、環境に配慮した生産を行っている。

##### ② 長期間の生産・販売の実現

長期出荷体系を構築するため、「デラウェア」の加温栽培に先駆的に取り組み、ハウス内温度管理や着房管理など、加温栽培技術の産地での発展に寄与してきた。

加温栽培を導入することで、収穫時期を3週間程度早めることが可能となり、これに加え、冷蔵貯蔵技術も導入することで、7月上旬～10月中旬までの長期販売体系を実現している。

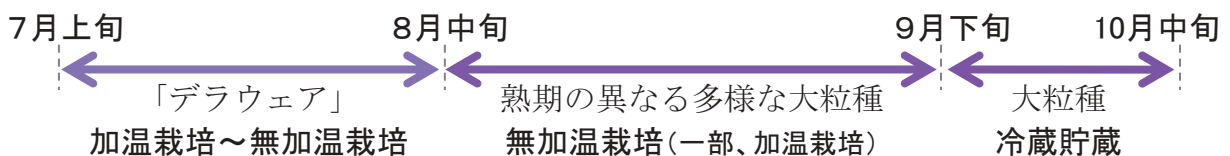


図6 年間の出荷スケジュール

##### ③ 立地環境を活かした高品質生産

朝夕の寒暖差が大きく、ぶどうの栽培に適した立地環境であることに加え、樹の植栽間隔を広めにとることで十分な棚面の明るさを確保しており、着色良好で、糖度が高く濃厚な食味のぶどうを生産している。また、全園地で手間を惜しまずに、房づくりや摘粒などの栽培管理を徹底することで、果粒肥大が良好な果房を生産している。

農産物の価値向上と農業の活性化を目指し、「日本野菜ソムリエ協会」が開催する果

物・野菜、農産加工品の品評会「野菜ソムリエサミット」において、令和5年8月に漆山氏が生産した「デラウェア」が金賞を受賞するなど、生産するぶどうの品質や食味が高い評価を受けている。

#### ④ 消費者ニーズに対応した生産

顧客のニーズを踏まえ、ほとんどの品種で種なし栽培を導入しており、「シャインマスカット」など皮ごと食べられる新品種の導入を進め、栽培面積を増やしている。置賜地域は全国有数のぶどう苗木の産地でもあるため、新品種に関する情報や消費者・全国の産地の状況を把握しながら、適宜、品種の追加・更新等を行っている。

### (5) 地域への波及効果

#### ① 地域活性化への取組

地元の農家から仕入れた農産物は、規格外品であっても加工して付加価値を付けることで高価格帯販売を実現しており、仕入れ価格に反映することで、仕入れ先農家の収益向上につなげている。

また、コロナ禍でも年間来客数は増え続けており、年間に延べ1万人以上訪れる来店者のSNSなどを通じて、産地全体の認知度向上につながっている。

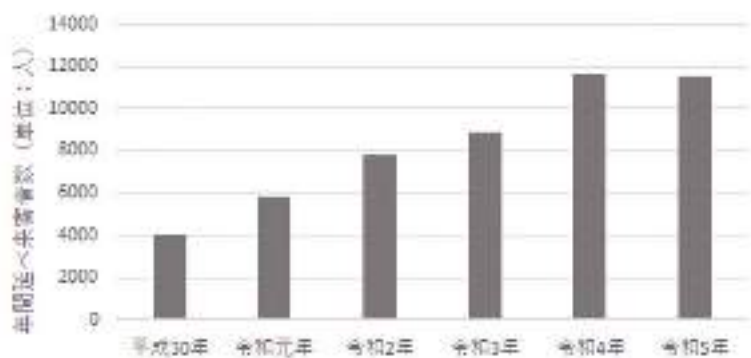


図7 直売所年間来客数の推移

#### ② 地元雇用の推進及び農業担い手の育成・食育活動

通年の労働力確保のため、常勤雇用の多くは地元出身者である。また、県で利用を推進している農業アルバイト仲介アプリ「daywork」等を活用し、作業人員の確保を図っている。

労働環境改善の取組みとして、夏場の暑い時間帯（午前11時から午後3時）は、なるべく園地の作業は行わず、加工作業に従事している。

陽子氏は県指導農業士を務め、教育機関からの研修生受け入れなど担い手の育成に尽力されている。これまで山形県立農林大学校（現東北農林専門職大学附属農林大学校）からは、先進農家体験学習として累計で15名（年間2～3名）、東京農業大学からは、夏季休講期のインターン研修として累計30名以上（年間1～10名）を継続的に受け入れている。

また、中学生の職場体験や高校生の総合学習の研修を受け入れており、未来の農業を担う世代に山形の果物等の魅力を伝える食育活動を行っている。

## (6) 今後の経営展開

### ① 栽培規模の拡大と省力化

今後のぶどうの品種構成としては、「デラウェア」は食べやすく子どもや高齢者などに人気があるため生産を維持していくとともに、大粒種では多様な顧客ニーズに対応するため、有望な新品種を導入しながら多品種栽培を継続していく。

また、輸出を含めた卸販売の問合せが多数あるため、近隣の休耕地を借り入れ、規模の拡大を計画している。また、灌水作業を現在の移動式スプリンクラーから、配管による固定式に整備し、省力化を図っていく予定としている。

### ② 新商品の拡充と情報発信の強化

加工品のインターネット通販も好調であることから、ジェラートの増産に向け、令和5年にフリーザーを増設し、業務用の大容量容器販売を開始した。また、ジェラートやカフェで提供するメニューを拡充するため、液体式急速冷凍技術の導入を検討しており、今後も加工品製造の取組みを強化していく。

新商品として、令和6年にさくらんぼのバターサンドと、生地にも米粉100%を使用したグルテンフリーのケーキサレ（フランス発祥の甘くないケーキ）を発売し、大変好評であるため、コンテストや商談会での出品を検討している。

また、更なる販売力強化のため、令和5年にホームページをリニューアルしており、SNSによる情報発信を強化していく。

### ③ 経営の効率化

業務・経営管理の効率化のため、令和5年からDX化を進めている。すべての販売・製造・経費管理・衛生管理等について、スマートフォンやタブレット端末を利用し、スタッフが直接入力し、自動連携を行うことで、管理体制が大幅に改善した。今後も最新の経営管理サービスの利用を積極的に検討していく。

### ④ まとめ

現在、経営としては発展途上の段階である。思い描く経営形態を後継者に引き継いで経営発展していくため、従業員の働きやすい環境の整備や更なる雇用拡大に向けた法人化の検討を進めるとともに、今後も「漆山果樹園」の知名度アップと各部門のさらなる売上向上に努めていく。



## II. 経営概況

経営 類型	果樹専業・ぶどう専作（ハウス）、農産加工
----------	----------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	220a
水田	a
普通畑	a
果樹園	220a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）	
① ぶどう	220 a (	220 a)
②	a (	a)

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
ジェットヒーター	2台	防霜用	H8, H19	
加温器	2台	デラウェア 15a 用 シャインマスカット 7a 用	H14 H17	
スピードスプレーヤー	1台	600ℓ	H31	
軽トラック	1台		H31	
空冷式冷蔵庫	1台	7坪	H13	
製氷機・冷凍冷蔵庫等	1台	飲食店用設備	H25	
ミニローダー	1台	駐車場整備	H27	
業務用冷蔵庫等	1台	ジェラート等製造用設備	H27	
アイスクリームフリーザー	2台	ジェラート製造用設備	H27, R5	
常温乾燥機	5台	ドライフルーツ製造用設備	H27, H30	
ラベルプリンター	1台		H28	
販売用車両	1台	イベント・配達用ワゴン車	R1	
除雪機	1台	13馬力	R4	
スチームコンベクションオープン	1台	焼菓子等製造用設備	R4	
ブラストチラー	1台	冷蔵、冷凍対応	R4	

※ 農産加工用機材等は、取得価額100万円以上のものを抜粋して記載。

#### (2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
果樹棚・ハウス	ビニールハウス	220a（11か所）	H8～H29	
作業所	木造	56坪	H9	
倉庫・加工所	木造	10坪	R25	
アイスクリーム工場	木造	10坪	H27	
トイレバリアフリー化改修	木造	5坪	R2	
加工室	木造	20坪	R3	

※ 果樹棚・ハウス以外は、取得価額100万円以上のものを抜粋して記載。

### 3. 農業労働力の状況

#### (1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分担 作業
					品目① (ぶどう)	品目② ( )	品目③ ( )	
族	本人	54歳	250日	250日	250日	日	日	栽培管理 営業・開発 経営管理
	妻	56歳	250日	200日	200日			
	次男	23歳	220日	220日	220日			
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日数	/			
		男	26歳	220日				
		女	27歳	220日				
		女	30歳	220日				
		女	50歳	220日				
		男	52歳	220日				
	女	40歳	220日					
臨時雇用	3人	延べ雇用日数		50 (人・日)				

#### (2) 10a当たり総労働時間

品目・品種	10a当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
ぶどうデラウェア	434時間 (334時間)
ぶどう大粒種無核 栽培品種	425時間 (325時間)

### 4. 果樹生産の概況

品目・ 品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a当たり
ぶどう	200a	220a	220a	35,200kg	38,000kg	38,000kg	37,067kg	1,738kg

### 5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
ぶどう	0%	0%	0%	5%	85%	10%	0%
加工品	0%	0%	0%	0%	100%	0%	0%

## 6. 園地の状況

### (1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H8	デラウェア	15a	棚一体型の加温ハウス	
H11	デラウェア	16a	棚一体型の無加温ハウス	
H13	大粒種	15a	〃	
H14	大粒種	10a	園地造成、棚一体型の無加温ハウス	補助事業活用
H15	大粒種	3a	棚一体型の無加温ハウス	
H15	デラウェア	4a	〃	
H16	デラウェア	17a	〃	
H17	大粒種	19a	〃	
H20	大粒種	16a	〃	
H22	シャインマスカット	7a	棚一体型の加温ハウス	
H27	大粒種	23a	棚一体型の無加温ハウス	借地
H28	デラウェア	30a	棚パイプ改修（無加温ハウス）	借地
H29	大粒種	15a	棚パイプ改修（無加温ハウス）	借地

### (2) 現在の園地の状況

園地は自宅や作業場の周辺にあり、全て徒歩で移動可能な距離にある。また、園地は緩傾斜地または平坦地であり作業性がよい。各園地に道路や進入路があり運搬しやすい。このため、行き届いた管理が可能である。
ため池や水路が各園地の近くにあるため灌水は可能であるが、ホースやスプリンクラーを移動する必要がある。今後、各園地への配管と固定式のスプリンクラー設置を予定している。園地は全て、強度が高い棚一体型のハウスのため、雪害や強風に対して一定の耐性がある。また降霜被害の恐れがある場所は、加温機やジェットヒーターを整備している。
新品種のぶどうを数多く試作・導入して育成しており、顧客を飽きさせない対策を行っている。

## 7. 10a 当たり総労働時間

(様式3-1 経営概況のうち表3 (2) の内訳)

	品目① (ぶどうデラウェア)	品目② (ぶどう大粒種無核 栽培品種)	品目③ ( )
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
雪害防止	4 ( )	4 ( )	( )
ハウス被覆	24 ( 10)	24 ( 10 )	( )
防霜対策	4 ( )	4 ( )	( )
除草	6 ( )	6 ( )	( )
病虫害防除	6 ( )	12 ( )	( )
縦枝誘引	4 ( )	3 ( )	( )
芽かき	8 ( )	8 ( )	( )
新梢誘引	8 ( 2)	5 ( )	( )
摘房・花穂整形	25 ( 25)	40 ( 35 )	( )
新梢管理	8 ( )	10 ( )	( )
1回目ジベ処理	24 ( )	14 ( )	) ( )
摘粒・摘房	70 ( 60)	90 ( 70 )	( )
2回目ジベ処理	4 ( )	4 ( )	( )
ハウス換気・防鳥対策	3 ( )	2 ( )	( )
笠(袋)かけ・修正摘果	4 ( 4)	10 ( )	( )
収穫・選別	80 ( 70)	60 ( 50 )	( )
ハウス被覆除去	10 ( )	10 ( )	( )
施肥・土づくり	4 ( )	4 ( )	( )
整枝・選定	32 ( )	10 ( )	( )
越冬対策	3 ( )	2 ( )	( )
生産管理労働	3 ( )	3 ( )	( )
生産関係労働時間 計	334 ( 171 )	325 ( 165)	( )
包装・荷造り	50 ( 40 )	50 ( 40 )	( )
販売	50 ( 40 )	50 ( 40 )	( )
小計	100 ( 80 )	100 ( 80 )	( )
合計	434 ( 251 )	425 ( 245 )	( )

8. 写真



中央：漆山 和志 氏  
右：漆山 陽子 氏  
左：(次男) 拓未 氏



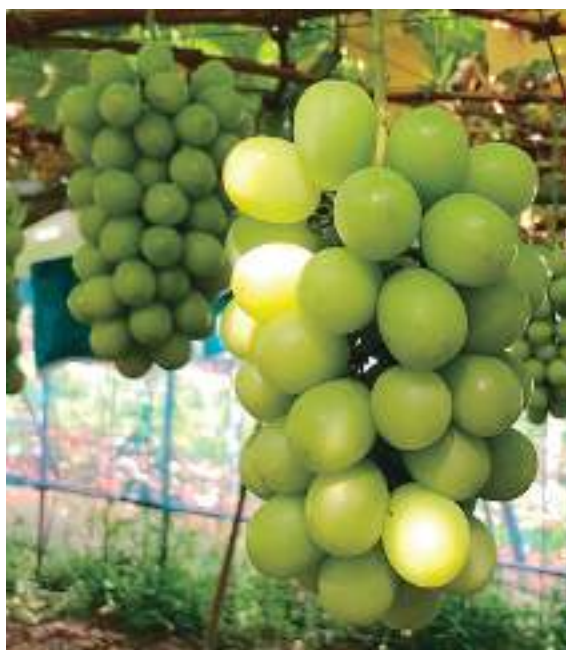
ジベレリン作業中の漆山氏



漆山氏園地産「デラウェア」



同上「ブラックビート」



同上「シャインマスカット」

【青果部門】



デラウェア

出品者：漆山果樹園

提供方法：生食

お問い合わせ：漆山果樹園 0238-43-3739



R5年8月の野菜ソムリエサミットにおいて「デラウェア」が金賞を受賞



直売所のぶどう陳列コーナー



3種のぶどうジェラート



R4年日本ギフト大賞においてぶどうジェラートがふるさとギフト最高賞及び山形賞をダブル受賞



R4年ジャパンフードセレクションにおいてバターサンドが金賞受賞



当園カフェのメニュー



当園産ぶどうを使ったぶどうパフェ

# 野沢 昇

住所及び氏名

住所 山梨県 山梨市  
のざわ のぼる  
氏名 野沢 昇 (68歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

野沢氏は、ブドウ専業農家として山梨市岩手地区において、落葉果樹栽培に適した気象や立地条件を活かして、施設ブドウ41a、露地ブドウ165aの合計206aを栽培している。当地域は、傾斜地で小面積の農地が多い中山間地域に位置しているが、高品質安定生産技術、省力化栽培技術の検討・実践および経営面での工夫により高収入な農業経営を実現している。

経営面では、シャインマスカットを主軸に家族経営としても過度な負担がかからない栽培体系を構築するため、施設栽培と露地栽培による労力の平準化や早期収入確保が可能な栽培体系に取り組んでいる。

技術面では、施設栽培の安定生産に向けた温湿度管理や灌水管理などの栽培体系、生理障害の低減に向けた栽培方法の検討など、生産性低下の要因となる課題の解決について関係機関・団体とともに取り組み、高品質安定生産に繋げており、樹勢調整のための新梢管理、植物生育調整剤の使用などの省力化技術に取り組む、効率的かつ高収入なブドウ栽培を実践している。

また、有機物資材の施用および温暖化対策に貢献できる4パーミル・イニシアチブなどの環境保全型農業を実践するとともに、安全・安心な果実を生産し、消費者に届けるという意識も非常に高く、地域内でも早い段階でGAPや環境にやさしい農業への取り組みを開始し、地域の生産者に呼びかけることで地域全体の取り組みを促進させた。

さらに、地域の農協のブドウ部部長、生産部長などの役員を20年以上にわたり務め、生産力向上や販売力向上のために情報交換の場を設定するなど地域農業の振興に精力的に取り組むとともに、担い手の確保や次世代を担うリーダーシップを発揮できる人材育成に向けて、新規就農希望者の受け入れや地域への定着を図る取り組みを実施し、地域のリーダーとしての役割を長年果たしており、地域への貢献度も非常に高い。

### 2. 対象経営を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

当該経営体が所在する山梨市は甲府盆地の東部に位置し、笛吹川沿いに南北に広がり、北部は山岳・丘陵地帯、南部は笛吹川の左岸に平坦地、右岸には平

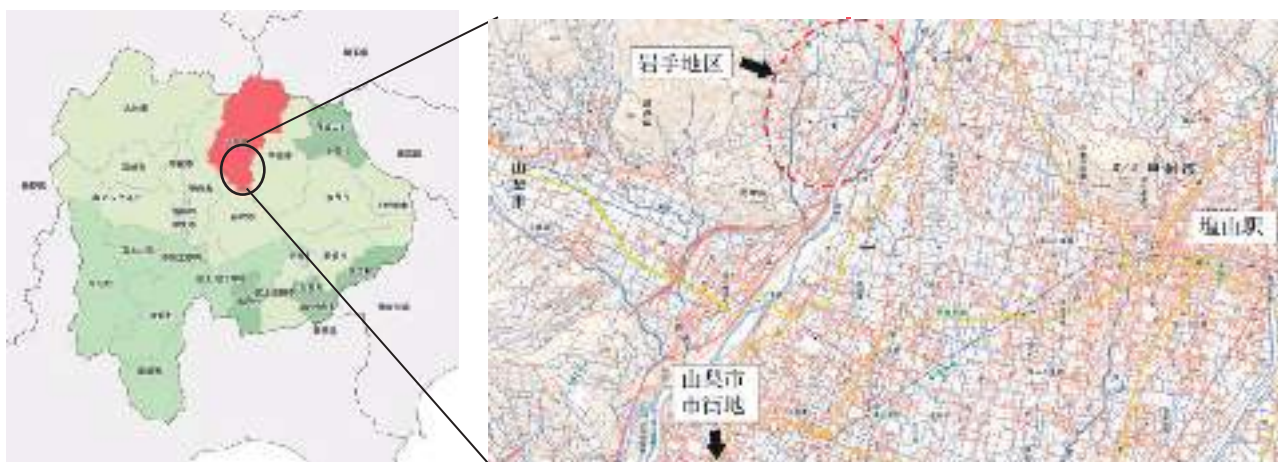


平地から丘陵地帯が広がっており、夏は暑く、冬は寒いという典型的な内陸性気候である。

山梨市の年間平均気温は14.1℃、年間日照時間は2,209時間、降水量は1,106mm（アメダス勝沼地点）となっており、気温の日較差が大きいことや、晴天が多く空気が乾燥するなど、特に落葉果樹栽培に適している地域といえる。

岩手地区は、標高350～500m程度で市街地北西部にあり、奥秩父山系南側の丘陵地域に位置する。果樹の産地として、ブドウを中心にモモ、スモモ、オウトウなどの品目が栽培される。

なお、当該地区は都心から約100km圏内に位置し、中央自動車道勝沼ICおよび一宮御坂ICまで約20分の距離にあり、京浜地域などの一大消費地まで1時間30分程度とアクセスに恵まれている。



山梨県山梨市の位置図

岩手地区の位置

## (2) 地域の果樹農業事情

山梨市の農業は、昭和30年頃までは養蚕、米を中心とした農業経営が主流であったが、昭和40年代以降に、恵まれた自然条件や立地条件を活かした、高い収入が得られる果樹栽培への転換が急速に進展し、昭和50年代にほぼ現在のような果樹を中心とした産地が形成されていった。

現在、山梨市では果樹農業が基幹産業になっており、総耕地面積1,129haの内、約95%の1,086haが果樹園である（農業センサス 2020年）。特にブドウ、モモ、スモモ、オウトウは基幹作目であり、この4品目で大部分を占めている。また生産された果実の多くは京浜市場を中心に全国に出荷されており、大消費地に対する一大産地として大きな役割を果たしている。

岩手地区は、山梨市の中でも中山間地域に位置しており、土壌の種類は褐色森林土が大半を占める。農地は傾斜地が多いため水はけは良好であるが、小面積であり、機械での作業がしにくいことから農作業に労力を必要とする。

なお、岩手地区は令和4年7月に国連食糧農業機関（FAO）より、世界農業遺産に認定された「峡東地域の扇状地に適応した果樹農業システム」の地域（山梨

市、甲州市、笛吹市)に位置しており、狭い農地で収益性の高い農業経営を実現し、小規模な家族経営でも安定的な暮らしが維持できる優れたシステムを構築しており、世界的にみても独創的で重要な農業形態となっている。

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

野沢氏は、高校卒業後にアメリカワシントン州の落葉果樹農家で経営と技術を学ぶために2年間研修を行い、22才で後継者として就農した。海外研修で得られた販売方法や常に挑戦する姿勢は、現在の経営にも活かされている。

就農当初の岩手地区は、これまでの養蚕や水田から生産性の高い果樹に着目した果樹栽培への転換を進めている時期であった。

就農当初よりブドウ専業農家で、露地ブドウのデラウェアやマスカット・ベリーAが経営の中心であったが、労力分散と高収入が見込める施設ブドウに昭和50年代の早い時期から取り込み、高度な技術が要求される施設栽培と露地栽培の組み合わせにより、年間を通した栽培体系を岩手地区でいち早く実現している。さらに、施設・露地栽培ともに消費者の嗜好の変化に対応して、巨峰、ピオーネ等の大房系ブドウを導入し、現在ではより嗜好性の高いシャインマスカットや注目品種である富士の輝を取り入れている。

近年では、温暖化や異常気象への対策が可能と考えられる品種の導入や栽培に取り組むなど、常に挑戦を続けるとともに、地域農業の維持発展のため、新規就農希望者を研修生として受け入れ、ブドウ栽培技術を伝承するとともに、地域への定着・定住を進める活動に注力している。

#### (2) 経営の状況

施設ブドウ、露地ブドウによるブドウ専業の経営である。経営面積は206aであり、施設ブドウ41a、露地ブドウ165aと施設ブドウが全体の約20%を占めている。

経営戦略として、施設ブドウ、露地ブドウともに安定した販売を確保するために系統出荷を中心とした販売を行っている。特に、近年消費者からの需要が高く、高単価な取引が行われるシャインマスカットは、施設と露地を組み合わせることで、労力分散や長期出荷が可能となり、高い収入が得られる要因となっている。

#### (3) 経営的特色

##### ①施設栽培を基盤とした高収入経営の実現

施設は、加温ハウスが3棟(41a)あり、経営面積の約20%を占めている。加温ハウスを有効に活用し、家族経営の限られた労働力の中で最大限の成果を得るため、管理作業や出荷が重ならないように、7月に収穫する施設栽培に始まり、露地ブドウと長期出荷(3カ月)が可能な栽培体系を組み立て、中山間地域の栽

培が不利な条件でも高い収入が得られる農業経営を実現している。

○施設栽培と露地栽培の収穫時期

作型	品種	R5年 成園面積	収穫量	収穫時期												
				7月			8月			9月			10月			
				上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
施設栽培	シャインマスカット	24	4,800	→												
	富士の輝	15	3,000		→											
露地栽培	シャインマスカット	40	10,000					→								
	富士の輝	30	4,000								→					

②高収入な品種の導入

野沢氏は、果樹経営において収入を高めるためには、導入する品種の選定が最も重要であると考え、消費者が求める品種は当然であるが、栽培しやすい品種を見極め導入するように努めている。特に、種なしで皮ごと食べられ、女性や子供など消費者に人気が高いシャインマスカットを早くから施設栽培に導入した。また、全国的なシャインマスカットの人気を見越して、赤系ブドウとシャインマスカットの交配品種である富士の輝を主力に位置づけ、栽培面積を拡大している。

また、加温ハウスの一部（5a）は、品種の選定や品質改善のための調査・研究用として活用しており、岩手地区の将来を見据え温暖化・異常気象でも、安定的に高品質果実を生産するための検討を続けている。

このように、常に時代のニーズに合わせた品種を選定し、高品質な果実生産に努める意識が高収入経営を実現した一因と考えられる。

（４）技術的特色

①施設栽培の高品質安定生産に向けた栽培体系の検討と取組

施設栽培は、高い技術力が求められ、期間を通じた温湿度など栽培管理の善し悪しが果実品質や収量に影響する。県下の一部栽培者では、糖度が上がりにくい、果粒肥大が悪いなどの品質のばらつきに関する課題が生じている。

野沢氏は、デラウェア、ルビーオクヤマなどのハウス栽培で培った高い栽培技術を基に、農協、農務事務所と連携し、シャインマスカットの施設栽培における生育期間中の温湿度管理方法、灌水量、貯蔵養分の蓄積や有効活用を目指す整枝剪定方法、剪定時期などの栽培管理の検討と改善を図ることで、高品質生産を可能にする加温体系の改良や高品質化に向けた課題解決に取り組んでいる。

また、講習会の後に生産者同士で情報共有できる場を設け、より高いレベルで高品質栽培が可能になる栽培方法の検討を続けており、栽培方法の一部は、関係機関・団体などにフィードバックして調査が行われ、その有効性が実証されている。

#### ②施設栽培における安定生産技術の確立

施設栽培においては、低温で日照が少ない時期に加温するために樹への負担が大きく、野沢氏の施設ブドウにおいても生理障害が発生し、収量や品質の低下が問題となっていた。しかし、生育期間中の温湿度、灌水量の調節、葉面散布剤の利用など栽培管理の改善を図るとともに、基本技術を徹底することで生理障害の発生を減少させ、安定生産を実現している。

健全な他の花穂や副穂、上部支梗を利用するなど生理障害発生の低減が可能と考えられる栽培方法を地域で共有し、地域一丸となり、安定生産を進めていく。

#### ③施設栽培と露地栽培における省力化技術の活用

ブドウ栽培では、房づくり、摘粒、出荷および調整作業に労力が集中する。そのため、品質を落とすことなく、その時期の労力を低減できる省力化技術の活用が、経営の規模を拡大していく際の課題となっている。

栽培の省力化に向けて、①樹勢の調整、②着粒安定、摘心等の新梢管理の省力化させるためのフラスター液剤の利用、③出荷・調整作業に必要な以上の労力をかけないために、上部支梗の利用による徹底した房作りや摘粒作業などの省力化技術に応用している。

さらに、省力化が可能な品種の導入、生育差や天候など過去のデータもきめ細かく確認した上での作業計画の作成、見直しを徹底する取り組みで、更なる栽培の省力化を図っている。

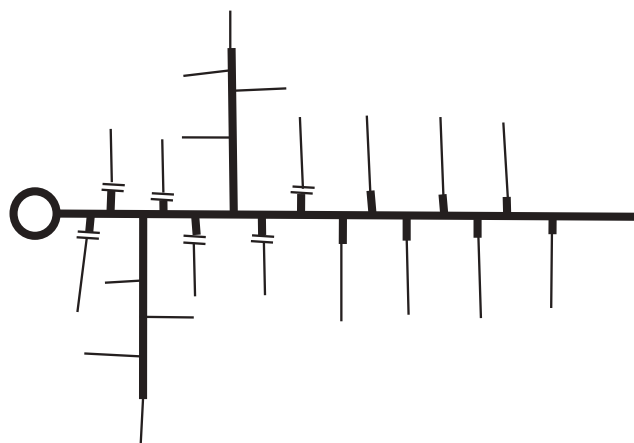
また、栽培する全圃場に運搬車が乗り入れ可能であり、ほ場内での移動、資材の搬入、収穫物の搬出などで効率化が図られており、省力化に大きく貢献している。

#### ④早期収入確保に向けた栽培方法の導入

新植や改植に伴う収入低減の最小化を目的として、早期成園化を図るため、一つの樹の中で短梢栽培と長梢栽培を組み合わせた独自の整枝剪定方法を導入している。本整枝剪定方法は、植付2～3年目は、短梢栽培に準じて枝を剪定する。4年目以降は、主枝先端の枝は引き続き短梢栽培に準じて剪定し、主枝基部側は、樹冠拡大に伴い必要な枝を残す長梢栽培に準じた剪定を実施しており、最終的には長梢栽培にすることも可能な整枝剪定方法である。

これにより、樹齢が若いうちから収量を確保できて一定の収入が得られると

ともに、短梢栽培と長梢栽培の考え方が理解しやすくなっており、新規就農者も取り組みやすいように工夫されている。



4年目以降の整枝・剪定（模式図）

#### ⑤高品質安定生産のための土づくり

おいしいブドウづくりは、土づくりからという意識を就農当初から常に持ち続けている。これまで試行錯誤をかさね、様々な有機物資材や草生栽培による土づくりを進めている。

現在では、不耕起栽培を行いつつ、土壌分析を行い、土の状況を確認しながら、牛ふん堆肥や米ぬかなどの有機質主体の肥料を圃場に施用し、物理性や化学性を向上させる土づくりを進めている。

長年継続的に土づくりを行ってきたことにより、土中の水分量の急激な変動が抑制され、乾燥や過湿などの気象変動に対応しやすくなり、樹体生育の健全化や高品質安定生産が可能となっている。

このような土づくり方法について、地域の生産者や新規就農者へ働きかけを行っており、周囲への波及効果は大きい。

#### ⑥GAPや環境にやさしい農業への取組

持続可能な農業生産や環境にやさしい農業に対して高い認識を持ち、安全・安心な農作物の生産・提供に努めている。

やまなしGAP認証を受け、GAP手法による農業生産管理の取組を行っており、周囲の環境整備やリスク管理まで経営管理意識を高めている。

また、世界の土壌表面の炭素量を年間4パーミル増加させることができれば、人間の経済活動などによって増加する大気中の二酸化炭素を実質ゼロにすることができるという考え方の4パーミルイニシアチブ活動の一環として、剪定枝をチップ化し、土壌に還元することで、農業分野から脱炭素社会の実現を目指す取り組みをいち早く取り入れている。

## (5) 地域への波及効果

### ①組織の先導的役割

野沢氏は、JAフルーツ山梨の岩手地区ブドウ部部長やハウスブドウ部部長をはじめ、40才台から20年以上にわたりJAフルーツ山梨の岩手地区生産部長を務めている。地区役員に加え、全農やまなしハウスブドウ部部長を令和5年に歴任している。

京浜市場を中心とした販売促進活動を精力的に行い、販売力向上に尽力するなど地域農業の振興に対する貢献度は非常に高い。さらに、市場から県外の動向や販売に関する情報を積極的に収集し、地域で共有することで、地域の方向性を検討できる体制づくりを常に心がけている。

また、優れた経営を行いつつ、新規就農者等の育成に指導的役割を果たす指導農業士としても活躍され、支部役員を務めるなど地域の若手農業者に経営や技術に対する助言を行っており、地域農業の振興に関して精力的に活動している。

### ②地区のブドウ生産量の増加

生産部長在職中の岩手地区のブドウ出荷量は、平成30年度134 t から令和5年度214 t と約1.6倍に、販売金額は平成30年度214,000千円から令和5年度415,000千円と約1.9倍に増加している。野沢氏がこれまでに培ってきた栽培技術や得られた情報を可能な限り共有・還元した成果として、地域の生産力が向上したと考えられる。

### ③技術の伝承

地域の生産者や新規就農希望者には、野沢氏がこれまで培ったノウハウを惜しみなく伝えることで、地域全体の生産力向上にも繋がっている。

また、後継者として経営継承を目指している長男の就農が数年後に見込まれている。現在は、房づくり、摘粒作業および収穫物の出荷調整を中心とした作業を野沢氏とともにやり、技術を修得している。今後、剪定、病害虫防除、土づくりなどの栽培技術や経営について、野沢氏がこれまでに培ってきた技術や経験を受け継ぐために研鑽を続け、数年後を目標に就農する予定となっている。

### ④担い手の育成・確保

新規就農希望者の育成・定着にも注力しており、平成29年から令和5年に、山梨県を始め、秋田県、埼玉県、東京都、大阪府など全国各地から毎年平均3名程度を受け入れ、これまでに21名を岩手地区に就農させ、地域農業の担い手として活躍している。

野沢氏は、担い手の育成、地域への定着を図る取り組みとして、地区で営農が行われなくなったハウスアウトウ跡地などの農地を対象に、毎年30～50a程度

に簡易ブドウ棚を敷設している。この簡易ブドウ棚は、単管パイプを用いて作られており、一定の技術を習得すれば、誰でも敷設することが可能な作りとなっている。

簡易ブドウ棚を敷設した農地には、シャインマスカットなど高収入が望める品種を植栽し、数年間管理し、自ら育成した担い手が耕作できるよう支援している。こうした取り組みを行うことで、新規就農者は早くから収入が得られ、地区へ定着しやすくなっている。平成29年から始めたこの取り組みにより、将来有望な農業者として地域に根付いているなど、岩手地区のブドウ生産の維持・発展に貢献している。

## (6) 今後の経営展開

### ①経営の安定戦略

野沢氏の経営戦略は、高い収入を得ながら労力を平準化するため、施設ブドウ、露地ブドウの系統出荷により家族経営の安定的な発展を目指すことである。このため、販売価格が高いシャインマスカットの他に、市場の動向、消費者ニーズおよび環境変動などによる影響を総合的に見定めて、新品種の導入などを検討することとしている。

### ②果樹産地の維持・発展への思い

産地の維持発展には、地域全体の生産力向上による地域の所得増加や新たな担い手の育成・定着が重要課題であると分析している。そのため、野沢氏がこれまでに培ってきた栽培技術や得られた情報を、講習会や地域の集まりを活用して可能な限り地域に共有・還元することで、高品質安定生産や儲かる農業が身近なものになると考えている。

今後、地域の中心として、協力・信頼関係の強化に向けた地域内の仲間づくり、就農希望者の受け入れや技術の伝承、若くてリーダーシップがとれる農業経営者の育成を行うことで、地域農業を盛り上げる体制づくりを継続していきたいと考えている。

### ③チャレンジ精神

近年では、温暖化などの異常気象の影響により、ブドウの着色不良や生理障害の発生が目立つようになっている。これまでに自身の調査・研究用ハウスで得られた結果を基にして、シャインマスカットや着色良好な富士の輝の導入により高収入な経営を実現している。

今後も経営安定や地域農業の発展のために、温暖化の影響を受けにくい新品種の導入や温暖化に適応可能な栽培方法の模索、情報収集を行い、栽培技術面や経営面などを総合的に分析しながら、地域農業の発展に向けチャレンジを続ける。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹専業・ブドウ専作（露地、ハウス）
----------	--------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	206a
水田	0a
普通畑	0a
果樹園	206a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）
① 施設ブドウ	41 a ( 39 a )
② 露地ブドウ	165 a ( 70 a )
③	a ( a )
④	a ( a )
⑤	a ( a )

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
トラック	1		H30	
枝破砕機	1		H31	
運搬車	1		R3	
バックホー	1		R4	
乗用草刈り機	1		R5	

#### (2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
加温ハウス	パイプ構造	10a,26a,5a	S56,H26,H26	
ブドウ棚	コンクリート パイプ構造	90a 116a	S47~	
資材農薬機械保管庫	鉄骨作り		H27	
井戸			R5	
加温器		41a (3台)	R1,R3,R5	



3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (施設ブドウ)	品目② (露地ブドウ)	品目③ ( )	
族	本人	68	250 日	250 日	90 日	160 日	日	生産管理 全般・経 理
	娘	38	70 日	70 日	25 日	45 日		
	息子	36	85 日	85 日	35 日	50 日		
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日 数				
	臨時雇用		延べ雇用日数		550 (人・日)			

(2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
施設ブドウ	493 時間 (448 時間)
シャインマスカット	289 時間 (263 時間)
富士の輝	204 時間 (185 時間)
露地ブドウ	548 時間 (503 時間)
シャインマスカット	314 時間 (288 時間)
富士の輝	234 時間 (215 時間)

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3 年)	前年産 (R4 年)	当年産 (R5 年)	前々年産 (R3 年)	前年産 (R4 年)	当年産 (R5 年)	3 か年平均	
							収穫量	10a 当たり
施設ブドウ	36a	36a	24a	7,200kg	7,200kg	4,800kg	6,400kg	2,000kg
シャインマスカット								
富士の輝	5a	5a	15a	1,000kg	1,000kg	3,000kg	1,667kg	2,000kg
露地ブドウ	40a	40a	40a	8,000kg	8,000kg	8,000kg	8,000kg	2,000kg
シャインマスカット								
富士の輝	20a	20a	30a	4,000kg	4,000kg	6,000kg	4,667kg	2,000kg

5. 販売方法別の割合

品目・品種	販売方法別の割合						
	農協	個人で市場出荷	集荷業者	スーパー等へ直接出荷	直売(宅配合)	観光園	その他
施設ブドウ		%	%	%	%	%	%
シャインマスカット	100%						
富士の輝	100%						
露地ブドウ							
シャインマスカット	100%						
富士の輝	100%						

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
S50～	デラウェアなど	26a,10a,5a	ハウスの整備	3棟
平成	巨峰など大房系		巨峰など大房系への更新	
H26	シャインマスカット	26a,5a	ハウスの更新	2棟
H26～	シャインマスカット	15a	シャインマスカットへの更新	
R2～	富士の輝	5a	富士の輝へ更新	

(2) 現在の園地の状況

・園地面積は、施設ブドウと露地ブドウを合わせて 206a であり、全ての圃場が農道に隣接しているため、圃場横に軽トラックをつけられ、作業、収穫物や資材の積みこみなどの作業性は非常によい。
・全ての圃場に運搬車が乗り入れられるように、圃場の傾斜、ブドウ棚の高さ、ブドウ樹の植え付け場所が管理されているため、作業効率に優れている。
・全ての圃場に畑かんが整備されており、気象や栽培条件に応じたきめ細やかな水分管理が可能である。

7. 10a 当たり総労働時間

	品 目 ① (施設ブドウ)	品 目 ② (露地ブドウ)	品 目 ③ ( )
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整 枝 ・ 剪 定	80 ( )	65 ( )	( )
施 肥	20 ( )	140 ( )	( )
中 耕 ・ 除 草	5 ( )	40 ( )	( )
薬 剤 散 布	10 ( )	11 ( )	( )
薬剤以外の防除	3 ( )	3 ( )	( )
授 粉 ・ 摘 果	105 ( )	89 ( )	( )
袋 か け	10 ( )	50 ( )	( )
菰かけ・防風・防霜管理	5 ( )	3 ( )	( )
かんがい・その他管理	140 ( )	27 ( )	( )
収 穫 ・ 調 製	45 (40)	65 (60)	( )
生 産 管 理 労 働	25 ( )	10 ( )	( )
生産関係労働時間 計	448 (40)	503 (60)	( )
選別・包装・荷造り	30 (10)	30 (10)	( )
搬出・出荷	15 ( )	15 ( )	( )
販売	0 ( )	0 ( )	( )
小 計	45 (10)	45 (10)	( )
合 計	493 (50)	548 (70)	( )

8. 写真



野沢 昇 氏



施設の外観



施設内部の様子



高品質なシャインマスカット



露地栽培の様子



植付 3 年目までの主幹付近の状況  
(写真下側が主幹)



植え付け 4 年目以降の主幹付近の状況  
(写真左側が主幹)



敷設された簡易ブドウ棚

# 近藤 喜美雄・近藤 京子

## 住所及び氏名

住所 静岡県 静岡市  
氏名 こんどう きみお 近藤 喜美雄 (73歳) ・ こんどう きょうこ 近藤 京子 (72歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

近藤氏は、家族で施設金柑‘こん太’（以下‘こん太’という。）と露地柑橘を主体として柿、水稻、野菜を周年で栽培するとともに、自身で立ち上げた農業法人において‘こん太’の生産をしている。現在は‘こん太’47a、露地柑橘55a、柿19a、その他16a、計147aを経営している。

主力の‘こん太’は、静岡市清水区柏尾でニンポウキンカンの枝変わりとして発見された極めて甘みの強い金柑で、酸っぱさをほとんど感じず、生のまま丸ごとデザート感覚で食べられる柑橘である。氏はこうした‘こん太’の特徴に惚れ込んで栽培を始めた。‘こん太’はハウス栽培が前提となる金柑で、詳細な栽培特性が分かっておらず、作りにくい品種であったことから、氏がリーダーとなって「こん太研究会」を発足させ、地域の生産者と栽培技術の確立に向けた研究活動を続けた。本研究会が基盤となってJAの「こん太部会」が設立された。部会の設立後は部会長を長年務め、その強いリーダーシップと信頼される人柄によって、「しみずのこん太」ブランド確立のため、生産拡大と共販体制の強化に取り組むとともに、栽培技術の向上や生産者相互の連携・協調を図り、‘こん太’をJAしみずの新たな振興品種として確立した。また、農業法人を設立して新たにハウスを建設するとともに、‘こん太’の海外輸出に挑戦するため、ASIAGAPやGLOBALGAPと相互認証が可能な「しずおか農林水産物認証」を取得し、香港を中心にシンガポールやマレーシアへの輸出に取り組んでいる。

露地柑橘では現在、‘青島温州’と‘はるみ’を栽培しており、点滴灌水システムの導入や、スピードスプレイヤー、フォークリフトなどの機械化により省力化を図るとともに、超省力連年多収技術として近年注目を集めている温州みかんの「片面交互結実栽培法」をいち早く取り入れ、隔年結果の是正、連年安定結実・多収化、摘果作業の短縮などに取り組んでいる。

また、氏は清水農業協同組合柑橘委員会（生産者組織）西部支部支部長として、柑橘産業の振興と柑橘委員会の円滑な運営に尽力するとともに地域のリーダーとして多くの生産者を先導してきた。

## 2. 対象経営を取り巻く環境

### (1) 立地条件

静岡市は、静岡県の中央部に位置し、南には水産資源豊富な駿河湾と、北には南アルプスを源流とする水量豊富な河川を有し、温暖な気候とあわせて、自然の恵み豊かな地域となっている。

静岡市の行政区の一つである清水区（旧清水市）は、東西約12km、南北約24kmで、地形は、80%が山間地で占められ、土壌は風化変質赤黄色土や陸成未熟土が多くを占め、黄褐色でやや粘質のところが多く、有効土層も深く肥沃な土壌となっている。

清水区の年間平均気温は16.7℃（日最高気温21.2℃：日最低気温12.9℃）と温暖で、年間降水量2,380mm、日照時間2,126時間で、全般的には海洋性の気候で農業生産環境に恵まれ、特に、柑橘類の栽培には好適な地帯となっている。

（※アメダス清水1991～2020の平均値）

半径200km圏内には首都圏・中京圏等があり、その中間の太平洋ベルト地帯に位置することから、大消費地を東西に控え、交通についても新東名高速道路が開通し、供給のみならず産地に足を運びやすいという恵まれた地理的条件下で、新鮮な柑橘等の農産物を交え、栽培地にて消費者とコミュニケーションを図ることもできる優位性もっている。

また、市内には国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 カンキツ研究領域興津拠点や静岡県農林技術研究所 果樹研究センターと柑橘に関する研究機関が複数あり、高度な研究情報等が得られる利点がある。

清水区の農地はほとんどが傾斜地であったが、大規模基盤整備に取り組み、現在は地区内15ヶ所に優良農地が造成され、年々拡大されている。

### (2) 地域の果樹農業事情

清水区（旧清水市）の柑橘栽培は、明治末期から大正にかけて換金作物として導入された経緯があり、戦後になって本格的な経営作物として栽培されるようになった。

昭和30年代のみかん黄金時代には、市内に4,000ha近い栽培面積があっただけでなく、県内各地に500ha余の出作農場が開設されていた。しかし、昭和47年の大暴落を境に、‘青島温州’など優良品種への改植を図るとともに、不適地や出作農場の整理が進められた。

平成元年以降は、山間の急傾斜地を平坦な優良農地にかえ、後継者が魅力を感じることでできる活力ある近代的な農業を実現するため、地域一丸となって「県営畑地帯総合整備事業（県営畑総事業）」に取り組んでいる。

大規模基盤整備は、区内15ヶ所、事業面積758ha、畑面積403haが実施されており、

現在柑橘では243haの整備された農地に優良品種が植栽され、反当たり収量の増加や品質の安定、マルチ栽培など高品質果実生産への取組が進められている。

また、スピードスプレイヤーなどの効率的な機械の導入や、かん水施設の設置、農地中間管理事業を活用した担い手への農地集積・規模拡大など、営農体系の抜本的な改善の進展に伴い、農業後継者や地域の担い手農家も着実に増加しており、大規模基盤整備農地を中心にして高品質な果実を生産する地域となっている。

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

近藤氏は県立静岡農業高校を卒業後、柑橘専門研修所を経て昭和45年、19歳の時に就農した。当時の経営は父と2人で茶、柑橘を中心に山間部で3ha以上の面積を耕作していたが、結婚後、経営主体が氏に移り、奥様と2人で経営していくことになった。

JAしみずで大規模基盤整備が実施されるなか、平成17年に庵原地域の基盤整備地を貸借し、山間地から平坦地へと圃場を移し、作業効率の向上を図った。

‘こん太’については、平成21年にハウスを新設し、本格的に栽培を開始した。平成23年、25年にも新たにハウスを新設し規模を拡大していった。平成27年JAこん太部会の設立に伴い部会長に就任した。こん太部会では、平成29年から販売を開始した‘こん太’の最高グレード商品「コンターレ」の実現に尽力した。平成30年には、農業法人「オッティモ」を設立して、規模拡大を進めるとともに、静岡県によるGAP認証である「しずおか農林水産物認証」を取得し、‘こん太’の輸出に取り組んでいる。

#### (2) 経営の状況（概況を記述し、経営的特色は（3）として特記する）

現在の経営規模は、柑橘と落葉果樹（柿）、水稻、野菜で147aを栽培し、うち果樹類が131aで89%以上を占めている。

柑橘では、‘こん太’を特に力を入れて栽培している。自身のハウスに加えて農業法人を設立し‘こん太’の更なる生産拡大と海外輸出に取り組んでいる。

露地柑橘では県営畑総事業により整備された優良農地を貸借し、マルチ栽培・点滴灌水システムによる品質向上、スピードスプレイヤーの導入、片面交互結実法を取り入れ省力化と増収を図っている。栽培品種は、貯蔵性に優れた‘青島温州’と、高単価を期待できる中晩柑品種の‘はるみ’を栽培している。

労働力は本人と妻、次女の3人で収穫期等の繁忙期のみ臨時雇用を雇っている。

今後は、‘こん太’の栽培技術確立と生産の拡大、海外への継続的な輸出の実現に取り組んでいくとともに、露地柑橘については、省力化や収量増など生産性を高める先進



技術の導入を図っていく。

### (3) 経営的特色

#### ① 他にはない‘こん太’の積極的な導入とブランドの確立

近藤氏は、‘こん太’が発見されて以来、その極めて高い糖度と丸ごと食べられるという特徴に惚れ込み、他にはないという希少性から、その高い商品性に着目して、‘こん太’の生産拡大に積極的に取り組んできた。そして、「しみずのこん太」ブランドを確立するため、地域の生産者と「こん太研究会」を発足させ栽培技術の研究活動を続けるとともに、JAの「こん太部会」設立に取り組んだ。

こん太部会設立（平成27年）後は、長年に渡り部会長として生産者相互の連携・協調を図りつつ、生産の拡大と共販体制の強化に取り組み、平成29年からは糖度20度を誇る‘こん太’の中でも最上級ランクとなる商品「コンターレ」の販売を実現させるなど、部会設立当時は12,000Kg程度だった出荷数量を令和5年には2倍以上となる約28,000Kgまで引き上げ、‘こん太’をJAしみずの新たなブランドとして確立した。

#### ② 海外輸出への挑戦

こん太部会設立後の出荷は東京や大阪を中心に行っていたが、徐々に生産量も増えていったなかで、国内だけではなく海外への輸出を考えるようになった。平成30年に農業法人を設立し新たにハウス3棟を建設するとともに、ASIAGAPやGLOBALGAPと相互認証が可能な静岡県の認証制度である「しずおか農林水産物認証」を取得し、国際的なマーケットへのアクセスが広がるよう準備を進めるなど、先導的な役割を率先して担い、海外輸出のための生産体制を整えていった。そして東京の市場と連携して、旧正月需要のある香港を中心に、シンガポールやマレーシアにも出荷する計画を立て、‘こん太’の輸出に取り組んでいる。

中華圏では酸味が苦手な人が多く、甘みが強いものを求めるため、‘こん太’との相性は非常によく、需要も高くなっていることから、輸出先の拡大を目指して、こん太部会による一層の生産拡大と、より安全・安心な果実を消費者に届けるための栽培管理方法の改善に引き続き取り組んでいる。

#### ③ 基盤整備地の貸借と機械化

就農当初は、農地のほとんどが山間部にあったが、JAしみず管内で畑総事業が進む中で、比較的近い地域の基盤整備地を貸借し作業性の向上を図るとともに、点滴灌水システムの導入やスピードスプレーヤー等の機械化を進め省力化を図っている。また、貯蔵庫への入出庫時にフォークリフトを利用するため、貯蔵庫は自分自身で設計し、フォークリフトを十分に活用できるようにした。

#### ④家族労力主体だからこそその作物選択（周年供給への取組）

近藤氏は家族労力が主体であるため作物、品種構成として繁忙期が異なり、日々の管理が1～2人でできるものを選択している。9月頃から水稲、10月頃から柿、11月以降から露地柑橘、年明けからは露地柑橘に加え施設金柑の出荷を行っており、収穫期には臨時雇用を雇うが基本的には本人と妻、次女で担っている。また、農産物の販売に当たっては、次女を中心にネット販売に取り組み、販路の拡大を図っている。

表1 時期別の果実販売

時期 品目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
金柑(こん太)												
青島温州												
はるみ												
清見、スルガエレガントなど												
柿(早秋、太秋、陽豊、次郎)												

#### (4)技術的特色

##### ①‘こん太’の栽培技術の確立に取り組む

- ・ニンプウキンカンの枝変わり品種である‘こん太’は、栽培が難しいものの、果皮はなめらかで柔らかく、果実は非常に甘い特徴を持っている。氏は発見当初から‘こん太’の魅力に着目し、その特徴を生かせる栽培方法の検討を開始した。その後、氏をリーダーとする「こん太研究会」が発足し、地域の生産者と栽培技術の向上に取り組んできた。現在の栽培方法の主な特徴は次のとおりである。
- ・ハウス栽培：ビニールハウス内で栽培することで、熟期を早めるだけでなく、柔らかい果皮を風雨から守り冬季の凍害を防止する。
- ・熟期の管理：樹上で完熟させてから収穫することにより、糖度を20度以上に高めた果実を生産する。
- ・花と果実の管理：金柑は年に何回も開花するため、最も肥大・着色の良い一番果を選び着果管理を行う。
- ・収穫時の注意：果皮が柔らかく傷が付きやすいので丁寧に扱い、専用のかご

に二段までしか重ねない。

これまでの取り組みにより生産技術は向上してきたが、一番果の着果率向上や開花のバラツキ、スリップスの被害防止等解決されていない課題もある。そのため、氏は様々な文献の情報を集め、有効性が期待される技術を自身の圃場で試験して効果を検証したうえで、部会員に周知・普及させている。また、生産資材についても、いち早く使用し、効果のある資材は情報の周知を図っている。

## ② ‘こん太’栽培における自動灌水システム及び自動換気システムの導入

氏が管理しているハウス(6棟)は2か所に分かれている。うち1か所は自宅から車で30分程度かかるため、頻繁に行き来することは困難であった。そこで、ハウス内の水管理や温度管理を自動化するシステムを導入し、環境管理のための作業の省力化を図るとともに、果実品質の向上に取り組んでいる。

## ③超省力連年多収技術への取組

片面交互結実栽培は主に温州みかんにおいて、隔年結果の是正、連年安定結実・多収化、省力化が見込める技術として近年期待されている。過去には、隔年結果しやすい‘はるみ’で半樹別交互摘果の取組事例が行われたものの、普及には至らなかった。しかし、氏は普段からの情報収集のなかでその事例を有用であると感じたため、‘はるみ’で半樹別交互摘果の実証試験を行い有用な方法であることを確認していた。そのため、さっそく自身の温州みかん栽培に取り入れて、いまでは全ての温州みかん園地で片面交互結実栽培法を組み込んでいる。

## (5)地域への波及効果

### ①こん太部会の設立とブランド化・販路拡大の推進

平成27年にこん太部会を設立し、長年に渡り部会長を歴任した。部会設立以前も氏を中心に栽培技術の研究活動を生産者仲間と行い、生産振興に努めている。

また、‘こん太’のブランド化を推進するため、静岡県が全国に誇るべき農産物を認定する「しずおか食セレクション認定品」という制度を活用するため、登録に向けて生産者全体で取り組み、平成23年11月「しずおか食セレクション認定品」に登録された。

また、高品質な‘こん太’の中でも、糖度20度以上の大玉だけに厳選したものを「コンターレ」の商品名で商標を取得し、平成29年1月から販売を開始している。

更に、国内だけでなく海外輸出にもこん太部会として挑戦するなど、‘こん太’のブランド化と販路拡大に多大な貢献をしてきた。

## ②柑橘委員・副支部長・支部長を歴任

氏は平成24年度から清水農業協同組合柑橘委員会支部柑橘委員を務め、平成27年度以降は支部副支部長、平成29年度には西部支部支部長を務め、柑橘産業の振興と柑橘委員会の円滑な運営に尽力するとともに地域のリーダーとして多くの生産者を先導してきた。

## (6)今後の経営展開

近藤氏はこれからも果樹を中心とした家族労力主体の農業経営を続けながら、「しみずのこん太」ブランドの強化・発展に努めていく考えである。‘こん太’は、しみずの特産品として国内外に誇る価値と特徴を備えた収益性の高い果実であり、このことを広く次世代の若者に周知し、こん太生産者数の増加を図っていく。また、東アジアなど海外への継続的な輸出の拡大を実現するため、部会生産者全体の技術レベルの向上と法人による生産体制の強化を図り、海外マーケットに対して信頼性の高い情報の提供と出荷数量の増強を図り、最終的には国内外の消費者に‘こん太’の美味しさを届けることで、みんなを幸せにしたいと考えている。

## II. 経営概況

経営 類型	複合経営（施設金柑・露地柑橘・柿・水稻・露地野菜）
----------	---------------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	147a
果樹園	131a
普通畑	6a
水田	10a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）
① こん太	47 a (47 a)
②温州ミカン	20 a (20 a)
③中晩柑	35 a (35 a)
④柿	29 a (29 a)
合計	131 a (131 a)

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
スピードスプレイヤー(SS)	1	500 リットル	H22.4	
フォークリフト	1	1.5 トン	H14.10	
バックホウ	1		R2.9	
ハンマーナイフ	1		R3.6	
ウィンドリーマー	6		R3.4	
暖房機	6		H23.24.26 H31	

#### (2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
貯蔵庫 2棟	鉄骨	20坪・10坪	H14・H26	
ビニールハウス 3棟 +法人3棟	ビニール	7a・6a・12a 7a・7.2a・7.2a	H21・H23・H25 H31	

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (柿)	品目② (施設金柑)	品目③ (露地柑橘)	
本人		73	300日	260日	50日	110日	100日	全体 摘果収穫 摘果収穫
妻		72	200日	150日	10日	100日	40日	
次女		42	240日	200日	20日	130日	50日	
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日数				
	臨時雇用	延べ雇用日数		4~6人	20日間	(人・日)		

(2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
こん太	729 (600)
露地柑橘	266 (230)
柿	220 (170)

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a 当たり
こん太	47a	47a	47a	8,100kg	8,800kg	10,200kg	9,020kg	3,787kg
露地柑橘	105a	105a	55a	24,000kg	26,300kg	22,000kg	24,100kg	2,728kg
柿	29a	29a	29a	3,000kg	4,500kg	4,500kg	4,000kg	1,380kg

5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
こん太	80%	%	%	%	20%	%	%
露地柑橘	80%				20%		
柿	70%				30%		

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H18	青島、寿太郎、はるみ、不知火	50 a	借地・植栽（青島・寿太郎 30 a、はるみ 10 a、不知火 10a）	R5 返却
H20	青島、はるみ、スルガ	50 a	借地・植栽（青島 20 a、はるみ 2.2 a、スルガ 0.8a）	果樹経
H20	はるみ、スルガ	30 a	点滴灌水	果樹経
H21	こん太	7 a	ハウス	
H23	こん太	6 a	ハウス	
H25	こん太	12 a	ハウス	
H27	A-44、はるみ、ポンカン、こん太	-	改植	
H28	はるみ	-	改植	
H30	こん太	22 a	植栽	果樹経

(2) 現在の園地の状況

<p>・‘こん太’を栽培しているハウスは全てここ数年で自動換気システムを導入している。また小型のバックホウを使用して、樹冠外側に施用したたい肥を土壌と混和し土壌改良と樹勢の強化を図っている。</p> <p>・露地柑橘においては、基盤整備地がメインとなっており、植栽間隔を広くし、SSや運搬機等を使用できるようにしている。また、点滴かん水システムとマルチ栽培を組み合わせ「周年マルチ点滴かん水同時施肥法（マルドリ方式）」を導入しており、省力化と高品質果実生産を両立している。</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

7. 10a 当たり総労働時間

	品目①（こん太）	品目②（柑橘）	品目③（柿）
	時間（うち雇用）	時間（うち雇用）	時間（うち雇用）
整枝・剪定	20（ ）	30（ ）	25（ ）
施肥	10（ ）	10（ ）	20（ ）
中耕・除草	10（ ）	10（ ）	10（ ）
薬剤散布	50（ ）	40（ ）	30（ ）
薬剤以外の防除	10（ ）	10（ ）	5（ ）
授粉・摘果	60（ ）	20（ ）	10（ ）
袋かけ	（ ）	（ ）	（ ）
蒞かけ・防風・防霜管理	（ ）	（ ）	（ ）
かんがい・その他管理	20（ ）	10（ ）	（ ）
収穫・調製	400（ 150 ）	90（ ）	60（ ）
生産管理労働	20（ ）	10（ ）	10（ ）
生産関係労働時間計	600（ 150 ）	230（ ）	170（ ）
選別・包装・荷造り	79（ ）	20（ ）	30（ ）
搬出・出荷	20（ ）	6（ ）	10（ ）
販売	30（ ）	10（ ）	10（ ）
小計	129（ ）	36（ ）	50（ ）
合計	729（ 150 ）	266（ ）	220（ ）

8. 写真



近藤 喜美雄さんと京子さん



こん太部会員



収穫作業



こん太施設圃場



金柑「こん太」出荷物。そのまま食べれます。



大玉だけを厳選したプレミアム品「コンターレ」





「写真提供：静岡県果樹研究センター」

‘こん太’の特徴は、ニンポウキンカンと比較し果皮がなめらかで美しい。油胞が無く口当たりがなめらか。



J Aしみず管内 大規模基盤整備地（新丹谷地区）



インターネット「近藤農園からのお便り」で旬の情報提供とネット販売を実施。



青島みかんのマルチ被覆風景をインターネットに掲載。

# 永田 広敏

住所及び氏名

住所 愛知県 刈谷市

氏名 ながた ひろとし 永田 広敏 (54歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

永田氏は、愛知県刈谷市で露地ブドウ 150 a を主体とする果樹複合経営を行っている。ブドウはすべて無核栽培で、労働力は永田氏と妻、臨時雇用5名の計7名である。

経営面で最も特徴的なことは、他の直売経営では見られないほどの合理的な販売方式である。販売は前日までの予約制とし、当日は時間ごとに振り分けられた来店時間に予約品を引き渡しするのみという方法である。これにより計画的な収穫が可能となり無駄がなくなるほか、販売用果房の調製作業にも集中でき、品質管理の徹底にもつながっている。

「より良いものを買やすい価格で」という氏の理念と販売管理の効率化から、単価は品種で分けず時期ごとに一律としている。販売は箱のみで、詰め合わせ商品の場合、品種はすべて「おまかせ」である。この方法は省力的であると同時に、収穫適期の食べ頃のものその都度販売できることにもつながっている。このような永田氏の理念・こだわりにより、毎年購入するファンが多いことから、集客のためのDMなどPR活動も実施しておらず、『知る人ぞ知る農園』となっている。

技術面では、生育を揃えることで作業を平準化・簡素化し、パートとの作業分業化を図ることで合理的な栽培方法を行っている。一方、着色向上対策など品質向上に係る技術は積極的に導入し、品質には決して妥協しない。また、せん定枝を炭化させ、土壌への炭素貯留させる取組をいち早く導入し、令和6年2月に西三河地域ではもっとも早く、国の「環境負荷低減事業活動実施計画」の認定である『みどり認定』を受けている。

経営全体での徹底的な効率化や着色向上対策などによる高品質果実生産の実現、品種選定や適切な栽培方法による安定的な供給体制、せん定枝の炭化による土壌への炭素貯留のような持続可能な生産体制の導入などにより、地域のリーダー的ブドウ経営者として活躍しており、新規就農者への指導を通じて、地域のブドウ生産者の担い手育成にも尽力している。

## 2 対象経営を取り巻く環境

### (1) 立地条件

刈谷市は、愛知県の西三河地方西端に位置する。世帯数約6万9千世帯、人口約15万3千人（令和6年8月時点）である。愛知県で10番目の人口を有し、名古屋都市圏（中京圏）の中心市の1つに指定されており、トヨタグループの主要企業が本社を構える自動車工業都市である。

年間降水量約1,500mm、平均気温16.6℃と温暖な気候と肥沃な土壤に恵まれており、古くから農業が栄えてきた。

市北部は丘陵地を利用して、ブドウ・ナシ・カキなどの果樹や、スイカ・大根・白菜などの露地野菜が盛んに栽培されている。中部では、都市化が進む中で、花きなどの施設園芸が行われている。南部は、平野に水田地帯が広がっており、稲作を中心に麦、大豆の栽培、花き、キュウリやイチジク、酪農など、農業の盛んな地域である。農地面積は、約1,180haで、市全体の土地の4分の1程度を占める。



図1 刈谷市および永田農園の位置関係

### (2) 地域の果樹農業の事情

刈谷市の果樹栽培の歴史は古く、ナシは明治の終わり頃から、カキは大正末期頃から、ブドウは昭和20年頃から栽培が始まった。果樹栽培面積が順調に増えていく中で、普及推進を目的に昭和34年、刈谷市果樹組合が発足した。組合員数は50名で、構成員はカキ25名、ナシ13名、ブドウ12名であった。当初の耕作面積はカキ6.5ha、ナシ1.3ha、ブドウ1haで8割近くがカキであった。

昭和34年の伊勢湾台風での壊滅的な被害を契機に、台風シーズン前に出荷可能なブドウが着目され品目転換が進んだ。同時期にジベレリンによる無核処理技術の普及から、「デラウェア」や「種なし巨峰」の生産が増えていった。その後、農耕地周りの宅地化と昭和45年の愛知教育大学移転に伴い、主にカキ園が減少し、昭和50年頃には組合員数は34名となった。

現在の刈谷市果樹組合員数は24名である。栽培品目は、ブドウが13名と最も多く、直売主体の経営である。他にナシ、カキ、カンキツ類、イチジク等の生産が行われている。

## 3 対象の経営の概要

### (1) 経営主の履歴

永田氏は、花きの卸売市場である豊明花き株式会社に勤めていたが、37歳のときに退職し親元就農した。永田氏が就農した当初、販路はお盆前の直売はあるものの市場出荷がメインで、市況も低迷し売り上げも少なかった。150aの果樹棚の半分は鉄線で錆び、支柱も破損が目立つ。古木も多く、空いたほ場に野菜が植えられている状況であった。

花き市場勤務時に優良生産者の園地を巡回した経験から、よく整備されたほ場と土づく

りが必要と考えた。まず退職金で古くなった機械を買い替え、棚線をステンレスに、中柱をコンクリートからパイプへと順次更新していった。古くなった鉄線を張り替えながら、棚の構造と修繕方法も習得した。土壌環境の改善では、長野県から良質な堆肥を導入した。

栽培技術向上のため、20a で短梢栽培を導入し、従来の長梢栽培品種の改植を進めた。近隣の生産者を定期的に見学し、効率の良い栽培ローテーションの確立に努めた。そんな中、平成 22 年の猛暑で「デラウエア」に甚大な被害が出たことを契機に、栽培品種を大粒中心に切り替え、出荷時期の分散による経営安定を図った。有核品種の棚持ちの悪さを考慮し、「種なし巨峰」に切り替えたほか、50a の「デラウエア」を「シャインマスカット」など新しい品種へと更新していった。

販売面では、刈谷市は消費地である利点を生かし、市場出荷中心から直販・産直店舗へのお荷を中心切り替えていった。ただ、近年の異常気象の中では、熟期が予想以上に進むこともあるため、市場出荷をなくすことは考えていない。

## (2) 経営の状況

果樹複合経営で、総栽培面積は 230a、うちブドウ 150 a (うち短梢トンネルハウス 14a)、カキ 50a、クリ 30a である。園地はすべて直売所兼住宅の周囲に集約されている。収穫果実の 3 割が宅配商品、4 割がお持ち帰り、残りは産直と市場に出荷する。前職の経験から、美しい商品づくり、おいしいブドウづくりという果樹生産販売の基本を最も大切にしている。このため、宅配や持ち帰りの直売商品は自分の納得いく品質のブドウのみ販売し、直売に適さない品質のものは市場へ出荷している。

ブドウは、すべて無核栽培を行っている。刈谷地区は露地栽培で盆前に「種なし巨峰」が収穫可能になるが、成熟期に夜温が下がらず着色不良になりやすい地区でもある。このため、着果量を厳しく制限するほか、環状はく皮等の着色向上対策も積極的に導入している。

誰もが味を知る品種を丁寧に作ることが信用となり、経営の柱になると考え、多種多様な品種をそろえるよりも、定番品種のクオリティを高めることに方向性を定めている。このため品種は 15 種類に厳選し、繁忙期に出来るだけ 3 色の大粒種が長期間出荷できるよう、表 1 のように構成している。現在人気の「シャインマスカット」は、長梢栽培と短梢栽培で栽培し出荷時期の拡大を図っている。

表 1 品種構成と面積

出荷期間	品種名 (色系)	面積
～ 8 月上旬	デラウエア (赤)	20a
	サニールージュ (赤)	10a
	紫玉、あずましずく (黒)	10a
お盆前～	種なし巨峰 (黒)	50a
	ゴルビー、クイーンニーナ (赤)	20a
	ハニーシードレス、 ハニービーナス (緑)	10a
8 月下旬～	黄玉、シャインマスカット (緑)	20a
	BKシードレス(黒) 他	10a
	合計	150a

主となる労働力は、経営主、妻の 2 名である。その他に臨時雇用 5 名で栽培管理・販売を行っている。盆後は週 1 日の定休日を設けることで、自身や妻の体調管理にも気を配っている。生産管理、収穫作業、接客対応、出荷作業など、重要な項目を出来るだけ簡素化し平準化を心掛け、少ない労働力での栽培が可能となっている。また、臨時雇用の女性パートが働きやすいよう、1 時間半に 1 回は休

憩を入れるなど、福利厚生にも配慮している。

永田農園のコンセプトは、『知る人ぞ知る農園』である。直売所は道路から 80 メートルほど入った畑の中央に位置し、案内看板はあるが集客用ののぼりは無い。HP や SNS での集客を行わない。固定客を主とした販売は、毎年同じ生産量で安定的に高品質なブドウを生産する、高度な栽培技術に裏打ちされた生産があってこそその販売方法といえる。

### (3) 経営的特色

#### ①永田農園のファンである固定客を優先した販売方針

永田農園の経営方針は「より良い商品を買やすい価格で」である。市場に勤務していた時には、荷揃いの良い商品を全国から集めていた。そのような経験から、丁寧な荷作りで商品は美しくないといけないという思いが強い。特に、誰もが食べたことのある「シャインマスカット」には、商品の美しさや品質に細心の注意を払っている。定番品種が顧客に満足されることが要であり、それなくして顧客のリピート率向上にはつながらないとの思いがある。

店頭に掲示している品種紹介のパネルでは、今年の出来具合を解説している。加えて、台風による傷があるとか、少雨の影響で、やや小粒など、マイナスな印象なことも、顧客にしっかり理解してもらい購入してもらっている。また、今年の作柄などを記載したチラシを作成し同封している。チラシは、収穫期間中に、4 回ほど記載内容をリニューアルし、永田氏の思いや品種ごとの最新の作柄状況をその都度顧客に伝えられるようにしている。

こうした努力の結果、顧客は全てが固定客であり、前年からのリピート率はほぼ 100%と全量契約販売のようになっている。販売は固定客を優先し、新規の客は断ることも多い。

顔なじみの固定客だからこそ、消費者としての本音を聞くことができ、それを経営方針に生かしている。特に女性の顧客からいろいろなヒントを頂く。「知る人ぞ知る農園で、他の人は買いにくいこと、それは私しか買えないということで、それはとても価値があることなの」「お客さんの欲しいブドウに合わせるんじゃなくて、ブドウのおいしい時期にお客さんを合わせれば」これらの顧客の言葉を、永田氏は深い言葉であると認識し、なるほどとうなずく。



図2 箱に同封されるチラシ



図3 直売所の品種紹介パネル

## ②徹底的な省力化・効率化を追求した販売方法

永田氏は「ムリ・ムラ・ムダ」を削減し省力化・効率化を図っている。まず、集客であるが、顧客は根強い支持のある固定客が大半であるため、直売オープンを知らせる DM や SNS による発信等の広告宣伝は実施しない。また、飛び込みのお客対応は時間がかかるため、のぼり等での宣伝もしていない。



図4 箱サイズの見本

販売規格にも工夫がある。購入時に選ぶ項目は、①内容（3色詰め合わせ品または巨峰単品）、②用途（自宅用またはお使い物）、③箱サイズ（2

kg、3 kg、4 kg）のみとなっている。詰め合わせ品の品種は「おまかせ」であるため、省力化できると同時に、収穫適期の食べ頃のブドウをその都度販売できることから、顧客側にも好評である。1房ごとのバラ売りは、箱売りに比べて煩雑になるため実施していない。

単価設定も効率を考え、品種ごとには分けず、時期ごとに一律の価格としている。品種ごとに単価設定すると販売管理が煩雑になるという理由もあるが、氏の理念「より良い商品を買やすい価格で」が一律価格の根底にある。徹底的な省力化・効率化により、雇用費が経費の10%以下と低く抑えていることから、高品質な果実がリーズナブルに購入できると評判も高い。

販売は予約注文が主である。基本前日までに予約を電話で受け、当日にその予約品を店頭で引き渡す方式である。予約状況は店内のホワイトボードで一元管理している。予約注文により当日の販売必要数量が把握できるため、必要量のみ収穫することが可能となり、ムダがなくなる。店頭での引き渡しでは、来客時間を10時から14時に割り振っている。この方式により、客側には店内が混まず順番待ちも生じないメリットが、農園側では接客対応に労力が集中しないようになり、多忙な収穫期間であってもゆったりと余裕を持って作業できるメリットを得ている。接客業務もムダがない、限りなく合理的な手法をとっている。

また、1日の収穫量が200 kgに満たない収穫初期と終期は産直や市場に出荷し、商品が潤沢にある時期に直売を集中的に行うようにしている。

## (4) 技術的特色

### ①生育期を生産ラインとしてとらえた作業効率化

永田氏は栽培管理でも、「ムリ・ムラ・ムダ」を削減し効率化・省力化を図っている。例えば、パートはブドウの花穂整形時から活用しているが、作業効率を最大とするためには、作業内容を平準化・簡素化する必要がある。ブドウでは、せん定時に結果母枝の長さを揃えることで、園全体で均一に新梢を伸長させ、開花時期を揃える。この結果、ジベレリン処理が揃い、果実の規格も揃う。すべての管理作業を一連の生産ラインとしてとらえ、効率化を進めている。販売方法も含めて効率化を図った結果、大面積にもかかわらず雇用費が経費全体の10%未満に抑えられている。

カキでは、摘蕾・摘果作業がブドウの作業と重なってしまいほぼ出来ないため、冬季の

せん定作業にて着果量をコントロールできるように工夫している。

このような努力により、少ない労働力で品質の良い果実生産が可能となっている。

## ②パートとの分業制による労働生産性の向上

永田氏のようなブドウの大規模経営では、パートの活用が不可欠である。永田氏は、上記の作業内容の平準化・簡素化のほかにも、永田氏とパートが同じ作業をしない「完全分業制」を取り入れ、労働生産性を高めている。例えば花穂整形では、「シャインマスカット」や「クイーンニーナ」などギフト用の品種は、永田氏が作業を行い高品質を維持し、家庭用が多い品種はパートに任せている。また、袋かけやジベレリン処理などは、永田氏とパートと作業時間が同程度となることから、作業はすべてパートに任せ、永田氏は他の管理を行うようにしている。

## ③品質管理の徹底

販売時には、パートは果房の調製や三角袋詰め作業等を行い、最も重要な収穫と最終的にブドウの房を化粧箱に詰める作業は、必ず永田氏本人が行っている。永田氏が一房一房をしっかりと目視でチェックし品質管理を徹底することで、販売後の果実品質に対するクレームは皆無である。



図5 果房調整と化粧箱詰めを分業化

## ④着色向上対策の導入

刈谷地区は、その温暖な気候から露地栽培で盆前に「種なし巨峰」が出荷できるが、7月の夜温が高く着色不良など障害も出やすい地区でもある。このため、着果量を厳しく制限することは当然のこと、棚面の明るさに留意し、着色向上技術も積極的に取り組んでいる。特に、赤系品種である「クイーンニーナ」は、食味が優れるため、「巨峰」や「シャインマスカット」に続く有望な品種になると確信し、着色向上対策として環状はく皮の実施、タイ



図6 環状はく皮の経過を説明する永田氏

バック傘や透明袋の導入など、生産面では妥協しない経営を行っている。この技術の高さから、刈谷市主催の果実品質改善共進会にて、令和3年、4年に「シャインマスカット」で最高位賞の刈谷市長賞を、令和5年に「クイーンニーナ」で特別賞を受賞している。

## ⑤2か月の販売期間を安定的に維持する品種選定

永田農園のブドウ販売は約2か月続く。永田氏は、収穫作業は現金化の作業であり、基本的には楽しい作業でなくてはならない、需給バランスが取れていれば円滑であるが崩れ

るとトラブルが発生すると考える。このため、2か月の収穫期間に販売量のピークを作らないよう、主力品種で生産量の多い「デラウェア」、「種なし巨峰」、「クイーンニーナ」、「シャインマスカット」で約1週間ずつ収穫ピークをずらすことで対応している。また、「シャインマスカット」では、長梢栽培のほかにトンネルハウスでの短梢栽培や屋根かけ栽培に取り組み、出荷時期の拡大を図っている。

導入品種は、自身の経営や農園の環境（土壌他）に適した品種だけを厳選し栽培している。品種数を厳選することで、品種独自の栽培技術を極め、より高品質生産かつ生産性を高めることを可能にしている。今後も自身の年齢を考慮すると、品種数を無闇に増やさず、優良品種のみに限定して栽培していくことで、高品質安定生産を維持する考えである。

#### ⑥せん定枝バイオ炭の取組とIPM（総合的病害虫・雑草管理）の実践

晩腐病などの病害虫対策として、せん定枝はすべて焼却している。焼却には、地域でいち早く「無煙炭化器」を導入した。生じた炭は、土壌改良や脱炭素を目的にほ場に施用している。このせん定枝バイオ炭の取組により、令和6年2月に西三河地域ではもっとも早く、国の「環境負荷低減事業活動実施計画」の認定である『みどり認定』を受けている。



図7 導入している無煙炭化器

病害虫防除は耕種的防除に重きを置き、ブドウの巻きつるなど病害虫の越冬伝染源となるものは徹底的に取り除いている。カキでは、バークストリッパーを用いて粗皮削りを実施している。

また、自身への身体的負担軽減を目的に、化学合成農薬の削減も図っている。特に非化学合成農薬である無機銅剤に注目し、展葉期の無機銅剤による防除を令和5年度に愛知県の新規登録農薬現地適合性試験として実証した。ブドウの病害は耐性菌リスクが高まっており防除が困難となっているが、無機銅剤は耐性菌リスクがほとんどないため利点も大きい。実証結果が良好であったが、葉面散布剤との相互作用について懸念があるため、令和7年から「巨峰」や「シャインマスカット」の一部園地で導入し様子を見る予定である。ほかにも、除草剤の使用削減のため乗用草刈り機による雑草管理や、病害虫対策としてトンネル栽培や屋根かけ栽培を導入している。

#### ⑦積極的な鳥害対策の導入

刈谷市鳥獣被害防止計画によると、令和2年度の鳥獣による農林水産業等に係る被害金額は1,360万円で、90%以上を鳥害が占める。永田農園でもカラスによる被害が多かったことから、自作した大規模なカラス捕獲檻を10数年前から設置し、猟友会と協力して毎年50羽ほど捕獲し駆除している。これにより、地域のカラス生息数が減少し、近隣生産者のカラス被害も減少した。捕獲檻の維持管理は大変であるが、継続的に行っており、地域果樹の安定生産に大きく貢献している。

また、新たに防鳥網を設置するのは維持管理の労力が必要であるうえ費用対効果が低いと考え、農研機構の技術を参考にステンレスワイヤーを設置した。さらに安価なテグスと組み合わせるなど創意工夫により被害防止に努めている。



### (5) 地域への波及効果

令和4年度に農業次世代人材投資資金に係る県の研修機関認定を受け、同年4月から1年間、地域のブドウ新規就農希望者を研修生として受け入れ指導した。就農後も技術指導としてサポートしている。他にも県農業大学の学生派遣実習や近隣地域のブドウ若手生産者視察の受入など、技術や知識を出し惜しみすることなく伝授し、若手の育成に尽力している。



図8 ブドウ新規就農希望者への指導

刈谷市果樹組合では、平成28年から30年には組合長を務め組合運営を統括したほか、ブドウ部会長やカキ部会長を務めた際には、自身の園にて新技術の展示試験を部会講習会として自ら企画した。他生産者へ情報提供を通じて産地全体がレベルアップすることをいつも心がけている。

また、永田氏の思いは農業だけにとどまらない。知人の子供で、引きこもりとなっている人の社会復帰のため、ブドウの作業で雇用し支援を継続している。ブドウ栽培では周年の雇用ができないため、地域の他品目経営の農業者やJA等との連携によって、この支援が充実したものになるよう思案中である。永田氏は、「農福連携」という枠にとらわれない、相手の立場に重きを置いた福祉の視点でこの支援を行っている。

### (6) 今後の経営展開

永田氏は、「地域の住民の方々に、永田農園の商品としてのブドウを評価してもらえること、さらには自分自身も人間的に愛されることが最優先」という。50代半ばになった現在は、無理せずに、継続可能な生産方式の確立に向けて、より省力的・効率的な栽培管理や経営に取り組んでいく。

近年の気候変動による夏季の高温は、日焼け果が発生するなど品質低下の大きなリスクである。これらに対応するため、これまで以上に情報収集を行い、気候に合った栽培方法や技術、資材の導入を図っていく。

令和6年には「シャインマスカット」で屋根かけ栽培を導入した。費用は導入面積8aでの売り上げの約4倍と高額であったが、傘かけ作業がなくなり、農薬散布回数が減少し、雨天時にも雨具なしで作業でき、防風効果によりスレ果が低減するなど、省力化、効率化、品質向上のメリットを踏まえて導入している。このように、経営面では長期的な視点を持ち、単年の売り上げではなく生涯年収という観点で将来的に利益が最大になるよう、技術の導入判断を心がけている。

この地域の果樹経営体は、全品目合わせても24名と少数精鋭である。後継者の確保育成は全品目共通の課題で、永田氏本人も後継者は未定である。第三者継承も視野に入れており、70歳頃を目処に経営委譲を考えている。そのためにも、自園地の修繕を続けていくなど園地の生産性を高い状態で維持すること、地域の仲間と情報共有を図っていくことが必要だと考えている。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹複合経営 ブドウ、カキ、クリ
----------	------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	230a
水田	0a
普通畑	0a
果樹園	230a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積 (うち成園)
① ブドウ	136a (136a)
② ブドウ (簡易被覆)	14a (14a)
③ カキ	50a (50a)
④ クリ	30a (0a) 改植中

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
トラクター	1		2019	
スピードスプレヤー	2	500リットル×2台	2016、2008	
乗用草刈り機	2		2019、2022	
チップパー	1		2023	
軽トラック	1		2017	
運搬車	2		2022、2023	
ユンボ	1		2023	

#### (2) 主要施設

摘要	構造	規模 (面積・延長等)	建築年	備考
ブドウ棚		15,000 m <sup>2</sup>	1960～2023	
ブドウ簡易被覆ハウス	パイプ	1,400 m <sup>2</sup>	2021、2017	
選果場	鉄筋	170 m <sup>2</sup>	1998	
農業倉庫	鉄筋	40 m <sup>2</sup>	2013	
トイレ	コンクリート		1998	
ブドウ雨よけハウス	パイプ	800 m <sup>2</sup>	2023	

### 3. 農業労働力の状況

#### (1) 農業従事日数

家	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (ブドウ)	品目② (カキ)	品目③ ( )	
族	本人	54	300	280	220	60		一般作業
	妻	50	120	120	80	40		一般作業
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日数				
			0日					
	臨時雇用			延べ雇用日数 5人・25日 (人・日)			一般作業 販売期作 業	

#### (2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
ブドウ	230時間 (185時間)
カキ	156時間 (106時間)

### 4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a 当たり
	a	a	a	kg	Kg	Kg	Kg	Kg
巨峰	50	50	50	6,000	6,000	6,000	6,000	1,200
紫玉	10	10	10	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200
サニールージュ	10	10	10	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
シャインマスカット	15	15	20	2,250	2,250	3,000	2,500	1,250
BK シードレス	5	8	10	750	1,200	1,500	1,150	1,150
デラウェア	30	20	10	3,000	1,500	1,500	2,000	1,500
ゴールデン・クイーン	10	12	15	1,200	1,440	1,800	1,480	1,200
ハニーシードレス	5	5	5	800	800	800	800	1,600
黄玉	15	10	10	1,800	1,500	1,500	1,600	1,500
その他	0	10	10	0	1,200	1,200	800	1,200

5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
ブドウ	%	% 6	%	% 10	% 84	%	%
カキ		12		40	48		

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
1989年	カキ→ブドウ	30 a	カキ栽培面積を減らし、ブドウを拡大	

(2) 現在の園地の状況

園地は自宅を中心にすべてまとまっており、効率的な園地管理となっている。
丘陵地であるため水はけが良く、ブドウに適した土壌条件のため、糖度の高い果実生産が可能となっている。

7. 10a 当たり総労働時間

	品 目 ① (ブドウ)	品 目 ② (カキ)	品 目 ③ ( )
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整 枝 ・ 剪 定	36 ( 4 )	40 ( 0 )	( )
施 肥	2 ( 0 )	2 ( 0 )	( )
中 耕 ・ 除 草	2 ( 0 )	2 ( 0 )	( )
薬 剤 散 布	5 ( 0 )	3 ( 0 )	( )
薬剤以外の防除	1 ( 0 )	2 ( 0 )	( )
授 粉 ・ 摘 果	93 (25 )	5 ( 0 )	( )
袋 か け	8 ( 7 )	0 ( 0 )	( )
菰かけ・防風・防霜管理	0 ( 0 )	0 ( 0 )	( )
かんがい・その他管理	2 ( 0 )	0 ( 0 )	( )
収 穫 ・ 調 製	34 (27 )	50 ( 0 )	( )
生 産 管 理 労 働	3 ( 2 )	2 ( 0 )	( )
生産関係労働時間 計	185 (66 )	106 ( 0 )	( )
選別・包装・荷造り	20 ( 0 )	20 ( 0 )	( )
搬出・出荷	5 ( 0 )	10 ( 0 )	( )
販売	20 ( 0 )	20 ( 0 )	( )
小 計	45 ( 0 )	50 ( 0 )	( )
合 計	230 (66 )	156 ( 0 )	( )

8 写真



「知る人ぞ知る農園」の直売所



「シャインマスカット」のトンネル栽培



「シャインマスカット」の屋根かけ栽培



「クイーンニーナ」の着色向上対策（環状はく皮、透明袋）を説明する永田氏



講習会にて、カイガラムシ類対策技術の展示試験を実施（左：講習会、右：実演）



# 山田 均

住所及び氏名

住所 鳥取県 湯梨浜町  
氏名 やまだ ひとし 山田 均 (67歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

山田均氏の経営は、ナシを中心にウメ、カキの果樹専業経営である。主要品目であるナシの品種構成は基幹品種である‘二十世紀’を中心に収穫時期が重ならないように晩生ナシの‘王秋’や‘愛宕’をいち早く導入している。労働力は本人と妻の2人だが、ほぼ山田氏1人で125aの果樹栽培を行っている（妻は30年勤めた医療事務を定年退職したあと孫の子守をしながら、人工受粉や袋かけ作業を手伝ってくれる）。

山田氏が求める経営は「作業の省力化」である。「少しでも効率的にナシづくりをする」、そして「ナシづくりが好き」これがモットーである。傾斜地のナシ園に園内道を整備し、スピードスプレーヤによる薬剤散布を実現したり、令和3年には水田を造成し‘新甘泉’のジョイント仕立てに取り組むなど省力化を追求している。果樹栽培において年間数回の除草作業は手作業の刈り払い機から乗用モアへと移り、今ではロボット草刈り機の時代へと進化した。山田氏もジョイント仕立てに取り組む際にロボット草刈り機を導入しており、‘二十世紀’のほ場でも使用している。省力は機械化だけでなく栽培方法にも取り入れている。‘二十世紀’の短果枝せん定や‘新甘泉’のジョイント仕立て栽培である。

また、収益性の低い品種を高い品種に更新し、単位面積あたりの粗収益を上げることで経営を発展させてきた。更に多品種化することで管理作業も分散され、気象災害にも強く、高い所得率を実現している。山田氏の目標は一人で粗収益を1,500万円上げることである。

加えて山田氏は自らの経営だけにとどまらず、JA鳥取中央東郷果実部の指導会長として約20名の指導員の先頭に立ち、東郷ブランド梨にふさわしい品質の果実を維持すべく栽培技術の方針決めなどの重責を担っている。また、公設消防団に40年以上属し、農業以外でも地域に貢献している。

技術向上に対する研究熱心な姿勢も優れた点である。①‘二十世紀’の短果枝を長く維持させるせん定方法（通称：かずら枝せん定）の技術確立②積極的に新品種を導入し生育特性に合わせた栽培方法を確立し、産地へ技術を普及されている点③データを重視し、蓄積された数値や写真を基に栽培資料を作成し、映像を駆使し目に見えるような形で指導会を行っている。また、若手指導員の育成にも力を入れている。

## 2. 対象経営を取り巻く環境

### (1) 立地条件

湯梨浜町は日本海に面した鳥取県のほぼ中央に位置し、町の中央には周囲12kmほどの東郷池がある。池の中央付近の湖底からは豊富に温泉が湧いている全国でも珍しい池である。年平均気温は14.8℃、降水量は1,760mm、日照時間は1,686時間（隣接する倉吉市における平年値）であり、気温が低い、日照時間が少ない、降水量が多い日本海側特有の気候である。しかし、これらは冬の寒さや降雪によるところが大きく、春先から秋の収穫時期までは温暖で果樹の生育・生産には恵まれた気象条件にある。



山田氏が居住する東郷地区は町の南部に位置している。この地区は山間部が多く平地は専ら水田が、花崗岩の山地は切り開かれて傾斜地を中心にナシ畑が広がっている。古くからこの傾斜地の果樹園において特産の‘二十世紀’が生産され、日本一の‘二十世紀’の産地として名をはせてきた。

町北部には東西に高規格幹線道路「山陰道」が通っており交通の便はよく、西側は県中部の中心都市である倉吉市に隣接している。一方で町名の由来ともなっている羽合(はわい)、東郷(とうごう)の2つの温泉地(湯)、日本一の生産量を誇る‘二十世紀’(梨)、日本海に広がる砂丘地(浜)など、自然からの恵み豊かな土地柄でもある。

### (2) 地域の果樹農業事情

山田氏の所属するJA鳥取中央東郷果実部は、生産者数220戸で約100ha（令和5年現在）を栽培する県内最大のナシ生産地である。今年、鳥取県に‘二十世紀’が千葉県松戸市から導入されて120年を迎えた。湯梨浜町の‘二十世紀’も導入されて118年になる。今なお現役で味の深いナシを生産している。

この地区に選果場が整備されたのは昭和49年であり、当時「東洋一のマンモス選果場」と称された。平成10年には当時の東郷町、羽合町、泊村(とまりそん)（以上、合併して湯梨浜町）および北条町（合併により北栄町）の地域連携による広域利用施設として再整備され、当時としては先駆的であった光センサー糖度測定装置による品質の均一化、自動箱詰めロボットによる省力化などの体制が整えられた。

その後平成16年に東郷、泊(とまり)、羽合、北条の4選果場が正式に合併し、東郷果実部が設立された。これによりこの地域で生産される‘二十世紀’が統一選果されるとともに、指導体制も東郷梨ブランドに沿って一本化された。さらに平成25年には糖度だけでなく‘二十世紀’の品質において重要な要素である「酸度」の計測のほか内部品質（水ナシ、褐変）の判断が可能な光センサーが導入され、さらなる品質の均一化が可能になった。



‘二十世紀’といえは「東郷」というほどのブランド産地であり、消費者からは進物品の需要も多い。そのため通常の進物対応に加えて、品質を厳選した果実のみによる高級ギフト商品「鶴の舞」や、樹齢70年以上の古木から収穫した果実のみによるギフト商品「慶寿梨」といった、高級商品の開発にも力を入れている。鳥取県のオリジナル品種の「新甘泉」の栽培にも力を入れており、年々、出荷量が増加しており、新たな商品として脚光を浴びている。

また、栽培技術の向上を目的とした湯梨浜町果樹研究協議会が設立され59年が経過している。この協議会は、舎人（とねり）果樹研究同志会、花見果樹研究会、東郷果樹研究同志会の3支部からなり、それぞれの支部で試験研究が行われ、それぞれの代表者による研究発表会や視察研修、品評会が開催されるなど、会員相互の切磋琢磨の場となるとともに親睦を深める場でもある。

ナシは湯梨浜町の主要産業であるとともに文化であり、町のシンボル・誇りでもある。町では‘二十世紀’を今後も発展させていくため、平成16年に「湯梨浜町二十世紀梨を大切にする条例」を制定し、毎年7月4日（梨の日）には‘二十世紀’に感謝する行事を行っている。



### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

山田氏は平成19年3月末に、母の病気をきっかけに勤めていた農協を退職し、両親が行っていたナシ栽培を引き継ぐことになった。それまでも土日の休みの時には作業を手伝っていたが、本格的に栽培に従事することになった。

当時の経営規模は、ナシが90 a、ウメが15 a、カキが10 a、水田が19 aであり、果樹園のほとんどは緩傾斜地から傾斜地であった。ナシの品種構成は、主要品種の‘二十世紀’が50 a、鳥取県オリジナル品種‘新甘泉’と‘愛宕’がそれぞれ12 aずつ、‘秋栄’が10 a、‘あきづき’と‘王秋’がそれぞれ3 aであった（第1表）。

湯梨浜町におけるナシ生産は傾斜地が主体であり、生産者の身体的負担は大きく、十分な生産管理作業ができない場合も多かった。こうした状況を見て、農協に勤めていたころから「防除はスピードスプレーヤでやりたい」と考え、傾斜地の果樹園に園内道（テラス状に整備）をつくり、ナシ

第1表 就農時と現在の面積

品 種		面積 (a)	
		就農時	現在
ナシ	二十世紀	50	45
	新甘泉	12	35
	秋栄	10	
	あきづき	3	5
	甘太		6
	王秋	3	6
	愛宕	12	8
ウメ	野花豊後	15	10
カキ	富有	5	5
	西条	5	
	輝太郎		5

棚の持ち上げを行いスピードスプレーヤが進入できる環境を整えた。

神奈川県で開発された「ジョイント仕立て」栽培にも5aで試験的に取り組み、「これならいける」と確信を持ち、令和3年には水田を造成し15aの‘新甘泉’のジョイント仕立てを始めた。更に除草の省力を図るためロボット草刈り機を導入した。

就農時の品種構成は‘二十世紀’の占める割合が半分以上あったが、現在では、40%まで減らしている。‘あきづき’、‘甘太’、‘王秋’、‘愛宕’など‘二十世紀’の後に収穫できる品種の割合を増やし、作業分散や気象災害等による危険分散により経営の安定化を図っている。

## (2) 経営の状況

現在はナシを105a、ウメとカキをそれぞれ10a栽培している。家族内労働力は基本的に本人1人であり、ナシの人工受粉や袋かけ時には妻の手助けや臨時雇用を134人・日程度入れている。

ナシ園の半分弱が‘二十世紀’であり、その生産量の約30%を個人販売、残りは農協（選果場）に出荷している。個人販売は、古くからの顧客や口コミにより販売先を確保している。選果場への出荷では、東郷ブランドを背景とした強力な販売力が最大限活用できている。

ウメは生産量の9割を、カキは生産量の5割を農協へ出荷している。

## (3) 経営的特色

湯梨浜町特産の‘二十世紀’を中心とし、作業時期や気象災害リスクの分散のため晩生の‘王秋’、‘愛宕’を導入している。人工受粉や袋掛け、収穫作業以外はほぼ一人で栽培管理できるように品種構成と面積を考えている。また、果樹園の整備を行い可能な限り機械化を進め、作業の省力化を図っている。

### ① 収穫期の異なる品種を導入し、自家労力を最大限活用

‘二十世紀’から収穫が始まり、晩生の「愛宕」まで、高品質で有利販売できる品種を配置し、収穫をはじめとする管理作業の分散を図っている（第2表）。

第2表 ナシ栽培品種の収穫時期

	8月		9月			10月			11月			12月
	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
二十世紀												
新甘泉												
あきづき												
甘太												
王秋												
愛宕												

‘二十世紀’は、小袋と大袋の2回の袋かけが必要で、小袋かけが遅くなると果実品質が著しく低下する。この時期は、どの品種も摘果の時期で、作業が集中する。そのため、摘果、小袋かけには雇用を入れ、できるだけ早く袋かけを終

えることを心がけている。一方で大袋1回かけで栽培できる赤ナシを積極的に導入している。また、令和3年には「‘新甘泉’+ジョイント+網掛け」を導入し、更なる省力に努めている。

#### ② 高単価が期待できる新品種の導入

東郷梨選果場では、そのブランド力により‘二十世紀’を有利販売しているが、‘新甘泉’についても、すべての果実をセンサーで糖度を測り、基準糖度以上の果実が出荷され、高単価で取引されている。また、農研機構が育成した‘甘太’は日本どこでも栽培できるため、知名度が上がるのも早いと見込んでおり、他の生産者に先駆けてこれらの新品種を導入し、収益性の高いナシ栽培を実践している。

#### ③ パソコン簿記の取組

母が65歳の時にパソコン簿記を勉強し始めた。山田氏は農協を辞める1年ほど前から簿記の勉強を始め、最初は仕組みも分からなかったが、ソリマチ簿記を使いながら一つずつ理解を深め、記帳、申告。経営分析・改善を行っている。現在では、青色申告友の会の役員として携わりながら毎年、結果を夫婦で確認し、話し合いながら収益性が高く、労力分散が可能な品種への更新など経営方針を決めてきた。

### (4) 技術的特色

#### ① 機械利用を考えた果樹園整備

果樹園は、緩傾斜地から傾斜地のため機械化が困難であった。‘二十世紀’は黒斑病との戦いであり防除の徹底が必要であるが、手散布での防除は重労働であった。そこで機械化を可能にするため果樹内に園内道を整備し、自作した機械で果樹棚を簡単に持ち上げ、スピードスプレーヤで防除ができ、収穫果実は運搬車で安全に運ぶことができるようになった。

#### ② 積極的な新品種への更新と省力化

基幹品種である‘二十世紀’は、黒斑病に弱く果実が落果する被害により、生産が不安定になることがある。そのため防除の徹底が必要であったが、その黒斑病に耐病性の‘ゴールド二十世紀’と黒斑病耐病性と自家結実性を併せ持つ‘おさゴールド’が品種登録となった。山田氏は、これらの品種へ積極的に更新し、黒斑病による減収を皆無とした。また、‘二十世紀’主体の経営であるが「二十世紀」は2回の袋掛けが必要である。そのため、赤ナシの‘新甘泉’や農研機構育成の‘甘太’や‘王秋’が大袋かけ1回で栽培ができることから、袋かけ労力の軽減のために積極的に導入している。

#### ③ せん定・夏枝管理による作業の省力化と高品質果実生産

‘二十世紀’は短果枝せん定（通称：かずら枝せん定）によるせん定作業の省力化を図っている。傾斜地ではオールバック整枝で、緩傾斜地では3本主枝整枝で肋骨状に配置した枝の短果枝に着果させ、枝の配置が直線的で整然としているので、交配、袋かけ等の作業が行いやすい。また、短果枝も長く維持でき、結果枝の更新が少なく、誘引やせん定作業が省力化されている。‘新甘泉’は夏枝誘

引により翌年の花芽確保に努め、安定収量の確保を実践している。

果樹園には稲ワラを持ち込み株元にマルチすることで、夏期の乾燥を抑えている。また、計画的にバックホーで穴を掘り、マルチに使った敷き草を投入し、積極的に土づくりを行っている。

## (5) 地域への波及効果

### ① 生産部指導会長として栽培技術の普及

山田氏は東郷果実部の生産指導方針をリードする指導会において、生産者のトップである会長の任にある。県内最大の部会員数220名の果実部にあつて、しかも消費者からの期待も大きい「東郷ブランド梨」の果実品質を維持していくにあたり、非常に大きな責任を負っている。指導会は約20名の指導員によって構成されているが、さらにそのなかから山田氏を含む中心的な指導員6名を評議員とし、指導方針の方向性は評議員会において決定している。また整枝・せん定などの指導会において指導員に対する指導も行っているほか、防除暦、施肥設計の作成においても中心的な役割を担っている。

データを重要視し、ウメや桜の開花を基に‘二十世紀’の交配日を予測したり、40年間鳥取県の‘二十世紀’の作況調査園として貢献されてきた。毎年、果実肥大を見ながら「今年は大きくなる」、「今年は肥大があまり良くないので着果管理に注意」など蓄積された数値や写真を基にプロジェクターとパソコンを駆使し、だれでも分かりやすくをモットーに映像を使った指導会を心掛けている。また、指導会中は、若手指導員に積極的に発言を促す姿勢もみられ、指導員の育成にも力を入れている。

### ② 作業の省力化、便利グッズの普及

山田氏は農協時代より、地域のため作業の省力化、軽労化に注力していた。良いと思ったもの、アイデアについては、まず自分が試し、効果を実感してから地域の生産者へ普及を行っている。いくつか紹介すると、ジベレリンを歯ブラシで塗布しているのを見て、最初から一緒に付けてみてはとメーカーとアタッチメントの共同開発、ミニトマトで使われていた選果機を展示会で見て、ウメにも使えないか検討した結果、選果機の導入に結び付けた。電動ばさみも自分が使って良かったので、今では多くの生産者が使うようになっている。普及したのものの中には、今ではなくてはならないものもあり、地域農業の発展に寄与している。現在も次の省力化につながるものを試している。



## (6) 今後の経営展開

### ① 労力1人でどこまでできるか

農協勤めの時に色々助けてもらったり勉強をさせてもらったことへの恩返しを今までやってきた。今後は役職を後継に譲り、ナシづくりに集中し、一人でどこまでできるのか、どこまで儲けられるか、限界に挑戦したい。

② 労力の分散化

収穫時期の異なる多品種を栽培することにより摘果や収穫作業の集中を分散化する。‘二十世紀’と‘新甘泉’の収穫時期が重なり収穫作業が大変なので‘新甘泉’の面積を減らし、‘甘太’に更新していく。また、作業動線が直線的になる「ジョイント仕立て」を取り入れることで整枝・せん定、交配などの作業効率の向上を図る。

③ ‘二十世紀’の袋かけ1回栽培へ

現在2回の袋かけを行っている‘二十世紀’を1回の袋かけで外観は2回かけ同様にきれいな肌を実現するための試験を行っている。

④ 地域のモデル的な存在へ

今後も新しい品種やジョイント仕立てなどの技術を地域に先駆けて取り組み、地域のモデル的な存在となり、産地の発展に貢献したいと考えている。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹専業、ナシ・ウメ・カキ複合
----------	-----------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	1 2 5 a
水田	a
普通畑	a
果樹園	1 2 5 a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積 (うち成園)
①ナシ	1 0 5 a ( 9 0 a )
②ウメ	1 0 a ( 1 0 a )
③カキ	1 0 a ( 5 a )
④	a ( a )
⑤	a ( a )

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種 類	台数	仕 様	導入年	備考
運搬車	3	三輪車1台 キャタピラー2台	S60/H23	
バックホー	1	コマツマイクロバックホー	H24	
軽トラック	1	550cc	H27	
スピードスプレーヤ	1	500ℓ	H27	
乗用モア	2	草刈まさお フルティーマさお	H27/R 6	
軽ワゴン車	1	550cc	H29	
花粉用採葯機	1	ミツワ	H30	
肥料散布機コンポキャスター	1	キャニコム	R 1	
ロボット草刈り機	1	和同クロノス	R 4	
選別機	1	エトバス 重量選果機	R 6	

#### (2) 主要施設

摘 要	構 造	規模 (面積・延長等)	建築年	備考
作業場	木造?	65 m <sup>2</sup>	H 7	
ナシ棚	ジョイント	5 a	H30	
ナシ棚	ジョイント	15 a	R 3	

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる 分担作業
					品目① (ナシ)	品目② (ウメ)	品目③ (カキ)	
本人	妻	67	260日	260日	200日	40日	20日	作業全般 交配・袋かけ
		65	80日	80日	65日	10日	5日	
雇用	常 雇	性別	年齢	年間雇用日数				
臨時雇用		3人	延べ雇用日数			134 (人・日)		

(2) 10a当たり総労働時間

品目・品種	10a当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
二十世紀	418時間 (397時間)
新甘泉	310時間 (298時間)
あたご	282時間 (270時間)

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量					
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均		
							収穫量	10a当たり	
ナシ	a	a	a	kg	kg	kg	kg	kg	
二十世紀	50	45	45	14,485	15,043	15,475	15,001	3,251	
新甘泉	30	30	35	9,277	10,078	10,162	9,839	3,166	
あたご	8	8	8	3,567	2,858	2,814	3,080	3,647	

5. 販売方法別の割合

品目・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
ナシ	%	%	%	%	%	%	%
二十世紀	70				30		
新甘泉	90				10		
その他	100						
ウメ	90				10		
カキ	50				50		

## 6. 園地の状況

### (1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
昭和58年	二十世紀	20 a	若木に改植	
平成元年	あたご	12 a	造成地に新植	一部新甘泉高接ぎ
平成13年	秋栄	10 a	水田転換により新植	現在は甘太ほか
平成17年	おさゴールド	10 a	既存の果樹園を改植	
平成30年	新甘泉	5 a	カキ園を改植し、ジョイント栽培	
令和3年	新甘泉	15 a	水田転換によりジョイント栽培	

### (2) 現在の園地の状況

園地はすべて自宅から車で10分程度のところに集約されており、選果場にも近く、効率的な作業ができる環境が整っている。乗用モアやスピードスプレーヤによる防除が可能である。二十世紀のは場は緩傾斜であるが、テラスを切って園内道を整備し、スピードスプレーヤでの防除が可能である。
すべてののは場で運搬車を使って運び出すことができる。また、園地までは舗装されたの道があり、車付きは良好である。
生産性が悪くなってきた既存の品種を有望な品種へ積極的に更新し、常に若木が3割程度ある年齢構成を心掛け、収益性が減らないようにしている。

## 7. 10 a 当たり総労働時間

	品目① (二十世紀)	品目② (新甘泉)	品目③ (王秋)
	時間(うち雇用)	時間(うち雇用)	時間(うち雇用)
整枝・剪定	48( )	58( )	58( )
施肥	25( )	25( )	25( )
中耕・除草	18( )	18( )	18( )
薬剤散布	20( )	20( )	20( )
薬剤以外の防除	( )	( )	( )
授粉・摘果	102(20)	64( )	64( )
袋かけ	108(56)	65( )	45( )
菰かけ・防風・防霜管理	( )	( )	( )
かんがい・その他管理	( )	( )	( )
収穫・調製	68(27)	40( )	32( )
生産管理労働	8( )	8( )	8( )
生産関係労働時間計	397(103)	298( )	270( )
選別・包装・荷造り	15(5)	8( )	8( )
搬出・出荷	4( )	4( )	4( )
販売	2( )	( )	( )
小計	21(5)	12( )	12( )
合計	418(108)	310( )	282( )



8. 写真



写真1 山田氏園の‘二十世紀’園（東郷池を望む）



写真2 ‘新甘泉’のジョイント仕立て



写真3 映像を駆使した指導会



写真4 マルチ用の稲ワラ

# 笛吹農業協同組合八代支所八代統合桃部会

住所及び氏名

住所 山梨県 笛吹市

氏名 ふえふき 笛吹農業協同組合八代支所八代統合桃部会 やつしろししょやつしろとうごうもも

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

笛吹農業協同組合（以下「JAふえふき」）八代支所八代統合桃部会（以下、「八代統合桃部会」）は、主力品種である「日川白鳳」、「白鳳」、「なつっこ」等に、県オリジナル品種である「夢みずき」や「夢桃香」を積極的に導入し県外のお産地との差別化を図るとともに、「あかつき」の中でも品質の優れた大玉が収穫できる樹を選抜した地域ブランド品種「あさやけ」（商標登録）として生産出荷することにより、県内の他産地とも差別化を図っている。

また、県内でもいち早く透過式光センサー選果機を導入し糖度保証の付加価値を高めるとともに、更なる高品質なモモを市場へ出荷するため、高糖度で品質が高い特秀桃を「いっとうしょう一桃匠」、超特選のモモは「いっとうしょう一桃匠 やつしろ八代の夢」として出荷されている。果物専門店では高級品として販売され、贈答用需要としても人気があり評価が高く、台湾などの東南アジアに向けて輸出も行われている。

八代統合桃部会の販売単価は県内でもトップクラスであり、高単価を実現することで、山梨県全体のモモ販売単価を牽引する役目も担っている。

高品質果実を生産するため八代統合桃部会員全体では、栽培技術講習会できめ細やかな栽培指導による技術向上や、県の防除暦に準じた病虫害防除を徹底し、安定的に出荷できる体制を構築している。

地域を挙げての技術対策では、令和元年に前年秋の大型台風や春先の強風に伴う降雨や降雹の影響により、県内全域の主力産地でモモせん孔細菌病が多発し大きな被害を受けたが、八代統合桃部会では、関係機関と連携して将来を見越した優良品種への改植と様々な防除対策を実施したことにより、難防除病害であるせん孔細菌病を県内で最も早く克服した実績がある。

### 2. 集団組織を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

- ・自然的立地条件

笛吹市八代町は、甲府盆地の南東に位置し、御坂山塊から北西に注ぐ笛吹川の支流である浅川あさかわによって形成された扇状地が広がる地域である。町の面積の約半分は山地で、標高は約250mから600mと標高差があり、耕地は南東から北西に向かって緩やかに傾斜していて水はけが良い果樹園が広がっている地域である。

年平均気温が15.1℃、年平均降水量が1,161mm、年平均日照時間2,22

6時間（气象台観測地点：甲府气象台）と温暖で降水量が少ない内陸性気候に加え、昼夜の気温差が大きく日照時間も長いことから落葉果樹の栽培に適している。

土壌は埴壤土、砂質埴壤土が分布する台地褐色森林土で、水はけが良く、春先の地温が上昇しやすいことも落葉果樹に好適な立地となっている。

また、昭和46年の国営笛吹川農業水利事業による幹線水路48km、副幹線水路49km、調整池20カ所、揚水機場10カ所等の畑地かんがいに必要な用水を確保と、県営かんがい排水事業、県営畑地総合整備事業によるスプリンクラーなどの散水施設等の設置により、笛吹市を含む5市1町（山梨市、笛吹市、甲州市、甲府市、中央市、市川三郷町）の地域に、乾燥時でも適切な時期に十分な水分供給ができる体制が整備されている。

#### ・経済的立地条件

交通面では、中央自動車道の八代スマートインターチェンジが近くにありアクセスがよく、都心までの距離は約100kmと比較的近く、1時間30分程度で、新鮮な果実をいち早く京浜方面に届けることができる。また、中京方面までの距離も約300kmで、東西の大消費地への流通に、利便性の良い地域である。



#### (2) 地域の果樹農業事情

八代町を含む笛吹市と隣接する山梨市、甲州市の3市で構成される峡東地域は、平成29年3月に「盆地に適した山梨の複合的果樹システム」として「日本農業遺産」に、さらに、令和4年7月には、「峡東地域の扇状地に適した果樹農業システム」として「世界農業遺産」に認定され、果樹農業の発展により多様な歴史・文化の伝承とともに特色ある産地を形成している。

笛吹市八代町の農業は、昭和前半までは養蚕と水稻が中心であったが、昭和35年頃

から高度経済成長にともない土地生産性の高いモモ、ブドウ栽培への転換が急速に進み、現在の果樹産地へと発展を遂げている。2020年農林業センサスによると、笛吹市の経営耕地面積2,366haのうち、93.4%（2,211ha）は樹園地であり、販売農家3,179戸のうち、96.8%となる3,077戸が果樹経営を営む産地である。

笛吹市八代町のモモ栽培は、昭和30年代前半から本格化し、品質が高かったこともあり市場からの信頼を得るなかで、平成19年には、最新式の透過式光センサー選果機を導入し、高品質なモモを安定的に出荷できる体制となっている。

### 3. 対象集団組織の概況

#### (1) 集団組織の履歴

J Aふえふきは中央ブロック、西部ブロック、御坂ブロック、一宮ブロック、石和ブロックの5ブロックに分かれ、八代統合桃部会が所属する八代支所は中央ブロックに所属している。八代支所は、八代統合桃部会、ハウス桃部会、李部会、ブドウ部会の4つの部会から構成されている。平成30年には、厳しい産地間競争に勝ち残るため、八代支所に隣接する御所支所と合併し、新しい八代統合桃部会が発足し、生産から販売までの部会活動を行っている。

#### (2) 集団組織活動の状況

八代統合桃部会では、各地区から役員を選出し組織運営を行っている。主な事業としては、八代統合共選所の運営が中心となっている。また、栽培技術講習会の開催や県の新品種である「夢桃香」などの検討、品種ごとの収穫熟度の目合わせ、優良園の視察などを実施している。

また、「やまなしGAP」に基づいた労働安全や経営改善に取り組むとともに、最近では、環境意識の高まりから「4パーミル・イニシアチブ」の取り組みも始めた。

共同出荷作業は、交代で出労し行ってきたが、生産者の負担軽減のため、現在は全ての出荷作業においてアルバイトなどの雇用者が担っており、部会員の負担軽減となっている。雇用者への技術的な指導については、役員が実施している。

部会員への栽培技術講習会は、八代支所営農指導課、峡東農務事務所と連携し開催している。技術指導により部会員全体の栽培技術が高度平準化され、高品質果実の安定生産に繋がっている。また、病虫害防除に関しては、防除適期に薬剤防除が実施できるよう時期ごとに部会員への一斉メールによる防除を実施している。

#### (3) 経営的特色

##### ① 食味重視の品質管理

八代統合桃部会では、出荷前に品種ごとに出荷目合わせ会を開催し、着色や果形などの出荷基準の説明とともに、今年の気象状況に応じた注意点などを説明するなど高

品質果実の生産・出荷に取り組んでいる。

糖度基準は県内でもいち早く導入した透過式光センサー選果機を活用し、食味重視の厳選したモモを出荷している。糖度12度以上（白鳳以降は13度以上）の特秀桃を「一桃匠」のブランドで、糖度13.5度以上（晩生種は14度以上）の超特選のモモは「一桃匠 八代の夢」（3kg化粧箱、7～9玉）として出荷している。

## ②優良品種の積極的な導入と切れ目のない出荷体制

八代統合桃部会では、部会役員からなる品種検討班を設置し、優良品種の選定と推奨を行っている。山梨県果樹試験場が育成した「夢みずき」や「夢桃香<sup>ゆめとうか</sup>」をいち早く導入し、主力品種の「日川白鳳」、「白鳳」、ブランドの「あさやけ」、「なつっこ」等を中心に、極早生品種の「はなよめ」から晩生品種「川中島白桃」まで、切れ目のない出荷体制を構築している。

## ③地域ブランド品種「あさやけ」による県内産地との差別化

八代統合桃部会内で栽培されている「あかつき」の中でも、品質の優れた大玉が収穫できる樹を選抜し、八代統合桃部会の独自のモモとした地域ブランド品種「あさやけ」（商標登録番号：第5937483号、平成29年3月31日）にて、県内の強豪産地に対しても差別化を図っている。

「あさやけ」は、通常の「あかつき」よりも大玉で着色が良いため他産地との差別化を図ることができ、高単価で取引され有利販売に繋がっている。収穫時期は「浅間白桃」よりも遅い時期であるため、その後の主力品種である「なつっこ」に繋がる品種として位置づけられており、「白鳳」、「浅間白桃」、「あさやけ」、「なつっこ」と高品質なモモを切れ目なく出荷することにより、市場から高い評価を受けている。

## ④合併を活かした有利販売の実現

平成30年に八代支所に隣接する御所支所との合併により、出荷量が大幅に増加したことから、市場で有利に商談を進めることが可能となり販売上大きなメリットとなった。御所支所の部会員にとっては、合併したことにより透過式光センサー選果機による選果となり、糖度保証がされたことから販売単価は上昇した。

## ⑤海外輸出への取り組み

八代統合桃部会では、大玉で糖度が高い特秀桃の「一桃匠」を台湾に向けて輸出している。「一桃匠」は、台湾においても高級モモとして高単価で取引されている。

また、台湾の他、市場経由で仲卸が輸出を香港、タイ、マレーシアにも、特秀桃の「一桃匠」と青秀の品物を行っている。いずれの国でも、大玉で糖度が高い八代統合桃部会のモモは好評を得ており、高単価で取り引きが行われている。

## ⑥大田市場における販売促進活動

八代統合桃部会が所属するJAふえふきでは、毎年6月中下旬に、大田市場において、笛吹市長、JAふえふき組合長がモモフェアと題して販売促進活動を行っている。JAふえふきの各共選所から特選モモが展示されるが、八代統合桃部会からは「一桃匠」を展示し、市場関係者へのPR活動と市場関係者への試食等を行っている。

## (4)技術的特色

### ①技術指導による高品質安定生産

八代統合桃部会では、JAふえふき八代支所営農指導課、峡東農務事務所と連携し、栽培技術講習会等を開催している。モモ栽培においては、剪定から摘蕾・摘花、摘果、袋掛け、除袋、新梢管理、マルチの施用、収穫までが基本作業となるが、きめ細やかな技術指導により、部会員全体の栽培技術が高度平準化し、高品質果実の安定生産に繋がっている。

病虫害防除に関しては、県の防除暦に準じた薬剤散布を実施しているが、適期に薬剤防除が実施できるよう散布時期ごとに全部会員に一斉メールを送信し部会全体での適期防除を徹底している。

### ②せん孔細菌病の根絶と将来へ向けた改植の取り組み

平成30年の秋の大型台風や、翌年4月下旬～5月の強風に伴う降雨や降雹の影響により、県内全域の主力産地でモモの難防除病害であるせん孔細菌病が多発した。八代統合桃部会内でもせん孔細菌病が多発し大きな被害を受け、被害状況を把握するとともに、防除対策にむけて関係機関と一丸となって様々な対策を実施した。

対策として、まずは感染がひどい樹については、将来を見越して思い切った伐採を行い優良品種への改植を、部会員に積極的に促した。改植による一時的な出荷量の減少には、県補助事業を部会内で周知して活用するよう呼びかけた。

休眠期防除の徹底や感染した枝の剪除などの徹底と翌年の春枝への感染チェックと除去の徹底を、講習会や巡回指導などで防除対策の徹底を呼びかけた。

このような防除対策を部会全体で継続して3年間実施したことにより、将来的な産地の発展に向けた積極的な伐採、改植を行ったため、一時的に生産量が減少してはいるが、徐々に回復している状況であり、令和4年には果実への発生が見られなくなったことから、せん孔細菌病の被害を克服できたと判断している。

### ③「やまなしGAP」と「4パーミル・イニシアチブ」の取り組み

八代統合桃部会が所属するJAふえふき八代支所において、令和2年2月にて「やまなしGAP」を取得し、「GAPチェックシート」により「安心・安全」な農産物の生産に向けて確認し改善を行っている。部会員は、GAP取得を契機として、農薬の取扱や適切な保管、作業場所や出荷時のコンテナなどの清掃に心がけるなど、日々改善活動を実施している。最近では、農作業事故が多く発生しているため、県で示している農作業安全チェックシートを活用し農作業事故や熱中症の予防を徹底している。

また、農業分野において土壌に二酸化炭素を炭素として貯留しゼロカーボン社会の実現や地球温暖化の抑制に貢献するため、JAふえふき全体として、「4パーミル・イニシアチブ（エフォート）」を取得した。八代統合桃部会でも堆肥・有機質肥料のみの栽培や剪定枝の炭化に取り組む生産者が増えてきている。

これらの取り組みにより、「おいしい未来へやまなし」のロゴマークの使用が可能となり、出荷箱やリーフレットにロゴマークを印字し、商品の差別化にも利用している。

#### (5) 集団組織活動による参加農家の経営効果

八代統合桃部会での平均出荷量は10aあたり1,088kgであり、共選以外の出荷量を約100kg上回っている。また、果実品質は透過式光センサー選果機による果実重、着色、糖度、熟度等の選果を実施することにより、平均単価は1kgあたり100円程度高く販売している。さらに、JA単位で低コスト段ボール原紙や低価格果実袋を導入し、コスト低減に取り組んでいる。

これらの取り組みにより、共選出荷以外では10aあたりの所得は約46万円、所得割合は約6割に対して、八代統合桃部会における所得は共選出荷以外より約20万円高く約66.5万円で、所得割合は約7割を達成している。

#### (6) 地域への波及効果

八代統合桃部会のモモは県内他産地の単価より高く取引されており、そのブランド戦略は、他産地の経営戦略にも大きな参考となっている。さらに、八代統合桃部会が高単価での販売を行うことにより、山梨県全体のモモ単価を牽引する役目も担っている。

そのため、他産地に比べ販売単価が高価格で推移していることもあり、後継者が親元就農するケースも増えてきている。また、徐々にではあるが、県外からの新規就農者も出てきており、優良事例として他産地からも注目されている。

#### (7) 今後の経営展開

##### ① 県オリジナル品種の導入と既存品種の組み合わせ

産地間競争が激化する中、他産地と差別化できる品種構成が重要となる。八代統合桃部会では、県オリジナル品種の「夢みずき」や「夢桃香」を、有望品種として位置づけ生産拡大を図っていく。

現在の主力品種は「日川白鳳」、「白鳳」、「なつつこ」であり、「夢みずき」や「夢桃香」などの新品种に部会オリジナル品種「あさやけ」を加えて、6月下旬から8月上旬まで安定的に出荷できる品種構成としている。

特に、「夢桃香」については、通常のももと異なり新しい肉質のももであり、軟果しにくい特性があるため、その特性を市場に伝えながら台湾などへの海外への輸出を

検討し有利販売に繋げていく。

#### ②気象変動に影響されにくい生産体制の確立

近年、温暖化の影響により、果実の日焼けなど高温障害が発生するなど、年々安定した栽培が困難となっている。また、せん孔細菌病のような突発的な病害虫の発生が危惧される。

八代統合桃部会では、栽培技術講習会時に通常の栽培技術だけでなく、その年の状況に応じた技術指導を実践していくとともに、気象変動に強く安定的に収穫出荷できる「夢桃香」などの品種の選定及び普及を進めていく。

#### ③担い手確保の取り組み

当該地域においても、高齢化による離農も増加しており担い手確保が急務となっているが、モモの販売価格の上昇に伴い、八代統合桃部会内では、後継者が親元就農するケースが増えてきており、耕作が出来なくなった農地の貸与が地域内でスムーズに行える体制を整えている。

また、令和5年6月に設立したJA出資型法人「アグリコネクトふえふき」の活動拠点地として八代統合桃部会の協力のもと、果樹栽培の経験が無く就農意欲の高い人に栽培技術を教育し地域に就農するまでの支援を行い、担い手の確保と耕作放棄地の解消に取り組んでいく。

#### ④国際水準GAPへの取り組み

国の都道府県GAPの基準廃止に伴い、国際水準規格（やまなしGAP・ADVANCE）への移行に向けて取り組んでいく。

#### ⑤海外輸出への取り組み

モモの海外輸出は、販路の多角化を図りモモの単価を維持していくことで、産地を活性化させるために必要な取り組みである。

今後も、台湾輸出を中心に高単価の維持のため、海外輸出量を増やしていく。



## II. 経営概況

### 1. 集団組織の現状

#### (1) 集団組織の参加戸数及び経営規模

全戸数	総戸数	0.5ha以下	0.5～1ha	1～2ha	2～3ha	3ha以上	1戸平均		
							経営面積	うち果樹作	
専業	132戸	0戸	88戸	40戸	4戸	0戸	専業	0.8ha	0.8ha
第1種兼業	80戸	20戸	22戸	38戸	0戸	0戸	第1種兼業	0.5ha	0.5ha
第2種兼業	94戸	66戸	28戸	0戸	0戸	0戸	第2種兼業	0.4ha	0.4ha
計	306戸	86戸	138戸	78戸	4戸	0戸	全戸	0.52ha	0.52ha

#### (2) 集団組織タイプ

J A生産部会・選果場共同利用

#### (3) 集団組織の労働力構成

性別	男 (人)					女 (人)					合計	主たる 分担作業
	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計		
構成員	4	20	88	170	282	0	0	10	14	24	306	管理作業全般
構成員の家族												
計												

#### (4) 集団組織の雇用労働の状況

常雇	性別	人数	年間雇用日数	主たる分担作業
		人	日	
臨時雇用	延べ雇用日数		(人・日)	

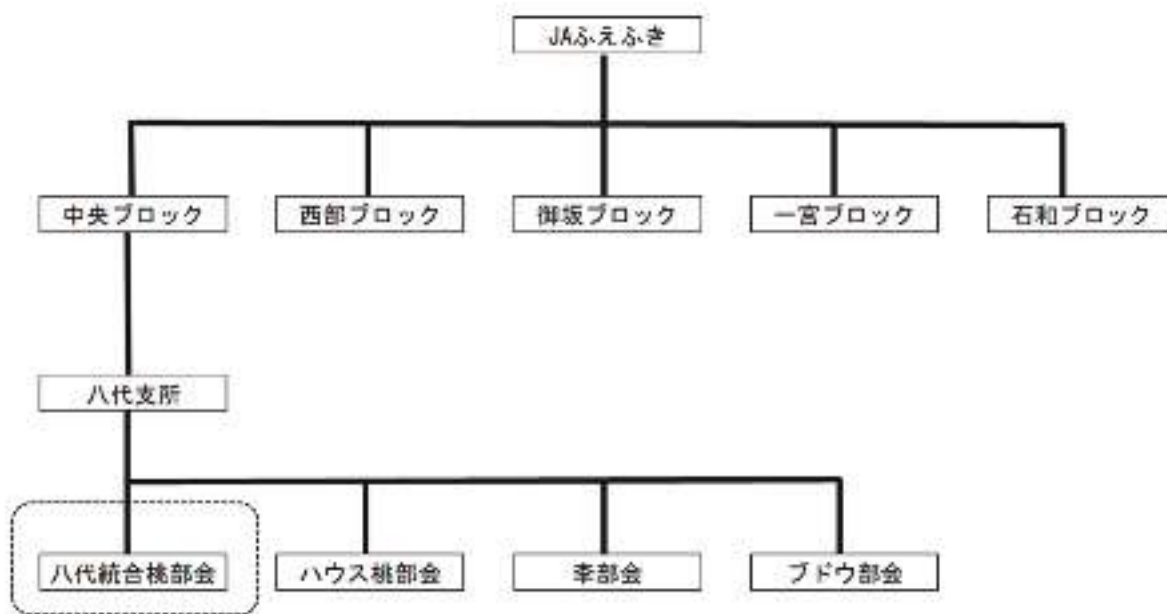
### 2. (1) 耕地の概況

総耕地面積	409ha
水田	2ha
普通畑	101ha
果樹園	306ha

### (2) 左表の果樹園のうち集団活動の対象となる果樹園面積

品目	栽培面積 (うち成園)
①モモ	157ha ( 114ha)
②施設モモ	3ha ( 3ha)
③ブドウ	98ha ( 86ha)
④施設ブドウ	45ha ( 43ha)
計	303ha ( 246ha)

3. 集団組織の組織図



4. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

(1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
光センサー選果機	3	透過式糖度カラーセンサー	H19	
		フリートレイ式2条3系列一式		

(2) 主要施設

種類	構造	規模(面積・延長等)	建築年	備考
集出荷施設	八代統合共選所事務所	50.34m <sup>2</sup>	H19	
	八代統合共選所	5,360.30m <sup>2</sup>	H19	

5. 果樹生産・出荷の概況

(1) 生産の概況

品目・品種	収穫面積			収穫量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a当たり
モモ	114ha	114ha	114ha	1196 t	1215 t	1309 t	1240 t	1088kg

(2) 選果及び出荷の概況

品目・品種	全出荷量 (共同選果量)			出荷額 (共同出荷額)			
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年 平均
モモ	1196 t	1215 t	1309 t	985,606 千円	1,086,481 千円	1,158,402 千円	1,076,829 千円

(当年産出荷の特徴)

八代統合桃部会における全出荷量および出荷額は、令和3年度、4年度、5年度と増加している。これは、令和元年にモモせん孔細菌病が蔓延し出荷量が激減したが、その後、関係機関と一体となった取り組みにより、出荷量が増加した。

令和5年度の八代統合桃部会での出荷量をみると、全選果量1309tが透過式光センサー選果機による共同選果であり、共選割合が100%となっている。

6. 当年の販売方法別割合

品目・品種	販売方法別の割合						
	農協	集団組織で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
モモ	100 %	%	%	%	%	%	%

7. 園地の状況

(1) これまでの対象集団組織の園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
S48～H15	モモ、ブドウ、 スモモ	374ha	畑地灌漑、排水路、農道整備	
H16～27	〃	357ha	排水路、農道、区画整備	
H20～28	〃	62ha	排水路、農道、区画整備	

(2) 現在の集団組織の園地状況

J Aふえふき管内では、昭和40年代以降、果樹産地の形成とともに農道の整備や畑地灌漑施設等の整備が広域的に進み、園地の条件整備がされてきた。

8. 選果及び出荷の状況

(1) これまでの対象集団組織の選果及び出荷についての整備状況

年次	対象品目	能力	整備の内容	備考
平成19年	モモ		延床面積 5,360.30m <sup>2</sup> 透過式糖度カラーセンサー フリースレイ式2条3系列 一式	大きさ、糖度、着色程度、熟度等

(2) 選果及び出荷の改善状況

八代統合桃部会では、平成19年にJAふえふき管内でもいち早く透過式光センサー選果機を導入し、品質重視のモモを出荷している。また、出荷前には、品種ごとに目合わせ会を開き、品質の揃ったものを出荷するように取り組んでいる。

八代統合桃部会が所属するJA八代支所では、県の取り組みである「やまなしGAP」と「4パーミル・イニシアチブ（エフォート）」を取得し、他産地との差別化を図っている。

さらに、露地モモについては、糖度12度以上（白鳳以降は13度以上）の特秀桃を「一桃匠」のブランドで、糖度13.5度以上（晩生種は糖度14度以上）の超特選のモモは「一桃匠 八代の夢」として出荷し、果専門店や贈答用など高単価で取り引きされている。

また、大玉の「あかつき」を系統選抜し、その苗木を増殖・果実生産して、「商標名：あさやけ」のブランドで有利販売している。

輸出では、台湾向けに他香港にも輸出を行い、モモの価格維持・安定に努めている。

9. 集団組織活動の効果

項目	集団組織に参加している農家	集団組織に参加していない農家又は地域の平均
収量	八代統合桃部会の平均出荷量 1,088kg/10a	共選出荷以外 980kg/10a
労働時間	420時間（白鳳有袋）	420 時間（白鳳有袋）
品質	透過式光センサー選果機による果実重、糖度、着色、熟度等の選果による高品質果実を出荷している。 また八代統合桃部会が属するJAふえふき八代支所は、JAふえふき管内でも高価格のモモを出荷している	生産者ごとの技術のバラツキがあるため、果実品質にもバラツキがみられる。
生産コスト	JAふえふきでは、農業者所得の増大、生産拡大を目指し、低コスト段ボール原紙や低単価果実袋の普及拡大や化成肥料の共同購入による価格低減に取り組んでいる。	
平均的経営収支 粗収益 経営費 所得	944,831円/10a 279,616円/10a 665,215円/10a (868円/kg、1088kg、経費257円/kg)	735,000円/10a 274,400円/10a 460,600円/10a (750円/kg、980kg、経費280円/kg)

## 10. 経営の優秀性等

### (1) 集団組織としての栽培技術上のポイント

- |                                                                                                                                                                                                                  |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ① 剪定から摘蕾・摘花、摘果、袋掛け、除袋、新梢管理、マルチの施用、収穫までの基本作業の徹底ときめ細かい技術指導により、県下でもトップクラスの単価を誇るモモ産地である。                                                                                                                             |
| ② 「夢みずき」や「夢桃香」などの優良な新品種の導入と「日川白鳳」、「白鳳」、「あさやけ」、「なつっこ」などの既存品種の組み合わせにより、切れ目のない出荷体制を構築している。                                                                                                                          |
| ③ 山梨県では、県が定めた農業生産工程管理基準に従って出荷していることを「やまなしGAP」として認証している。また、農業分野において土壌に二酸化炭素を炭素として貯留しゼロカーボン社会の実現や地球温暖化の抑制に貢献する国際的な取り組みを「4パーミル・イニシアチブ（エフォート）」として認証している。八代統合桃部会が所属するJA八代支所では、「やまなしGAP」と「4パーミル・イニシアチブ（エフォート）」を取得している。 |

### (2) 集団組織としての経営管理上のポイント

- |                                                                                                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ① 5kgコンテナで15～16玉で、高糖度なモモには、「一桃匠」のブランドを付与し、高価格な取り引きが行われている。                                                          |
| ② 八代統合桃部会が大玉の「あかつき」を系統選抜し、その苗木を増殖して栽培し、商標名「あさやけ」で有利販売を行っている。                                                        |
| ③ 台湾向け輸出を実施しており、高単価で取り引きされていることから、モモ単価の維持に寄与している。                                                                   |
| ④ 八代統合桃部会における販売単価は、県内JAの中でもトップクラスの成績を上げている。この価格は他産地の価格形成にも大きく影響を及ぼしており、八代統合桃部会が高単価を実現することで、山梨県全体のモモ単価を牽引する役目も担っている。 |

11. 写真



「一桃匠 八代の夢」の化粧箱と荷姿



特選モモの出荷荷姿



「一桃匠 八代の夢」化粧箱の中のリーフレット



「あさやけ」の出荷状況



モモの搬入状況



モモの箱詰め状況



フリートレイによる選果



「頭上注意」の掲示による安全管理



台湾輸出の取り組み（侵入痕の確認）



台湾輸出（注意事項の掲示）

清潔性の炭化方法

① 炭の発生が早い可燃性の炭化材を使う

**注意喚起**

- ① 炭化材の燃焼時の温度が1000℃以上になる。
- ② 炭化材の燃焼時に発生する煙や灰を適切に処理する。
- ③ 炭化材の燃焼時に発生する熱を適切に処理する。

② 燃焼、炭化材の燃焼時に発生する煙や灰を適切に処理する

③ 炭化材の燃焼

炭化材の燃焼時に発生する煙や灰を適切に処理する

炭化材の燃焼時に発生する熱を適切に処理する

炭化材の燃焼時に発生する煙や灰を適切に処理する

炭化材の燃焼時に発生する熱を適切に処理する

炭化材の燃焼時に発生する煙や灰を適切に処理する

炭化材の燃焼時に発生する熱を適切に処理する

山梨県における4パーミル・イニシアチブの取り組み

農産物の品質向上を図ることで国際市場での競争力を高めると「4パーミル・イニシアチブ」の取り組みにより、農産物の品質向上を図ることで「国際に発信した農産物」として海外にアピールし、付加価値を高めること、海外への販路を確保していく。

**4パーミル・イニシアチブとは**

農産物の品質向上を図ることで国際市場での競争力を高めると「4パーミル」を掲げることで、農産物の品質向上を図ることで「国際に発信した農産物」として海外にアピールし、付加価値を高めること、海外への販路を確保していく。

- ① 農産物の品質向上を図ることで国際市場での競争力を高めると「4パーミル」を掲げることで、農産物の品質向上を図ることで「国際に発信した農産物」として海外にアピールし、付加価値を高めること、海外への販路を確保していく。

**農産物における4パーミル・イニシアチブ**

農産物である山梨県産の特性を十分に活かし、農産物内で特定産産を炭化・貯蔵して炭化の抑制に寄与する

炭化・貯蔵  
より多くの炭素を貯蔵

- ① 炭化や炭素貯蔵によって炭素を貯蔵できる
- ② 炭化することで、より多くの炭素を貯蔵し、炭素に貯蔵することが可能

**問い合わせ先**

山梨県農林水産部 農産物対策課 055-223-8699

アグリネット 山梨県支店 055-223-1461

山梨県農林水産部 農産物対策課 055-223-8699

山梨県農林水産部 農産物対策課 055-223-1461

「4パーミル・イニシアチブ」の取組内容

# 田辺印の会

住所及び氏名

住所 和歌山県 田辺市  
たなべじるし かい  
氏名 田辺印の会

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

和歌山県紀南地域は、紀伊水道を流れる黒潮の影響による温暖な気候を活かして果樹を中心とした総合園芸産地を形成している。その中でも「梅」は、本州最南端に位置するJA紀南の基幹品目であり、管内果樹栽培面積の約72%を占めている。

「田辺印の会」は、JA紀南管内で梅を中心に有機栽培に取り組む生産者らが、平成20年に「有機食材生産研究会」を設立したのが始まりで、平成26年に現在の名称に変更した。現在は14戸の生産者が17.4haの農地で、梅を中心に柑橘、キウイフルーツの有機栽培に取り組み、自然に近い形で生産した安全・安心な農作物を消費者に届けつつ、永続的な農業の手段として有機栽培を実践している。紀南地方は温暖多雨の気候のため病害虫が多く有機栽培には不向きと考えられていたが、試行錯誤を繰り返しながらより高品質な梅の有機栽培に取り組んでいる。なお、「田辺印」の由来は、江戸時代、田辺地方は紀州藩付家老安藤家の領地であり、備長炭や梅干し等の産物は江戸、大阪に移出され、市中の人々から「田辺印がきた」と長らく臍頂にされてきた。有機栽培にこだわり、間違いない品質の商品を全国へ届けようという思いから、「田辺印の会」と名付けた。

ご存じの通り、有機栽培とは、堆肥等で土づくりを行い、化学的に合成された肥料及び農薬、遺伝子組み換え技術を使用しないこと等の基準を満たすことが必要であり、生産した農産物を有機農産物と表示して販売するためには、第三者機関からの認証を受けて「有機JAS」に適合しなければいけない。田辺印の会は平成21年から有機JAS認証を取得し、有機農産物の販売を続けている。

また、当地域は400年にわたり、養分に乏しい礫質で崩れやすい斜面を利用して薪炭林を残しつつ梅林を配置し、梅の授粉に必要なミツバチと共生しながら高品質な梅を持続的に生産してきた農業システムが評価され、平成27年に「みなべ・田辺の梅システム」が世界農業遺産に認定された。有機栽培という環境に配慮した農業を実践することで、この江戸時代から続いてきている梅栽培の継続も目標に掲げている。

農業だけでなく、組織活動の一環として年3回熊野古道潮見峠付近の清掃作業を行っており、社会貢献活動にも積極的に取り組んでいる。田辺印の会の合言葉は「おもしろくやろう」。この合言葉には、農業を楽しくしようという意味の他に、消費者や地域住民との交流の中で楽しい人間関係を築こうという意味も含まれている。農業を取り巻く環境が厳しく、人と人との繋がりが希薄になりつつある中、持続可能な農業に相互扶助の精神で前向きに取り組んでいる団体である。



## 2. 集団組織を取り巻く環境

### (1) 立地条件

J A紀南は、紀伊半島南西部に位置する田辺市から本州最南端の串本町までを管内としており、山・川・海と自然豊かな地域で農業を営んでいる。年平均気温は17.5℃、1月の平均気温6～7℃、年降水量2,000mmと温暖で自然条件に恵まれており、その温暖な気候を活かして果樹、野菜、花き等の栽培が行われている。その中でも果樹栽培は田辺市、上富田町で盛んに行われており、梅やスモモの落葉果樹、温州みかんや晩柑類といった柑橘類等が栽培されている。

また紀南地方は、すさみ町まで阪和道が南北に通っており、農産物を京阪神に供給する利便性が整っている。

### (2) 地域の果樹農業事情

江戸時代に紀州藩田辺領下において農民がやせ地は免租地となることから梅を栽培したことが梅栽培の始まりと言われている。梅の栽培が急激に増加したのは、明治40年以降で、これは軍用食として梅干し需要の増加によるものであった。昭和30年・40年以降、「古城梅」「南高梅」といった品種の出現、疲労回復や整腸作用、熱中症対策といった健康食としての認知拡大、食生活の多様化による梅の需要の伸びと相まって、栽培面積が増加した。



「南高梅」は、J A紀南管内で最も多く栽培されている品種であり、その生産量は管内梅生産量の9割以上を占める。果実に美しい紅をさすのが特徴で、梅ジュースなどのほかに、肉厚でやわらかい梅干しができる。和歌山県の梅の栽培面積割合は全国の約35%に対して、収穫量は全国の約65%を占めている。このことから「南高梅」が他の品種と比較しても着果が多いことが裏付けされている。

「古城梅」は田辺市長野発祥の梅で、果実は「青いダイヤ」と称されるほど美しい梅で主に梅酒、梅ジュースに用いられる。

産地の課題としては、生産者の高齢化、農繁期の労働力確保、耕作放棄地対策、農作物への鳥獣被害対策等が挙げられる。近年は気象変動による生産量の不安定化も問題視されている。梅は開花期が早いため、凍霜害や低温による影響を受けやすく、生産は不安定となっている。また近年では寒さだけでなく、暖冬の影響も受けており、冬季の温度に左右されない生産安定対策が最重要課題となっている。

## 3. 対象集団組織の概況

### (1) 集団組織の履歴

#### ・慣行栽培から有機栽培へ

梅を栽培するにあたり、化学農薬や化学肥料等を使用する中で、体調不良や肌荒れなどを起こす生産者もあり、慣行栽培の梅づくりに限界を感じ、有機栽培の研究を始めた。

有機栽培に取り組み始めた生産者らの家族経営を安定的に発展させるため、平

成20年に「有機食材生産研究会」を12戸の生産者で立ち上げ、平成26年に「田辺印の会」に名称を変更し、現在は14戸の生産者で有機梅の栽培に取り組んでいる。

会の発足当初から、有機農業で自立する農家を育てるには、売れてこそ成立するとの共通認識のもと、生産者自らが営業マンとして販売の先頭に立ってきた。そのためには、見映えも大切な要素と考え、栽培技術を深化させるため、会員相互で経験や技術を交換して生産力を向上させてきた。

現在は品質も向上し、有機栽培という付加価値が農産物として大きな魅力となっている。田辺印の会は、消費者だけでなく生産する農家も健康であることを目指し、人間にも環境にも優しい農業を実践している。

## (2) 集団組織活動の状況

現在、55園地17.4haの圃場で梅や柑橘類の栽培を行っている。部会発足当初の平成21年度の梅出荷量は約16tだったが、令和5年度は119tの出荷量となり、関東方面の生協や梅酒業者等に出荷している。

J A紀南と田辺印の会は生産面と販売面の両面から連携を図りながら活動に取り組んでいる。田辺印の会の事務局は発足当初からJ A紀南の指導部職員が担当しており、当時は化学肥料や農薬を販売しているJ Aが有機栽培部会を担当するのは全国的には珍しいケースであった。有機J A S認証取得の事務作業や有機農産物を取り扱う販売先の模索等、生産部会とJ Aが二人三脚で歩んできている。毎年開催している剪定講習会ではJ A営農指導員が講師を務め、会員らと意見を交換しながら安定収量の生産、化学肥料を施用しなくても生長する樹形づくり、防除がしやすい枝の配置等、よりよい園地づくりを行っている。



J A 営農指導員による剪定講習会

少数で取り組んでいる有機栽培では秀品率や収穫量等、経営に関する不安も少なからず出てくる。田辺印の会では使用できる資材の選定や、授粉樹の選別等きめ細かく協議し、秀品率の向上や収穫量の確保という農家所得を安定させる方策を講じている。

樹本来の抵抗性を引き出して栽培することが有機栽培の基本であるが、有機栽培で使用可能な肥料類は限られているため、田辺印の会では共同作業により梅に適した堆肥を製造している。米ぬかやカニ殻を地域に根付いた土着菌を用いて発酵させ、3ヶ月かけて良質な堆肥に仕上げ、各園地で施用している。堆肥により土壌微生物を活性化することで、梅の根が張る表層付近の土壌を膨軟にし、保水力も向上する。また、年によって収量や病害虫の発生具合が異なるため、会員全員の圃場状況を確認し、必要に応じて取引先と数量や品質基準の調整を行っている。



会員らによる堆肥作り作業



### (3) 経営的特色

販売面では、梅酒メーカーや首都圏の生協に販売を行い、有機栽培という特長を活かして相場に左右されない取引を行っている。販売先にはJAだけではなく、会員自ら交渉に参加し、取扱量の拡大に繋げている。その際には、有機農産物について理解を深めてもらい、ある程度の傷がある梅も受け入れてもらう契約を結び、食品ロスの削減にも繋げている。取引先の生協からの現地確認の受け入れやオンラインでの交流会等にも積極的に参加している。

出荷の際には果実の劣化を防ぐため青果物鮮度保持フィルムを使用した袋で果実を包装し、品質の保持に努めている。



出荷時は会員で荷下ろし作業を行う



### (4) 技術的特色

田辺印の会の会員らは有機農産物の栽培は苦勞することも多いが、それ以上に食味がよく、体に良い農産物を栽培することにやりがいを感じている。それだけ有機農産物に自信を持っており、持続可能な有機栽培の普及に意欲を燃やしている。

有機栽培に取り組んでいるということは、化学肥料や農薬の使用等による環境負荷を軽減した環境保全型農業を実践しているということである。除草剤を使用せず、手間がかかる草刈りで除草作業を行っているが、土に負担をかけない仕組みが農業を持続可能なものにするに積極的に取り組んでいる。また、使用できる農薬は非常に少なく、黒星病やすす斑病の防除に食酢や重曹を希釈して散布している。化学農薬と比較すると効果は劣るが、少しでもきれいな果実を消費者に届けたいと防除は欠かさない。アブラムシ対策として有機JAS規格でも使用が認められている除虫菊乳剤の散布や益虫であるテントウムシの利用、コスカシバ対

策としてフェロモン剤のスカシバコンを枝に巻き付けて対応しているが、一番重要なのは根気強く園地を見て回り、異変に気づいたらすぐに対処することであり、会員全員が心掛けている。

#### (5) 集団組織活動による参加農家の経営効果

除草作業や園地確認等で慣行栽培と比較すると平均作業時間は増加するが、その分園地の変化に気づきやすく、早期に対策を講じることができる。その上、化学肥料や農薬を使用しないことにより、肌荒れ等が少なくなり、健康面でのメリットも感じている。

梅の有機栽培についての技術や知識を深めるため、JAからの情報だけでなく、会員同士の情報交換も重要となってくる。自分たちの経験や試験を行った内容を共有し、栽培に活かすことで、会員自身だけでなく会全体のレベルアップに繋がっている。

また、JA事務局と協力して会員の経営状況を把握し、経営指標を作成しながら、生産者の目標を設定して栽培意欲を高めている。

#### (6) 地域への波及効果

紀南地方では生産者の高齢化が進み、後継者がいない農家が多いのが現状である。農地は一度荒らしてしまうと元に戻すまでかなりの時間と経費を要する。有機栽培となればなおさらである。現在はIターンや田舎暮らしが時代の流れとなり、小規模な野菜直売農家は増加しているが、園地の準備に時間を要する果樹栽培での新規就農は難しいのが現状である。田辺印の会では、有機栽培圃場を維持させるため、新規就農者やIターン就農者等で有機栽培に取り組みたい希望者をホームページで募集し、研修生として受け入れ、自立できるようにサポートしている。令和元年から就農した会員は田辺市へ30回以上通いながら梅栽培を学んだ後に県外から移住し、会員の梅園地を借り受けて栽培に取り組んでいる。田辺印の会では最年少の会員だが、試行錯誤を繰り返しながら栽培を行っており、梅とキウイフルーツの複合経営に取り組んでいる。

#### (7) 今後の経営展開

有機栽培は慣行栽培と比較すると圃場管理に時間を費やすため、慣行品と同じ価格では経営が成り立たない。有機栽培の技術がどれだけ発展しても、その年の気象条件によって病気が出ることは避けられない。有機栽培の耕地面積が増加している中、それを理解した販売先、消費者をどのように広げていけるかが課題となってくる。

令和3年に農林水産省が策定した「みどりの食料システム戦略」では、「化学農薬使用量の50%低減」、「化学肥料使用量の30%低減」、「耕地面積に占める有機農業の割合を25%（100万ha）に拡大」を農業生産に関わる2050年目標として掲げており、有機栽培は拡大してくると思われる。今後は有機栽培の仲間を増やして、環境に負担をかけない持続可能な農業を広めることを目標としている。



オンラインで消費地と交流

農業従事者の高齢化や耕作放棄地対策等、地域農業には課題が山積している。田辺印の会は「おもしろくやろう」を合言葉に、課題解決だけでなく、その先の楽しさも追求している。

## II . 経営概況

### 1. 集団組織の現状

#### (1) 集団組織の参加戸数及び経営規模

全戸数	総戸数	0.5ha以下	0.5～1ha	1～2ha	2～3ha	3ha以上	1戸平均		
							経営面積	うち果樹作	
専業	13戸	2戸	1戸	9戸	1戸		専業	1.3ha	1.3ha
第1種兼業							第1種兼業		
第2種兼業	1戸	1戸					第2種兼業	0.48ha	0.48ha
計	14戸	3戸	1戸	9戸	1戸		全戸	1.24ha	1.24ha

#### (2) 集団組織タイプ

集団栽培

#### (3) 集団組織の労働力構成

性別	男 (人)					女 (人)					合計	主たる 分担作業
	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計		
構成員		2	4	6					2		14	
構成員の家族							2		6		8	
計		2	4	6			2		8		22	

#### (4) 集団組織の雇用労働の状況

常雇	性別	人数	年間雇用日数	主たる分担作業
		人	日	
臨時雇用	延べ雇用日数		(人・日)	

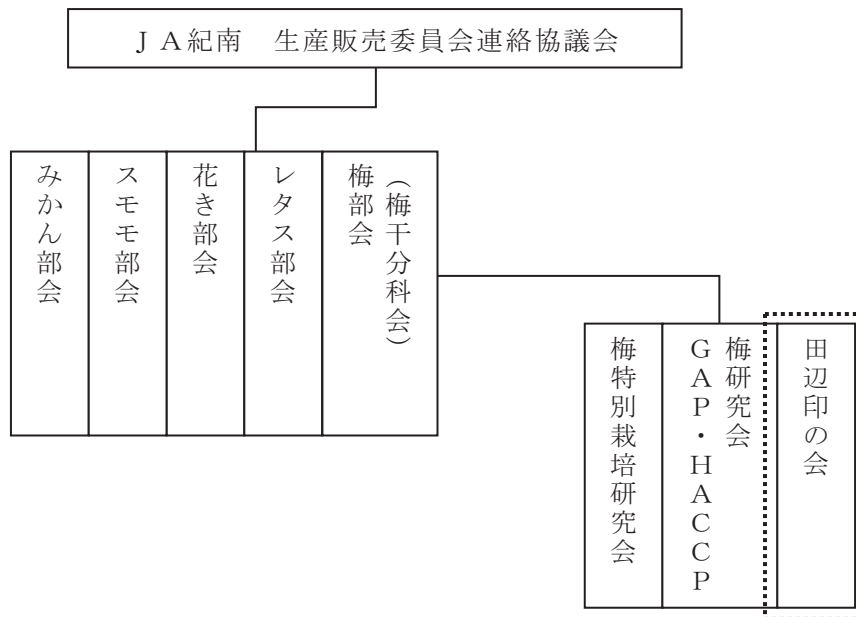
### 2. (1) 耕地の概況

総耕地面積	17.4ha
水田	ha
普通畑	ha
果樹園	17.4ha

### (2) 左表の果樹園のうち集団活動の 対象となる果樹園面積

品目	栽培面積 (うち成園)
①梅	16.4ha ( ha)
②柑橘	0.7ha ( ha)
③キウイフルーツ	0.3ha ( 0ha)
④	ha ( ha)
計	17.4ha ( ha)

3. 集団組織の組織図



4. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

(1) 主要機械

種 類	台 数	仕 様	導入年	備 考
フォークリフト	1	堆肥作成に使用		中古
攪拌機	1	堆肥作成に使用		中古

(2) 主要施設

種 類	構 造	規模(面積・延長等)	建築年	備 考
出荷場	鉄骨2階建	12139.6㎡	平成15年	使用は一部

5. 果樹生産・出荷の概況

(1) 生産の概況

品 目・品 種	収 穫 面 積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年 平均	
							収穫量	10a 当たり
梅	15.8ha	16ha	16.5ha	158 t	125 t	140 t	141 t	875kg
柑橘(レモン)	0.57ha	0.57ha	0.58ha	2.5 t	3.8 t	3.7 t	3.3 t	580kg

※キウイフルーツについては未成園のため、(1)(2)には記載していません。

(2) 選果及び出荷の概況

品目・品種	共同選果量			出荷額			
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年 平均
梅	129 t	106 t	119 t	84,464千円	70,341千円	77,421千円	77,408千円
柑橘(レモン)	2 t	3 t	3 t	1,123千円	1,598千円	1,738千円	1,486千円

(当年産出荷の特徴)

令和5年産有機梅の出荷実績は119 t (前年比113%)であった。病虫害では、落弁期の降雨が多かった影響で3月下旬ごろから灰色かび病が見られた。また、5月にも平年を上回る降雨量があり、後半の果実にすす斑病の発生が増加した。
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 当年の販売方法別割合

品目・品種	販売方法別の割合						
	農協	集団組織で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
梅	84%	%	16%	%	%	%	%
柑橘	80%			20%			

7. 園地の状況

(1) これまでの対象集団組織の園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
			枯れた樹、生産量が落ちた樹は随時、補植を行っている。	

(2) 現在の集団組織の園地状況

--



8. 選果及び出荷の状況

(1) これまでの対象集団組織の選果及び出荷についての整備状況

年次	対象品目	能力	整備の内容	備考

(2) 選果及び出荷の改善状況

<p>田辺印の会の梅の出荷先は生協と梅酒業者がほとんどである。出荷の際には、会員個人ごとに出荷物を格付けし、有機JAS規格適合品であることがわかるように出荷物を入れるビニール袋や段ボールに有機JASマークを貼付しなければいけないため、個人選別をしている。</p> <p>生協への出荷の際には、果実の熟度や色合い等の個人差が出ないように、入念な目合わせを行い、出荷物を均等に揃える努力をしている。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

9. 集団組織活動の効果

項目	集団組織に参加している農家	集団組織に参加していない農家又は地域の平均
収量	1,200kg/10a 慣行栽培と比較すると収穫量は減少する。	2,000kg/10a
労働時間	214時間/10a	162時間/10a
品質	使用できる資材が限られているため、多少の病虫害果はあるが、有機認証を受けた付加価値の高い果実となっている。	栽培暦を参考に、施肥・防除を行っているため、秀品率は約7割ほどである。
生産コスト	有機農産物としての付加価値もあり、販売単価は安定している。 有機JAS認証取得のために認証協会からの監査を受ける必要があり、監査費用が必要となる。	
平均的経営収支 粗収益 経営費 所得	10aあたり 粗収益 637,200円 監査費用(1件平均) 35,000円	10aあたり 粗収益 436,000円

10. 経営の優秀性等

(1) 集団組織としての栽培技術上のポイント

○有機栽培で使用可能な堆肥を会員らで製造し、各園地で施用
○除草剤を一切使用せず、土に負担をかけない園地づくり
○土壌分析による適正土壌成分把握
・ 剪定講習会…10月
・ 出荷説明会…5月
・ 目揃え会…6月

(2) 集団組織としての経営管理上のポイント

○有機JASの認証を受けるために年に1回、認証機関の監査を受ける。
○生産物を出荷する際には、収穫量や出荷量、販売先等の格付け記録をつける。
○有機栽培で使用できる資材の確認
○ホームページを開設し、有機梅の紹介や有機栽培研修者の募集等に活用。
・ 自主検査…1月
・ 年次監査…3月
※熊野古道道普請による地域貢献…7月、10月、4月

11. 写真



有機栽培に取り組んでいる梅園地



有機栽培園地の梅果実



出荷前には説明会を開催



スキルアップのために研修会も開催



熊野古道潮見峠付近を道普請



会員の集合写真



有機農産物の出荷時に貼付する有機JASマーク



TANABE-JIRUSHI ASSOCIATION

長野吉野の有機桃



国産品の魅力

屋外の自然に育まれた有機桃を全国へ。国産品の会の魅力をご紹介します。

[続きを読む](#)



生産について

こだわりの自然栽培作りから、自然に育り立つ有機桃をご紹介します。

[続きを読む](#)



品質管理

有機JAS認証を取得し、常に一律、摘果や作業時、全株農薬等の厳しい検査を受けています。

[続きを読む](#)

社会貢献活動

田辺印の会では長野県産の桃（有機JAS）を行っています。

[続きを読む](#)

メンバー紹介

「おもしろくちやう」の有機農に集まった、田辺印の会のメンバーをご紹介します。

[続きを読む](#)

新規就農募集

有機農業に興味のある方にぜひご紹介します。

[続きを読む](#)

ABOUT US

田辺印の会は、JA紀南の有機栽培グループです。有機JAS認定を主軸に14戸の生産者で有機桃・有機柑橘等を栽培しています。この地域とともに、代々受け継がれてきた文化・自然を次世代へと引き継ぐために・・・

ホーム

団体概要

お問い合わせ



〒390-0001 長野県 田辺市 田辺町 1-1-1

© 2018 TANABE-JIRUSHI ASSOCIATION



## 団体賞

全国農業協同組合中央会会長賞

宮崎県 野辺和哉・野辺容子

全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

大分県 J Aおおいた天瀬ぶどう部会

日本園芸農業協同組合連合会会長賞

香川県 白川徹・白川明子

長崎県 堀秋利・堀衣梨

全国果樹研究連合会会長賞

徳島県 J A徳島県神山すだち振興部会

中央果実協会理事長賞

北海道 宮後英子



# 野辺 和哉・野辺 容子

## 住所及び氏名

住所 宮崎県 串間市

氏名 のべ かずや 野辺 和哉 (43歳)・のべ ようこ 野辺 容子 (42歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

南那珂地域は、冬季温暖多照な気候といった恵まれた自然環境を生かし、かんきつ類の生産が古くから盛んであり、特に、きんかんの生産量は県内生産量の約7割を占めている。

野辺氏は施設きんかん68aを経営しており、完熟作型と早期作型の2つの作型に分けることにより、労力分散を図っている。このことにより、栽培管理が徹底できることで、安定した品質と収量を確保している。10a当たりの販売量、単価、A品率は、いずれも地区平均を大きく上回っている。

生産部会内では、視察の受入や展示ほを設置するなど、技術・知識の部会内での共有を図るだけでなく、部会員の園地を巡回し、積極的に情報交換を行い、部会全体のレベルアップを図っている。

また、福祉事務所と連携した農作業や地域の園児を招いた収穫体験等農福連携や食育活動にも取り組み、地域農業の維持・発展に大いに貢献している。

### 2. 対象経営を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

南那珂地域は、日南市と串間市の2市からなる地域で、宮崎県の沿海地帯の最南端に位置し、東は日向灘、南は鹿児島県志布志湾を臨む全国有数のリアス式海岸が続く、太陽と海、緑に囲まれた景観豊かな立地条件である。

また、沿岸部に無霜地帯が広がり亜熱帯植物の自生も見られ、年平均気温18.4度と温暖な気候である。年降水量2,763ミリ、日照時間1,951時間と、宮崎県の中でも日照量・水資源に恵まれた気候条件であり、農畜産物や木材の生産、かつお・まぐろ漁業の一次産業が盛んな地域である。

#### (2) 地域の果樹農業事情

南那珂地域は、冬季温暖多照な気候といった恵まれた自然環境を生かし、かんきつ類や亜熱帯果樹類の生産が盛んであり、中でも、完熟きんかん「たまたま」、マルチ日南1号、日向夏、完熟マンゴー「太陽のタマゴ」においては、県のブランド産地に認定されている。

きんかんにおいては、冬期の基幹作物として県内でもいち早く本地域で栽培が開始され、



県内の栽培面積105haのうち73haを本地域が占めるなど、県内一の産地となっている。

J Aみやぎき串間市大東地区では、ハウスごとの果実品質や出荷実績に基づき、営農指導員や農業改良普及指導員が栽培技術の指導を行うことで、さらなる収量・品質向上を図り、宮崎県産完熟きんかん「たまたま」のブランド力向上に大きく貢献している。

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

野辺氏は、平成18年に九州産業大学を卒業後、J A串間市大東に就職し、果樹担当の営農指導員として果樹の生産性向上に努めた。特に、きんかんにおいては、着果率向上のための要因を調査・分析し、重要な研究データをして本県の「完熟きんかん栽培マニュアル」に掲載されるなど、営農指導のみならず調査研究にも精力的に取り組み、本県の完熟きんかんの生産性向上に大きく貢献している。

また、栽培技術修得のため、在職中の平成23年にハウスを新設し、きんかん栽培を開始した。更に、平成27年に22a、令和2年に22aのハウス及び樹体を離農者から承継し、産地の維持にも寄与している。

令和2年のJ A退職後はきんかん栽培に専念し、現在は、J Aみやぎき串間市大東地区本部かんきつ部会副部会長を務めている。他のきんかん生産者に対し、自園地の状況の情報共有や栽培技術に関する助言を行うなど、部会及び若手生産者のリーダーとして、他の生産者から頼りにされており、産地発展に大きく貢献している。

#### (2) 経営の状況

経営規模は完熟きんかん24a、早期きんかん44aである。主に本人と妻の容子氏の2人で管理しており、労力が集中する11月から2月の収穫作業を中心に臨時で雇用している。また、剪定後の剪定枝回収・ハウス外への持ち出し作業については、市内の福祉事業所と連携して行うなど、農福連携の取組にも力を入れており、誰もが働きやすい環境づくりに努めている。

効率よく栽培管理を行うため、毎日、計4ハウス全ての見回りを行い、ハウス毎の生育状況を細かく確認し、作業の進捗状況や生育ステージを踏まえたうえで、容子氏と作業計画を立てるなど、夫婦二人三脚で栽培を行っている。

#### (3) 経営的特色

11月から12月出荷の早期作型、1月から2月出荷の完熟作型の2つの作型を組み合わせることで労力の分散を図り、安定した品質・収量を確保している。きんかん栽培は地域でトップクラスの成績を収めており、令和5年度の県の果樹共進会において、経営部門の知事賞、特別賞の農林水産省大臣賞及び宮崎県果樹振興協議会長賞を受賞するなど、高度な技術を有している。また、さらなる技術向上のために各種技術勉強会にも率先して参加し、他の生産者と情報交換を図りながら、高品質なきんかん生産に取り組んでいる。

#### (4) 技術的特色

完熟作型は、ハウス内で開花から210日以上果実を樹上完熟させる栽培であり、完熟きんかんのうち、外観が優れ、糖度16度以上かつ果実横径28mm以上のものを「たまたま」、糖度18度以上かつ果実横径32mm以上のものを「たまたまExcellent」と、県のブランド基準により認証付けている。

野辺氏は、この認証基準を満たす高品質な果実の安定的な生産に向け、以下の特徴的な取り組みを意欲的に行っている。

##### ① 樹勢維持のための管理

樹勢の維持を図るため、土壌分析を毎年実施し、診断結果に基づき肥料の種類や量を決定している。また、春芽伸長期に定期的に液肥の葉面散布を実施し、充実した結果枝の確保に努めている。

##### ② 着果安定のための管理

剪定において、受光体勢の改善や結果母枝の計画的な配置を行うことで、品質向上や収量確保を図っている。また、出蕾期にハウス内の温度ムラをなくすために蒸し込みを行うとともに、出蕾・開花の状況を見ながら細かな温度管理を行うことで、1番花の開花時期を揃え、結果安定を図っている。加えて、果実肥大を促進するため、生理落果終了後、直ちに摘果を実施している。

##### ③ 病虫害・生理障害対策

園内の観察や病虫害の発生予察、薬剤散布後の薬効の確認、園地周辺や園内の除草を徹底し、病虫害の発生を防いでいる。特に、ミカンハダニについては、マシン油乳剤や展着剤を効果的に活用するなど、殺ダニ剤の効果がより発揮できるよう工夫している。また、黒点病については、ハウス周辺に雨量計を設置し、降雨200mm以上で殺菌剤を散布することを徹底している。

また、高温に伴うす上がり果の発生を軽減するため、夏期に遮光ネットでハウス天井を被覆することで、ハウス内の温度上昇を防いでいる。

##### ④ 省力栽培

タイミングとポイントを押さえた管理を行うとともに、資材を効果的に活用することで、作業の省力化を図っている。

特に、資材については、液肥や殺菌剤散布の際に頭上かん水装置を活用することで、薬剤散布の労力削減を図っている。また、植物成長調整剤「ターム水溶剤」を開花期に散布することで摘果に係る労力を軽減するとともに、早期作型において「エスレル10」を着色始期に散布し、着色の揃いを良くすることで、短期に収穫作業を終えるなど、作

業に遅れが出ないように工夫している。

#### (5) 地域への波及効果

視察の受入や展示ほの設置に寛容かつ協力的であり、技術・知識の共有化を図っているとともに、独自で他生産者の園地を巡回し、積極的に情報交換を行っている。

また、福祉事業所と連携した農作業や地域の園児を招いた収穫体験を行うなど、農福連携や食育活動に積極的に取り組んでいる。

#### (6) 今後の経営展開

主に夫婦2人で管理していることから、現状以上の経営面積拡大は検討していないが、今後、高齢化により空きハウスが出てくることが考えられるため、将来的には作業の更なる省力化や労力確保を行い、規模拡大することで産地の維持を図りたい。

開花期の温度管理の適正化を図るとともに、高温時のす上がり果への迅速な対応を実施することで、収量及びA品率向上を図ることで、収益の更なる向上に繋げたい。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹専業・温室きんかん、完熟きんかん（ハウス） 複合
----------	-------------------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	68a
水田	a
普通畑	a
果樹園	68a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）
① 完熟金柑	24a ( 24a )
② 温室金柑	44a ( 44a )
③	a ( a )
④	a ( a )
⑤	a ( a )

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考

#### (2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
きんかんビニルハウス	AP改良	12a		
	AP改良	10a		
	AP改良	22a	H21	
	AP改良	24a	H25	

### 3. 農業労働力の状況

#### (1) 農業従事日数

	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (きんかん)	品目② ( )	品目③ ( )	
家 族	本人	43才	300日	300日	300日	日	日	剪定、整 枝、摘 果、薬 剤散 布、収 穫、そ の他 管理 作業
	妻	42才	250日	250日	250日	日	日	
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日 数	/			
	臨時雇用		延べ雇用日数	80日				

(2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
完熟金柑	890 時間 (691 時間)
早期金柑	777 時間 (763 時間)

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a 当たり
完熟金柑	24a	24a	24a	9,737kg	10,232kg	9,612kg	9,860kg	4,108kg
温室金柑	44a	44a	44a	21,859kg	20,274kg	15,018kg	19050kg	4,330kg

5. 販売方法別の割合

品目・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
きんかん	100%	%	%	%	%	%	%

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H21	施設きんかん	22a		
H25	施設きんかん	24a		
	施設きんかん	10a		
	施設きんかん	12a		

(2) 現在の園地の状況

--

7. 10a 当たり総労働時間

	品 目 ① (きんかん)	品 目 ② ( )	品 目 ③ ( )
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整 枝 ・ 剪 定	62.7 ( 0)	( )	( )
施 肥	9.5 ( 0)	( )	( )
	( 0)	( )	( )
薬 剤 散 布	30.6 ( 0)	( )	( )
温度管理	53.9 ( 0)	( )	( )
枝つり ・ 摘 果	92.1 ( 0)	( )	( )
芽かぎ・花卉除去	15.5 ( 0)	( )	( )
灌水	25.9 ( 0)	( )	( )
かんがい・その他管理	21 ( 0)	( )	( )
収 穫 ・ 調 整	540 ( 0)	( )	( )
生 産 管 理 労 働	38.8	( )	( )
生産関係労働時間 計	890 ( 0)	( )	( )
選別・包装・荷造り	収穫調整に含む	( )	( )
搬出・出荷		( )	( )
販売		( )	( )
小 計	890 ( 0)	( )	( )
合 計	890 ( 0)	( )	( )

8. 写真



# J A おおいた天瀬ぶどう部会

住所及び氏名

住所 大分県 日田市

氏名 J A おおいた天瀬ぶどう部会

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

天瀬ぶどう部会の活動地域は、日田市天瀬地区の山間地にあり、大分県内のぶどう産地の中では標高の高さを活かした果実品質に優れる遅出しの産地である。雨よけ施設での栽培であり、当初は9月中旬以降が出荷の中心であったが、現在では品種構成の工夫により8月上旬から10月下旬までの長期出荷を実現している。

部会の品種構成は、平成20年代の前半は「ピオーネ」が販売額の8割以上を占めていたが、温暖化の影響により黒色系品種の着色不良が問題となってきた中、黄緑色系品種「シャインマスカット」の生産拡大に部会一丸となって取り組み、現在、「シャインマスカット」が販売額の7割を占める主力品種となっている。また、黒色系品種の早生で出荷労力の分散が可能な「ブラックビート」、皮ごと食べられる「ナガノパープル」など着色の良い品種の導入も進められている。

生産面では「シャインマスカット」の品質向上対策として、部会の講習会で大きな粒、高糖度品質を目標に生産に励んだ結果、単価向上につながっている。

近年では出荷最盛期である9月の出荷量増加に伴う市場価格の低下に対応するため、「シャインマスカット」の冷蔵貯蔵による出荷期の延長を図ることにより、年末年始商戦に向けた有利販売を行っている。また、令和元年から輸出にも取り組むなど常に先進的な産地づくりを進めている。これらの取組の結果、令和5年産の販売額は、過去最高であった令和4年産より2千5百万円増の1億7千万円となっている。

部会では、現在、年々後継者が増え、若手、中堅、ベテラン組がバランス良い年齢構成となっている。部会員の団結力が強く、栽培講習会や出荷目均し会など開催することにより、栽培技術を高位平準化し引き継ぐ体制ができており、併せて新技術・新品種の導入の検討など、部会組織が中心となった産地づくりを進めている。

以上、消費者ニーズの高い「シャインマスカット」の生産拡大に加え、品質向上対策や貯蔵・輸出の取り組みにより単価向上を図っており、また、部会員が団結して天瀬ぶどうの産地づくりを行っていることから、本コンクールに集団組織として推薦する。



## 2. 集団組織を取り巻く環境

### (1) 立地条件

日田市は、大分県の西部、福岡県と熊本県に隣接した北部九州のほぼ中央に位置し、東西約25km、南北約49km総面積666.03km<sup>2</sup>、周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々に囲まれ、これらの山系から流れ出る豊富な水が合流する日田盆地と緑豊かな森林や丘陵地で市域を形成している。

日田市中心部では年間平均気温15.4℃、年間平均降水量は1,810mmで梅雨期に年間降水量の3分の1が集中する。年間平均日照量は約1,800時間となっている。

当部会の園地がある天瀬町は日田市の東部に位置しており、市中心部より標高が高い。内陸性のため冷涼な気候となっており、寒暖の差が大きく、冬は積雪もみられる。

### (2) 地域の果樹農業事情

日田市は平坦地から中山間地まで多様な地形と気候を活用し様々な農業が営まれている。水稻をはじめ、椎茸、西瓜や白菜といった野菜、なし、ぶどう、梅、すもも等の果樹、畜産が盛んな地域である。ぶどう栽培は昭和36年頃に始まり、現在に至っている。

## 3. 対象集団組織の概況

### (1) 集団組織の履歴

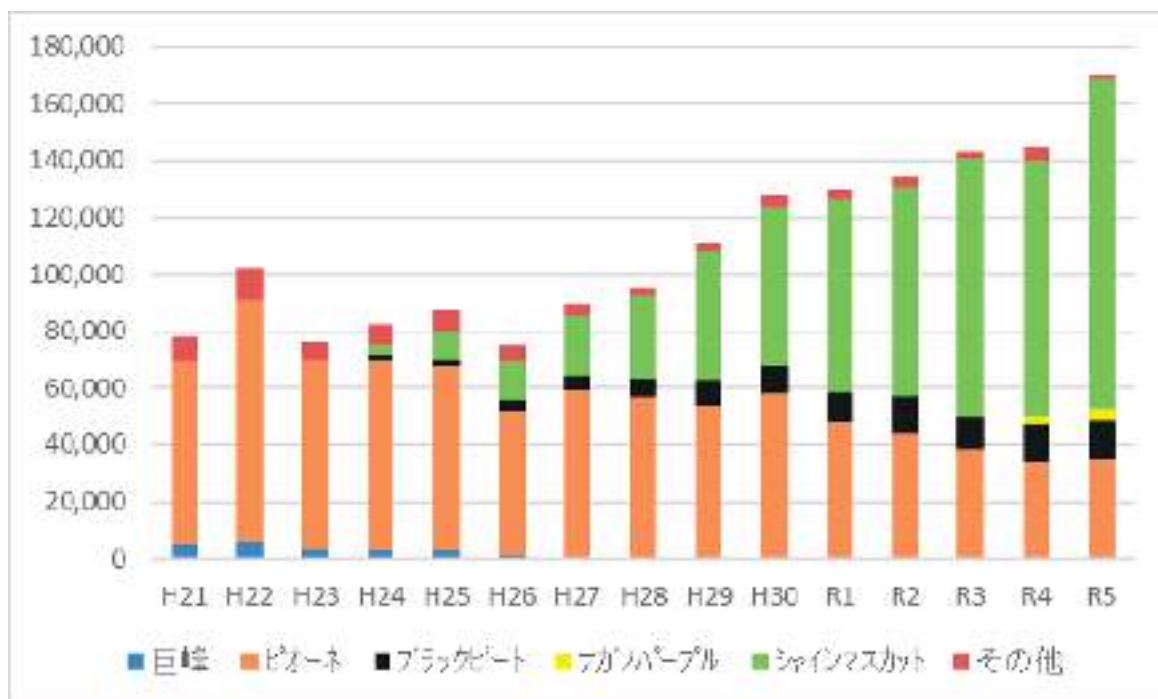
昭和36年に露地で「キャンベルアーリー」が導入され、翌年部会が設立された。昭和41年頃から「巨峰」、「デラウェア」が導入され産地が拡大した。昭和63年頃から巨峰に「枝ブクレ病」が発生したため、病害の耕種的防除と果実の高品質化を目的に雨除け施設の導入が進んだ。

これと併せて、新たな品種として「ピオーネ」の導入が始まり、部会一丸となった推進により、平成10年には22tを出荷した。その後も「ピオーネ」の拡大は順調に進み、平成19年には100tを越えた。

しかし、温暖化による「ピオーネ」の着色不良が問題となり始め、平成20年以降着色優良系統の「ブラックビート」や着色の必要が無い「シャインマスカット」の導入を進めてきた。現在に至るまで、部会員一丸となった戦略的な品種構成の構築により、販売額向上に繋がっている。

(千円)

図1 天瀬ぶどう部会の販売金額



### (2) 集団組織活動の状況

現在、部会の構成員は17戸、栽培面積は9haである。部会員の団結力が強く、栽培講習会や出荷目均し会などの参加率が高く技術の高位平準化が図られている。

選果は第三者の検査員を導入し厳格な品質管理を行っており、また、共販率は90%以上と非常に高く、シーズン通して安定した出荷量が見込まれる産地として、市場からの信頼も厚い。

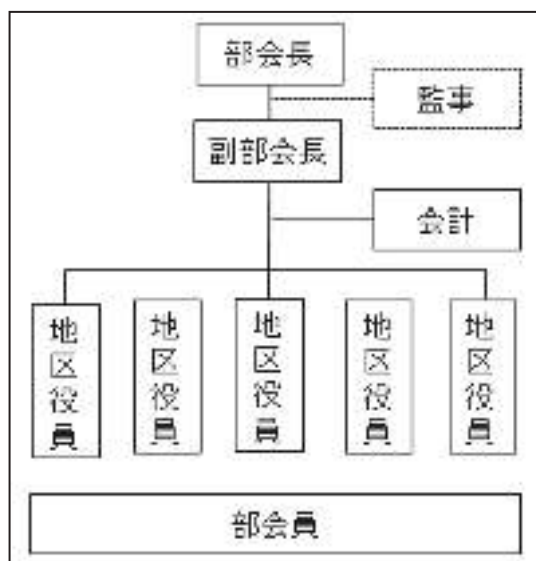


図2 組織図

### (3) 経営的特色

#### ① 戦略的な品種転換

永年性の果樹では、需要を見据え今後どのような品種を生産していくかが最も重要な産地戦略となる。天瀬ぶどう部会では、平成20年頃からそれまで主力品種であった「ピオーネ」が夏季高温によって着色不良となってきたことから、青系で着色不良の心配が無く、消費者・市場関係者のニーズが高い「シャインマスカット」に注目し、いち早く導入した。

また、黒色系品種の早生で出荷労力を分散できる「ブラックビート」、皮ごと食べられる「ナガノパープル」など、着色の良い品種をいち早く導入し、試験栽培

を開始した。

この結果、現在、販売金額では、「シャインマスカット」が7割を占める主力品種となっており、「ピオーネ」が2割、「ブラックビート」と「ナガノパープル」が1割を占めている。

## ②関係市場への情報提供・情報収集

毎年、出荷目均し会を開催して、市場担当者と情報の共有を図っている。近年は地球温暖化の影響により出荷時期が例年より早まることが多く、また、異常気象による気象災害や生理障害の発生により、予期せぬ出荷量の減少なども危惧されるため、時期ごとの生育状況等を市場関係者へ発信している。

また、反省会時に市場関係者から他産地の生産動向等聞き取ることにより、新品種や栽培技術の導入に柔軟に対応できるよう取り組んでいる。



写真1 出荷目均し会

## ③新規就農者の確保・園地の継承

新規就農者の確保のため、部会で今後の栽培継続期間のアンケート調査等を行い、リタイアする生産者の園地をリスト化し、新規就農希望者とのマッチングを行っている。令和5年度に就農した1名は、50aの成園の園地を継承し、現在、部会の生産者の指導・協力を得ながら今年産の生産に取り組んでおり、同時に改植も行い、経営の強化を図っているところである。



写真2 継承候補園地調査

### (4)技術的特色

#### ①「シャインマスカット」の品質向上

現在では「シャインマスカット」はぶどうの代表的な品種となり、全国的に多くの産地で栽培されている。しかし、「シャインマスカット」は大房では糖度上昇の遅延など食味不良となりやすい。

天瀬ぶどう部会では房作りと摘粒の指導を徹底しており、1房35～40粒とし、収穫時には550～600gになるよう指導している。これにより、玉太りが十分でかつ糖度が高い食味良好な房の生産が可能となっている。

## ②「シャインマスカット」の貯蔵の取組

出荷時期の拡大・単価向上を目的に、平成29年から「シャインマスカット」の貯蔵を開始しており、令和元年度にJAに貯蔵庫を導入した。出荷時期は11月から年末年始商戦の時期となっており、有利販売への取り組みにつながっている。貯蔵資材メーカーを招集しての貯蔵研修会も実施し令和5年は1,558kgの出荷実績となっている。貯蔵分の単価は2,500円/kgで通常の1,505円/kgに比べて高単価での取引を実現している。



写真3 貯蔵研修会

## ③輸出の取組・台湾輸出に対応した生産体制の確立

令和元年からタイ向けの輸出の取り組みを開始し、さらなる販路拡大のため、令和4年から、台湾向け出荷に備えた残留農薬検査・病害虫防除暦作りを行っている。台湾では日本での農薬残留基準値とは異なるため、残留基準値が厳しい農薬は使わないなど、国内外の出荷基準を同時にクリアする防除体制を整えている。

また出荷物については、残留基準検査を行い、台湾の基準値に対応しているかチェックをするなど対策を徹底している。



写真4 輸出される  
貯蔵「シャインマスカット」

## (5) 集団組織活動による参加農家の経営効果

部会では、栽培面では年間3回の栽培講習会・園地巡回と視察等を実施しており、高品質な果実生産を行う体制がとられている。また、農薬の適正使用と飛散防止対策のため、毎年、病害虫防除暦説明会を実施しており、産地全体でリスク管理ができる体制となっている。さらに、気象災害等が発生した場合には、速やかに情報伝達を行うとともに、産地全体で事後対策を行う等、集団組織活動をするメリットは大きい。講習会では栽培等に関する情報交換を行うことにより、ベテランから若手への技術継承が行われ産地全体のレベルアップが図られている。



写真5 園地巡回

## (6) 地域への波及効果

### ① 旬入りフェアでの販促活動

販売面では日田市と連携し、9月に旬入りフェアを開催している。地元市場でのセールスや小売店店頭での販促活動と合わせて地元放送局の協力を得てメディアプロモーションを実施している。

販促活動では対面販売を通して買い求める消費者に、直接ぶどうの美味しさや産地の魅力をPRしている。



写真6 販促活動

### ② 若手ぶどう生産者交流会

平成28年より市内の部会外の若手生産者との交流研修会を実施している。この交流会では園地視察や研修会などを通じた技術習得の他、若手生産者間の交流による仲間作りを行っている。

特に新規就農予定者や経験の少ない若手生産者も参加することから、担い手としての定着、技術習得につながっている。



写真7 現地研修

### ③ 農大生との交流・プロジェクト発表会

県立農業大学校生が行った、「シャインマスカット」の高品質化や貯蔵等に関するプロジェクト活動についての実績検討会を実施している。農大生は実際にぶどう栽培を行っている部会員のアドバイスを受け、内容の検討、発表に活かしている。プロジェクト活動を行っている農大生には地元出身の生徒もおり、交流を通じて、将来の天瀬ぶどう産地を担う後継者の育成に繋がっている。



写真8 農大生プロジェクト検討

## (7) 今後の経営展開

「シャインマスカット」は全国的に生産量が増加していることから、これまで以上に品質向上・安定出荷を図るとともに、貯蔵による長期出荷体系を確立することで、更なる所得向上を目指していく。

また、今後の品種戦略の構築に向けては、市場関係者との情報交換を密にする

ことで、品種動向等、市場からの要望についてより迅速に産地で対応できる体制とする。

さらに、今後は新規就農者の受入れ体制を充実させ、更なる園地継承の取組をすすめることにより、産地の維持・発展にとりくみ、次代に繋がる産地づくりを目指していく。

## II. 経営概況

### 1. 集団組織の現状

(1) 集団組織の参加戸数及び経営規模

全戸数	総戸数	0.5ha以下	0.5～1ha	1～2ha	2～3ha	3ha以上	1戸平均	
							経営面積	うち果樹作
専業 第1種兼業 第2種兼業	17戸	9戸	7戸	1戸	0戸	0戸	専業 第1種兼業 第2種兼業	0.5ha 0.5ha
計	17戸	9戸	7戸	1戸	0戸	0戸	全戸	0.5ha 0.5ha

(2) 集団組織タイプ 選果場共同利用組織

(3) 集団組織の労働力構成

性別	男 (人)					女 (人)					合計	主たる 分担作業
	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計		
構成員		6	4	6	16				1	1	17	
構成員の家族												
計		6	4	6	16				1	1	17	

(4) 集団組織の雇用労働の状況

常雇	性別	人数	年間雇用日数	主たる分担作業
		人	日	
臨時雇用	延べ雇用日数		(人・日)	

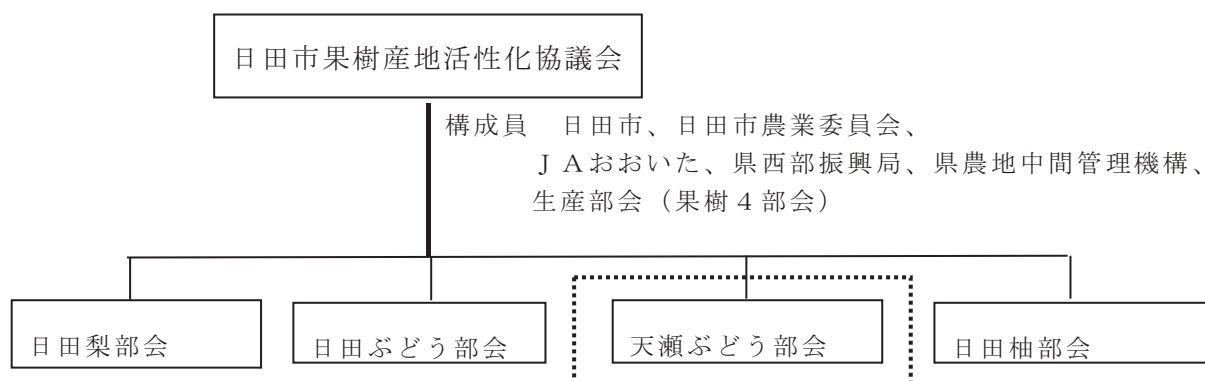
2. (1) 耕地の概況

総耕地面積	ha
水田	ha
普通畑	ha
果樹園	9 ha

(2) 左表の果樹園のうち集団活動の  
対象となる果樹園面積

品目	栽培面積 (うち成園)
①ぶどう	9 ha ( 8.7 ha)
②	ha ( ha)
③	ha ( ha)
④	ha ( ha)
計	ha ( ha)

3. 集団組織の組織図



4. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

(1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考

(2) 主要施設

種類	構造	規模(面積・延長等)	建築年	備考
集出荷施設	鉄骨造2階建	床面積886㎡	昭和61年	
冷蔵庫	1式		令和元年	
集出荷施設	鉄骨造2階建	床面積1,167㎡	令和4年	改修

5. 果樹生産・出荷の概況

(1) 生産の概況

品目・品種	収穫面積			収穫量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a当たり
ぶどう	9 ha	9 ha	9 ha	115 t	116 t	126 t	119 t	1,322 Kg

(2) 選果及び出荷の概況

品目・品種	共同選果量			出荷額			
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均
ぶどう	115	116	126	143,192	144,729	170,498	千円 152,806

(当年産出荷の特徴)

春先が高温傾向となり発芽や開花が早まった。
主力品種の「シャインマスカット」は8月の日照不足で一部園で糖度上昇の遅れや肥大不良が発生したが、各種講習会を開催し、品質の平準化・収量UPに務めた結果、出荷量及び
出荷額は拡大した。



6. 当年の販売方法別割合

品目・品種	販売方法別の割合						
	農協	集団組織で市場出荷	集荷業者	スーパー等へ直接出荷	直売(宅配含)	観光園	その他
ぶどう	% 90	%	%	%	%	%	% 10

7. 園地の状況

(1) これまでの対象集団組織の園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
平成27年	「ブラックビート」	1,094㎡	改植	果樹経営 支援対策 事業
平成29年	「シャインマスカット」	1,182㎡	〃	
〃	「ブラックビート」	606㎡	〃	
平成30年	「シャインマスカット」	4,361㎡	〃	
令和元年	「シャインマスカット」	1,197㎡	〃	
令和2年	「シャインマスカット」	1,755㎡	〃	

(2) 現在の集団組織の園地状況

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ H型短梢仕立により、剪定、防除等、効率的に作業が行えるよう整備されている。</li> <li>・ 新品種への改植をすすめ、現在の品種の面積構成は「シャインマスカット」55%、「ピオーネ」27%、「ブラックビート」8%、「ナガノパープル」3%、その他品種7%となっている。</li> </ul>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

8. 選果及び出荷の状況

(1) これまでの対象集団組織の選果及び出荷についての整備状況

年次	対象品目	能力	整備の内容	備考

(2) 選果及び出荷の改善状況

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 選果は第三者の検査員を導入し厳格な品質管理を行っている。</li> <li>・ 部会への出荷比率は90%以上と非常に高く、シーズン通して安定した出荷量が見込まれる産地として、市場からの信頼も厚い。</li> <li>・ 冷蔵庫を整備し、貯蔵による「シャインマスカット」の長期出荷を可能としている。</li> </ul>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

9. 集団組織活動の効果

項目	集団組織に参加している農家	集団組織に参加していない農家又は地域の平均
収量	「シャインマスカット」 平均収量 1,457kg/10a 栽培講習会、出荷目均し会を実施し、規格の統一、病虫害防除の徹底により、安定生産につながっている。	「シャインマスカット」 平均収量 1,216kg/10a
労働時間	部会への出荷比率は90%以上と非常に高く、出荷調整作業の短縮となっている。	個人で出荷調整後、個人直売、地元市場への出荷を行っている。
品質	房作りと摘粒を徹底しており、35～40粒とし、収穫時には550～600gになるよう統一している。これにより、玉太りが十分でかつ、糖度が高く食味良好な房の生産が可能となっている。	個人ごとの栽培および防除体系で実施されている。
生産コスト	一部被覆栽培により加温栽培に比べ重油等の光熱費を低く抑えている。	
平均的経営収支	(10aあたり) 「シャインマスカット」	(10aあたり) 「シャインマスカット」
粗収益	2,222千円	1,729千円
経営費	805千円	672千円
所得	1,417千円	1,057千円

10. 経営の優秀性等

(1) 集団組織としての栽培技術上のポイント

房作りと摘粒の徹底により高品質栽培
天候や生育状況にあわせた栽培による高品質生産
輸出の取組・台湾輸出に対応した生産体制の確立
長期貯蔵技術の確立

(2) 集団組織としての経営管理上のポイント

品種構成の工夫・貯蔵により8月上旬から10月下旬まで切れ目のない長期出荷の実現
消費者ニーズの高い「シャインマスカット」の生産拡大
関係市場への情報提供・情報収集
新規就農者の確保・園地の継承

11. 写真



集荷状況



出荷される「シャインマスカット」



整備された冷蔵庫



出荷目均し会



新規就農者受入れ協議



継承園の確保・整備  
(既存園地の継承による産地維持)

# 白川 徹・白川 明子

## 住所及び氏名

住所 香川県 三豊市

氏名 しらかわ とおる 白川 徹 (61歳) ・ しらかわ あきこ 白川 明子 (57歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

山間地における果樹を中心とした複合経営である。家族労働力を中心に効率的な管理と高品質栽培に取り組めるよう、平成20年頃から園地の集積とそれに伴う各種整備を行ってきた。その結果、中心品目である温州みかんの10a当たり総労働時間は、県平均の178時間より2割ほど少ない156時間と省力化や軽労化が実践されている。

また、地域のリーダーとして、高品質果実の安定生産の推進を図るべく、自らの経験や考えを若い生産者に教え伝える等アドバイザー的な役割を担っており、持続可能な果樹産地の振興に向けた活動にも貢献されている。

### 2. 対象経営を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

香川県西讃地区は、県の西南部に位置し、観音寺市と三豊市の2市から構成される。北は瀬戸内海に面し、南は讃岐山脈を境に徳島県に接しており、西は愛媛県に隣接している。地域の中心部を北東から南西に向かって国道11号線や高松自動車道、JR予讃線が走っており、高松方面にも近畿、中国地方に対してもアクセスは良好である。

総土地面積は34,013ha、うち耕地面積は7,870haである。気候は年平均気温16.7℃、日照時間2,047時間、降水量1,150mmで、年間日照時間が長く温暖寡雨な瀬戸内式気候である。海岸沿いから平坦部の80%は沖積層の土壌で排水の良い裏作可能な水田地帯を形成しており、南東部の山麓地帯は主に和泉砂岩系の土壌で果樹栽培が盛んである。

これらの状況から同地区では、水稻と園芸品目を組み合わせた複合経営や畜産、施設園芸等の集約的な農業が展開されており、耕地の利用率は高い。

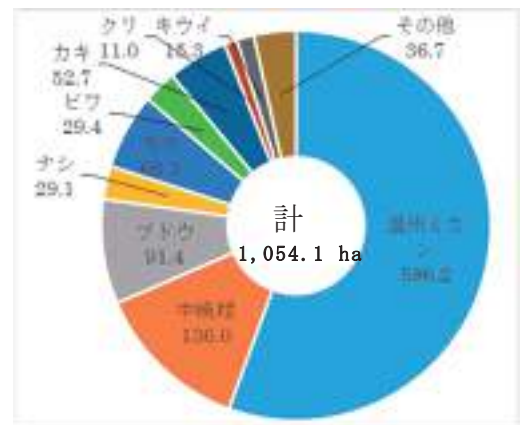


図1 位置図（西讃地区（左：観音寺市、右：三豊市）） 図2 西讃地区の果樹栽培面積  
（普及センター調べ）

## （2）地域の果樹農業事情

白川氏の園地は、西讃地区の三豊市高瀬町にある。同町内では約290戸の農家が、かんきつ類やぶどう、もも、キウイフルーツ、カキなど多品目の果樹を栽培しており、県内でも主要な産地を形成している。

西讃地区内のかんきつ類は、三豊市の隣、観音寺市にある三豊みかん共同撰果場から出荷されており、地区の西北部の海岸沿いを中心とする「マル曾」と海岸から少し離れた三豊市高瀬町から財田町および観音寺市大野原町を中心とする「三豊共撰みとよ」の2つの産地ブランドに分かれて販売される。同撰果場では平成13年以降、光センサー式選果機による区分出荷がなされており、現在の品種構成は、極早生20%、早生26%、中晩生34%、中晩柑20%で、隣接する中讃地区の一部のかんきつ類と合わせて、県全体の出荷量（JA扱い）の約半分を占めている。

白川氏の園地が属する「三豊共撰みとよ」は、以前は極早生の多い産地であったが、補助事業を活用して不良系統の更新に取り組み、温州みかん「石地温州」や中晩柑「不知火」等を重点品種に補助事業を活用した新改植が進められている。特に5月以降に出荷される長期貯蔵（果実をフィルムで個別に包装し低温で貯蔵）の「不知火」は、温州みかんの県オリジナル品種「小原紅早生」同様に、県のブランド認証である「さぬき讃フルーツ」として市場から高い評価を得ている。

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

白川氏は平成12年3月に、勤めていた地元企業を早期退職した後、両親から経営移譲されて温州みかん、もも、キウイフルーツを中心とした果樹栽培に参画した。

就農当時は栽培技術を学びながら、主に補助事業を活用した園地整備や優良品種への新・改植を担当し、経費節減のため、自らバックホーを用いて給・排水路の整備、園内道の造成・簡易舗装などに積極的に取り組んだ(表1)。

平成20年、隣接する用地取得を契機に園地集積を図り、可能な限り機械化・省力化を図れるよう将来を見据えた土地基盤整備を行った。また、降水量が少ない地域のため、十分な貯水量を確保できるよう堰堤を新たに設置するほか、気象条件に適した優良品種等の新・改植を計画的に行い、中山間地域における安定した果樹経営を確立した。

表1 就農後の主な整備状況(Ⅱ経営概況 7(1)と一部重複)

年 度	品 目	整備の内容	備 考
平成13～19年	温州みかん	・傾斜の緩和、園内道舗装	
	もも	・新改植(30a分)	
平成20年	温州みかん	・用地取得、排水整備 ・園内道、調整池設置 ・改植(145a分)	改植の苗木代は補助事業活用
平成25～26年	温州みかん	・排水整備、園内道設置 ・点滴灌水整備 ・傾斜の緩和、堰堤整備	点滴灌水、堰堤整備は補助事業活用
平成26年	キウイフルーツ	・棚、灌水施設整備等	補助事業活用
平成27～30年	温州みかん	・ポンプ室、農薬調整室設置 ・点滴灌水整備、スピードスプレヤー導入 ・園内道舗装	点滴灌水、園内道、スピードスプレヤーは補助事業活用
令和元～5年	全般	・肥料散布機導入	肥料散布機、天井クレーンは補助事業活用
	温州みかん	・ほ場、貯蔵庫内整備 (天井クレーン、ハンドリフト、屋外トイレほか) ・マルチ巻取、無煙炭化機導入	

#### (2) 経営の状況

果樹を基幹作物として、筍を含めた複合経営で、経営規模は果樹3.3ha(温州みかん267a、もも30a、キウイフルーツ30a)、筍90aを白川夫妻と母親の3名の家族労力で経営している。

経営の主力品目は、温州みかん267 a（成園252 a）で、極早生から晩生まで幅広い品種の栽培が行われている。9月以降、収穫時の労力集中を避けるため、出荷期間の拡大等により、効率的に自家労力の活用が図られている。なお、以前は中晩柑の「せとか」や「不知火」も栽培していたが、当該園地は、水はけの良い花崗岩土壌で山間部に位置することから、果実の減酸が遅く凍害を受けやすいため、現在はすべて温州みかんに転換している。

ももは30 a（成園30 a）で、温州みかんの価格低迷や経営のバランスを鑑み、父親が昭和60年代に導入したのが始まりで、当初は「あかつき」と「武井白鳳」の2品種であったが、作業性を考慮して受粉作業の手間がかからない「あかつき」や「日川白鳳」を中心に、食味の良い「ふくえくぼ」や「夢富士」を計画的に改植、規模拡大を行っている。

キウイフルーツは30 a（成園25 a）で、平成26年に温州みかんの圃場整備が終了した後に果樹棚を再建して、「ヘイワード」と県オリジナル品種「さぬきゴールド」の植栽が行われた。

筍については白川氏が経営移譲してからは、規模を縮小しており、経営の大半は果樹が占めている。

年間の管理作業については、白川徹氏が専用機械のオペレーターや主要作業を、奥さんと母親の2人が軽作業全般をサポートするほか、直販は奥さんが担っている。雇用については、収穫等の農繁期に1名を雇用するのみで、作業の効率化と役割分担を明確にし、基本家族労力で賄っている。

果樹園の集積・整備事業が一段落したことから近年は、労働環境の改善を図るため、改築した倉庫の天井にクレーンを設置し、ハンドリフトを導入したほか、果樹園にトイレを整備するなど軽作業化や衛生対策に取り組んでいる。

### （3）経営的特色

#### ① 複数樹種の組合せによる管理労力と被害リスクの分散

労働生産性を飛躍的に改善するため、農地はほぼ1か所に集積・集約し、緩傾斜地となるよう土地基盤整備を行っている。

品目は、常緑果樹と落葉果樹の複数品目を組み合わせ、栽培品種は、果樹産地構造改革計画の推進品種でほぼ構成されている（表2）。特に、栽培管理面からの労力分散や、霜害や台風等の気象災害からの危険分散が図れるよう品種の選定に当たっては、立地条件や限られた労働力で効率的に取り組める品種構成としている。

主力のかんきつ類の作付けは、氏の就農時点においては、極早生20%、

早生40%、中生25%、晩生（中晩柑含む）15%の比率であったが、現在は傾斜の緩和や園内道整備と合わせて改植が進められ、極早生35%、早生31%、中生17%、晩生17%として、各品種の栽培面積も概ね50aまでに留めて収穫労力の平準化を図っている。

ももは、早生の「日川白鳳」と中生の「あかつき」を核に、自家受粉品種の導入による省力化や収穫時期の分散に努めている。

また、キウイフルーツは、早生の「さぬきゴールド」と晩生の「ヘイワード」の2品種とし、管理作業が集中しないよう考慮した品種構成となっている。

表2 現状の栽培品種及び栽培面積一覧

品目	品 種（栽培面積）	品 目	品 種（栽培面積）
温州 みかん	日南1号 (30a)	もも	△日川白鳳 (8a)
	○ゆら早生 (60a)		ふくえくぼ (10a)
	△宮川早生 (20a)		○夢富士 (2a)
	興津早生 (20a)		○あかつき (15a)
	○ <u>小原紅早生</u> (40a)	キウイ フルーツ	○ <u>さぬきゴールド</u> (18a)
	○石地 (45a)		ヘイワード (12a)
	△青島温州 (20a)		
	○寿太郎温州 (25a)		

注) ○：果樹産地産構造改革計画の推進品種

△：同計画で栽培面積の拡大または維持する品種

下線：香川県オリジナル品種

## ② 園地集積及び省力化・軽作業化を目指した整備を実践

白川氏の果樹園は、父親の代に山林を開墾したもので、栽培管理は、ほぼ手作業で行われ長時間の重労働を余儀なくされている状況であった。就農時、栽培技術の習得は経験とやる気で解決できるものの、作業性や収益性の改善を図るには、園地の抜本的な見直しが必要と考え、土地基盤整備や農地の集積に合わせて優良品種への改植に計画的に取り組んだ。

このため就農翌年から、自ら重機を運転して園内道の拡幅や設置を始め、平成20年からは隣接地(66a)の取得が完了したことから補助事業を活用した本格的な土地基盤整備を行っている。

具体的には、急斜面だった温州みかん(300a)とキウイフルーツ(30a)のほ場の約8割を緩傾斜地に再整備し、スピードスプレーヤーや肥料散布機などが容易に走行できるよう2m幅の園内道を栽培畝毎に設置した。

また、灌水用の既存の溜池(2カ所)から、貯水容積を2千立米に拡張した堰堤を築くなどマルドリ栽培対応可能な水源を確保した。温州みかん



の傾斜の緩和が行われていない部分とキウイフルーツ園には、スプリンクラーによる灌水設備を整備した。

ももは、家に近い場所にあることから集積は行っていないものの、他の品目同様にスピードスプレーヤーや肥料散布機などが使用できるよう園内道を整備した。

これらの整備により、全ての園地への各種車両の進入が可能となり、収穫果実の運搬や肥料、土壌改良資材の搬入の軽労化と効率化が図られた。温州みかんが成園化するに伴い、収穫時に雇用が必要となったため、園地にトイレを設置する等労働環境の改善にも取り組んでいる。

また、果実を園地でトラックに積み込んだ後、倉庫に搬入しフォークリフトや天井クレーンを利用してパレットに積み上げ、倉庫内での自家選別や予措、出荷調整を行う一連の労働強度の軽減に繋がる作業体系を確立した。これらは労働時間や労働強度の大幅な削減と作業効率アップをもたらし、整備後は高品質栽培の実践や家族経営によるスケジュール感を持った管理作業が無理なく実施できるようになった。

### ③ パソコンによる経営管理

白川氏は、就農前に勤めていた地元企業ではシステム開発を行っており、コンピューターの利用技術には秀でるものがある。把握した経営状況は、青色申告のみならず労働管理や分析に活用する等、パソコンを活用した経営管理を実践している。また気象データに基づく防除日程や開花・収穫の予測、農薬の在庫・発注管理も行っている。

## (4) 技術的特色

### ① 高品質化への取り組み

栽培される品種は、高品質安定生産が期待できる県オリジナル品種や地域推進品種を中心に構成されており、園内の土壌や立地条件に応じて効率よく管理できるよう導入している。

特に、温州みかんについては、平成20年に大規模な造成と栽培面積の半分以上を一挙に改植した。その際、畝幅2～3m・高さ0.5mの高畝を設置し苗木を植付けるとともに、マルドリ栽培用の点滴灌水用のチューブを設置した。

水源は、すり鉢状に整備した園地の園内道から、新たに整備した堰堤に効率よく貯水する工夫がされており、定圧駆動のポンプで配水している。

現在、温州みかんほ場の8割で点滴灌水が可能となっており、10a毎に

効率よく管理が行われるよう整備されている。また、温州みかんの樹高は2 m未満で、隣の枝と重ならないよう管理されており日当たりと作業性に優れたから園からは、糖度の高い高品質な果実が多く出荷されている。

## ② 環境にやさしい農業の取組みに向けて

大規模な経営になると剪定時の枝処理や土壌改良資材の散布等に大きな手間がかかるため、白川氏は以前から剪定枝や竹林の枯れ竹をチップーで粉砕して、土壌改良資材として投入を行い有効活用に努めてきた。また不定期ではあるが、畜産が盛んな地域でもあるので発生する有機物資源を堆肥散布機で散布し、化学肥料低減も図っている。

昨年度からは無煙炭化器を新たに導入して、剪定枝などをバイオ炭に仕上げてキウイフルーツ園に埋設しており、保水力・排水性の向上を図り樹体の生育への影響を確認中である。

## (5) 地域への波及効果

平成26年度から管内の若手の果樹生産者で組織された「西部果樹青壮年部」に参画し、以降は自らの経験や考えを伝える等アドバイザー的な役割を担っている。

平成29年からは「麻柑橘部会」会長に、令和2年度からは「三豊共撰みとよ連絡協議会」会長及び県内の果樹生産者で組織する「香川県果樹研究同志会」副会長、「香川県西部果樹産地協議会」会長に就任し、地域の代表として産地の更なる発展に貢献している。

特に、令和2年度から、香川県西部果樹産地協議会会長として、香川県の西讃地域の果樹産地構造改革計画の策定並びに推進品種を自らの経営に取り入れ、実践・普及するなど農家や関係機関・団体からの信頼も厚い。

## (6) 今後の経営展開

現在、主要な園地の集積・整備、優良品種への新改植は一通り完了し、園地も成園化しつつあり、安定した生産が行えるようになっている。一方、わい性台の「青島」や「日南」は収益性が低いことから、「寿太郎」への更新や、異常高温・干ばつ等の影響で樹体が衰弱したキウイフルーツは、十分な収益が上がってないことから、土壌改良等を積極的に行い、樹勢回復に努める。

ももは、周辺の耕作放棄地による日照条件の悪化や、春先の作業が重なりやすいため、他品目への改植や栽培の中止も含め見直す。

今後は自身の高齢化や母親のリタイヤに備えて、軽労化や快適な職場に留意した施設やほ場設備の改修に努め、誰もが働きやすい労働環境を

目指していく。

また園地から発生する剪定枝や間伐樹など未利用資源の有効活用や、山林の竹を利用したバイオ炭の投入など、「環境にやさしい農業」も計画的に実践していく予定である。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹（温州みかん、もも、キウイフルーツ）と筍の複合
----------	---------------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	417a
水田	a
普通畑	90a
果樹園	327a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）
①温州みかん	267 a ( 252 a )
②もも	30 a ( 30 a )
③キウイフルーツ	30 a ( 25 a )
④	a ( a )
⑤	a ( a )

## 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
軽トラック	3	うちダンプ仕様1台		
スピードスプレヤー	1	600ℓ 4輪 700 m <sup>3</sup> /min	H29	共同
肥料散布機	1	クローラ 200ℓ側方散布	R 2	
堆肥散布機	1	クローラ 200 kg 4 m幅散布	H30	
乗用草刈機	1	22PS 刈幅 975 mm	H30	
チップパー	1	最大処理 120 mm 120 kg/h	R 1	
天井クレーン	1	最大 30 kg	R 2	
選果機	1			
冷蔵庫	1	1 坪	H25	
バックホー	2	0.08 m <sup>3</sup> 、0.006 m <sup>3</sup>		
フォークリフト	1	1.5t		

### (2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
貯蔵庫	RC	1 棟 120 m <sup>2</sup>	S42	
倉庫（畑）	軽量鉄骨	1 棟 46 m <sup>2</sup>	H27	
倉庫兼作業場	軽量鉄骨	1 棟 79 m <sup>2</sup>	R 6	
倉庫	木造	1 棟 46 m <sup>2</sup>	S61	
倉庫	木造	1 棟 29 m <sup>2</sup>	S50	
果樹棚（キウイフルーツ）		3000 m <sup>2</sup>	H26	
果樹棚（もも）	単管	1000 m <sup>2</sup>	H30	

### 3. 農業労働力の状況

#### (1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (温州みかん)	品目② (もも)	品目③ (キウイフルーツ)	
			日	日	日	日	日	
本人		61	300	280	215	45	20	全般
妻		57	190	175	117	45	9	生産・産直
母		83	240	220	180	30	10	生産
雇 用	常	性別	年令	年間雇用日数				
	雇							
	臨時雇用	1人	延べ雇用日数	60 (人・日)			収穫	

#### (2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
温州みかん	156 時間 (153)
もも	369 時間 (364)
キウイフルーツ	108 時間 (101)

### 4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a 当たり
	a	a	a	kg	kg	kg	kg	kg
温州みかん	250	250	250	72,357	75,893	54,114	67,954	2,689
もも	45	45	45	4,039	3,575	2,646	3,420	977
キウイフルーツ	30	30	30	1,012	600	284	632	758

## 5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
	%	%	%	%	%	%	%
温州みかん	98				2		
もも	100						
キウイフルーツ	100						

## 6. 園地の状況

### (1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H13	温州みかん・興津早生 日南	40a	傾斜の緩和、改植	
H19	もも・ふくえくぼ	10a	整地、改植	
H20	温州みかん等・ゆら早生、 宮川早生、石地温州ほか	145a	園地造成、傾斜の緩和、改植	
H25	温州みかん・青島温州、 寿太郎温州	45a	園地造成、傾斜の緩和、改植	
H26	温州みかん。小原紅早生 キウイフルーツ・ハイワ ード、さぬきゴールド	40a 30a	園地造成、傾斜の緩和、改植 果樹柵設置、改植	
H30	もも・日川白鳳、夢富士	10a	果樹柵整備、改植	

### (2) 現在の園地の状況

<p>温州みかんの95%とキウイフルーツを1カ所の園地に集積し、8割の部分で傾斜の緩和が行われている。同園地について温州みかんは2～3mの畝幅で、それぞれの間は2m幅の作業道を設置して軽トラックやスピードスプレーヤー、肥料散布機等の使用が可能となっている。また園内道は、約1kmに渡り舗装を完備しており、収穫物を容易に搬出できるよう整備を図っている。</p>
<p>灌水については、園地の下流側に設置した堰堤(2,000m<sup>3</sup>)から定圧配水しており、温州みかんの8割については10a毎に滴灌水施設を配置している。残りの山間部に面した所とキウイフルーツは、スプリンクラーによる灌水が行われている。作業道は中央を低くして排水路を兼ねるように設置している。水は各作業道の端の水路を経由して堰堤に集まるようにしており、7割の園地の排水が集まるよう整備している。</p>
<p>ももについては3カ所に園地が分散しているが、その内2カ所はスピードスプレーヤーや乗用草刈機が使用可能となるよう整備が行われている。</p>

7. 10a 当たり総労働時間

	品 目 ① (温州みかん)	品 目 ② ( もも )	品 目 ③ (キウイフルーツ)
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整 枝 ・ 剪 定	19 ( )	60 ( )	42 ( )
施 肥	2 ( )	2 ( )	3 ( )
中 耕 ・ 除 草	7 ( )	14 ( )	4 ( )
薬 剤 散 布	8 ( )	24 ( )	5 ( )
薬剤以外の防除	( )	( )	( )
授 粉 ・ 摘 果	27 ( )	169 ( )	32 ( )
袋 か け	( )	29 ( )	2 ( )
菰かけ・防風・防霜管理	( )	( )	( )
かんがい・その他管理	19 ( 1)	26 ( )	10 ( )
収 穫 ・ 調 製	71 ( 13)	40 ( )	3 ( )
生 産 管 理 労 働	( )	( )	( )
生産関係労働時間 計	153 ( 14)	364 ( )	101 ( )
選別・包装・荷造り	( )	( )	( )
搬出・出荷	3 ( )	5 ( )	7 ( 2)
販売	( )	( )	( )
小 計	( )	( )	( )
合 計	156 ( 14)	369 ( )	108 ( 2)

8. 写真



集積・整備されたほ場全景



園内に設置した大型農機格納庫



作業性と受光態勢が十分確保された植栽





畝毎にドリップによるかん水を実施



園内に設置されたトイレ



倉庫に設置した天井クレーン



バイオ炭の埋設状況（キウイフルーツ）



生産者の代表として取引市場や県外スーパーでの販促活動

# 堀 秋利・堀 衣梨

住所及び氏名

住所 長崎県 諫早市

氏名 ほり あきとし 堀 秋利 (52歳) ・ ほり えり 堀 衣梨 (39歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

堀秋利氏、衣梨氏夫妻は、長崎県諫早市でハウスみかんを中心としたゴーヤとの複合経営を行っている。

長崎県諫早市におけるハウスみかん栽培は、昭和55年頃から始まったが、燃油価格の高騰や生産者の高齢化によって規模縮小の傾向にある。そのような中、堀氏は平成12年に民間企業を退職し、親元就農を経て、父のハウスみかん経営を継承した。その後は離農者等の園地を借り受け、経営規模を拡大することで産地の維持を図っている。

高単価でかつ台風による気象災害を受けない6月出荷に重点をおく早期加温型（11月加温開始）の作型とし、生育状況や品種特性に応じた基本管理の徹底により、健全な樹づくり、安定した収量かつ高品質な果実生産を実現している。また、ハウスの天井およびサイドの3層被覆、循環扇を活用したハウス内の温湿度ムラ解消、暖房機の定期点検等による省エネルギー対策により暖房効率の向上を図ることで重油使用量を17kℓ/10a以下に抑えている（平成16年長崎県基準技術での使用量24kℓ/10a）。

労働力は、基本は夫婦2人で作業を行い、ハウスみかんの収穫など人手を要する作業は臨時雇用を活用している。家族経営協定を締結し、夫婦の農作業や家事の役割分担、休暇の確保の取り決めを明確化することで経営の合理化、働きやすい環境づくりを実践している。雇用については従業員の能力を評価し、能力に応じて昇給させるなど従業員の意欲向上、やりがいの創出を図っている。

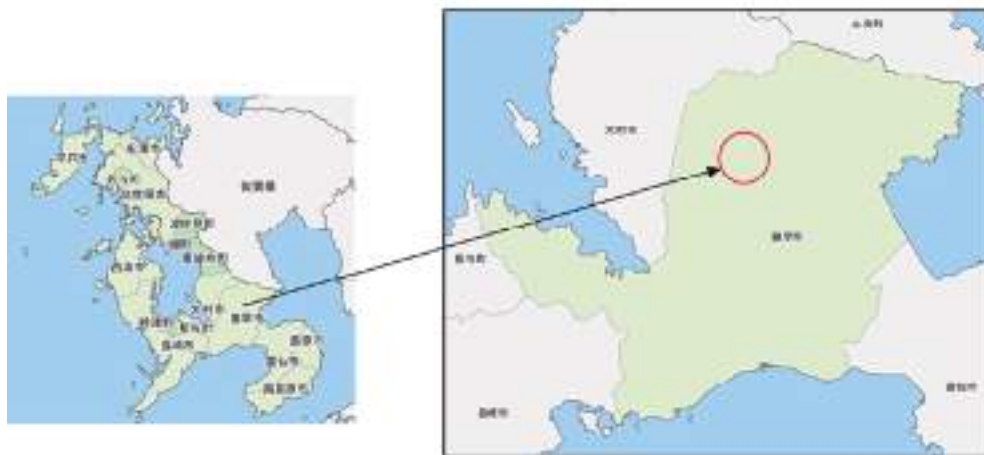
また、秋利氏は、令和元年度まで県の指導農業士として、青年農業者の育成等に携わってきたほか、現在は地域の機械利用組合のオペレーターを務め、水稻の収穫作業等を通じて地域農業の維持・活性化に貢献している。

### 2. 対象経営を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

諫早市は、周囲を有明海、大村湾、橘湾に囲まれ、北は多良山系が広がり、西側は長崎半島、南側は島原半島のそれぞれ付け根にあたる。東部の諫早湾では干拓が進められ、大区画のスケールメリットを生かし環境に配慮した大規模経営が展開されている。丘陵地の畑作地帯では、野菜、果樹、花き等の園芸品目の産地が形成され、その中でハウスみかん産地は、諫早湾干拓のある有明海から多良山系を望む中山間地域にあり、標高差を利用した早期加温栽培に取り組んでいる。堀氏のハウスは標高約300mに位置し、気象条件は、年

間平均気温17.6℃、年間降水量2,301mmである。



## (2) 地域の果樹農業事情

諫早市は長崎県中央農業協同組合管内にあり、管内のハウスみかん生産者は「長崎県中央農業協同組合ハウスみかん部会」に所属している。諫早市では昭和55年頃からハウスみかん栽培が始まり、平成初期にかけて産地が拡大したが、平成18年頃から急激に燃油価格の高騰が進んだことにより、レギュラー加温からグリーン作型（省加温）や施設中晩柑等への転換が行われた。現在、当部会は南部支部（諫早市）と北部支部（川棚町）の2支部で構成され、生産者9戸、面積2.0haだが、支部間の連携を図りながら、コスト縮減対策を徹底し、単収向上に取り組むことで出荷量を確保し、産地の維持を図っている。

## 3. 対象経営の概況

### (1) 経営の履歴

堀秋利氏は大学を卒業後、県内の民間企業に勤めたが、実家の農業経営を絶やしたくないとの思いから平成12年、28歳で親元就農した。就農後は、父のもとでハウスみかんの栽培技術を習得し、平成17年に経営を継承した。

就農時の面積は26aであったが、経営継承を機にハウスを増設し、さらに、地域の生産者の高齢化が進んでいたこともあり、自身の経営規模拡大とハウスみかんの産地維持を図るために地域の生産者が管理できなくなった園地を借り受け、現在はハウスみかん50a、ゴーヤ17aを栽培している。

妻の衣梨氏と結婚してからは、夫婦2人を中心に作業を行い、繁忙期は臨時雇用（延べ220日）を入れながら、ハウスみかんと施設野菜ゴーヤの複合経営を行っている。

### (2) 経営の状況

現在、ハウスみかんの経営面積は50aであり、部会の1戸あたり平均栽培面積（22.7a）を大きく上回っている。品種と面積は「原口早生」30.1a、「宮川早生（持丸系）」19.9aである。就農当初の面積は26aで、品種は「原口早生」、「宮川早生」、「興津早生」であったが、

平成17年にハウス2棟、19.9aを増設した際、落ち着いた樹勢で、ハウス栽培に適している上に、多収で収穫終盤まで食味が安定し、浮皮しにくい「宮川早生（持丸系）」を産地で初めて導入した。その後、令和元年から地域の離農者からハウス2棟、20.4aを借り受け、経営規模をさらに拡大した。なお、借り受けたハウスのうち1棟は、老木化して収量・品質の維持が難しくなった「宮川早生」であったため、「原口早生」に改植した。また、ハウスみかんの他に就農当初からゴーヤ17aを栽培しており、ゴーヤは比較的に価格の変動が少なく、安定した収入源となっている。

販売については、全量を農協へ出荷し、みかん選果にかかる労力削減を図っている。

また、妻の衣梨氏の家系は祖父母の代まで農家であったが、本人は結婚するまで農業の経験が殆ど無かったこともあり、夫婦が対等な立場で協力し、健康で明るい農家生活を築いていくことを目的として、平成22年に家族経営協定を締結した。農作業と家事の役割分担や労働時間、休暇の確保の取り決めを明確化したことで経営の合理化、働きやすい環境づくりを実践している。

### (3) 経営的特色

全てのハウスが自宅から約1kmの位置に集約しており、ハウス周辺の道路も整備して、車両の横づけが可能であるため、移動時間が少なく、効率的な管理が可能となっている。

労働力については、基本は夫婦2人で作業を行い、ハウスみかんの収穫やゴーヤの芽かき・収穫・出荷調整など人手を要する作業は臨時雇用（延べ220日※うちハウスみかんは180日）を活用している。特にハウスみかんの収穫は全て臨時雇用に任せて、本人は収穫を控える園の薬剤散布および収穫が終了した園の礼肥施用や剪定等の安定生産に向けた管理作業に専念することで、分業による作業全体の効率化を図っている。臨時雇用の給与は時給制としているが、能力に応じて昇給させるなどやりがいのある働きやすい職場づくりに取り組んでいる。

販売については、全量を農協へ出荷している。ハウスみかん部会では、糖度13度以上のトップブランド「はなまる物語」を軸に展開しつつ、近年は「消費者が喜ぶみかん」をモットーに小玉果のパック販売の増産に市場と連携して取り組んでいる。また、ハウスみかん部会では、年2回、取引市場との意見交換とスーパー等店頭での消費宣伝・販売促進活動を生産者自ら行っており、生産状況等の情報提供や消費者ニーズの把握に努めている。



図 集約している園地

#### (4) 技術的特色

##### ① 品種構成・作型

品種はハウス栽培に適した「原口早生」と「宮川早生（持丸系）」を栽培している。「原口早生」は熟期が早生品種の中でもやや早く、安定生産が可能で食味が優れており、「宮川早生（持丸系）」は落ち着いた樹勢であるため、樹形がコンパクトでハウス栽培において多収が望め、さらに収穫終盤まで食味が安定しており、浮皮も発生しにくい品種である。作型は、単価が高く安定していて、かつ、確実に台風の被害を受けない6月の出荷に重点をおく早期加温型（11月加温開始）としている。

##### ② 省力化・コスト低減の取り組み

着果量の調整やハウス内の温度ムラの解消により、生育のバラツキを抑えることで、ハウスごとの収穫回数を2回に抑え、収穫作業を省力化している。

また、天井およびサイドの3層被覆、循環扇によるハウス内の温湿度ムラ解消、暖房機定期点検等を徹底した省エネルギー対策により、年間A重油使用量を17k1/10a以下に抑えている（平成16年長崎県基準技術での使用量24k1/10a）。

##### ③ 収量確保・品質向上の取り組み

全ハウスの土壌診断を毎年欠かさず実施し、診断結果に基づいた施肥改善を継続しているほか、有機物の施用や客土による細根増加対策に取り組み、葉数が多い安定した樹相を維持している。

樹の生育や品種特性に応じた剪定による良質の結果母枝づくりに加え、加温開始適期を判断するための結果母枝の枝挿しと硝酸体窒素含量の測定、樹体観察等から総合的に判断した計画的な加温開始に努め、十分な着花量を連年確保している。その上で、適切なハウス内の温度管理と日中の内カーテンの開閉による日照量確保により生理落果を軽減し、部会平均を上回る収量を確保している（過去3か年平均6,952kg/10a、部会平均6,612kg/10a）。また、生理落果を抑え、着果量を確保することで着果ストレスによる糖度向上にもつながり、さらに、3月から収穫までの期間は10日毎に果実の糖度と酸含量を測定し、その結果に基づいたかん水、温度管理により、高品質果実の安定生産を実現している（過去3か年平均糖度11.7度、部会平均10.7度）。

摘果による着果量調整とかん水による果実肥大管理の徹底により、市場評価の高いM、Sの階級比率が部会平均を連年上回っている（過去3か年平均MS比率64.6%、部会平均52.1%）。

出荷時期が梅雨と重なり、果実の腐敗が発生しやすい条件であるため、1月から収穫まで薬剤防除の際に水溶性カルシウム剤を混用散布し、果皮の体質強化による腐敗果発生の軽減、秀品率の向上に努めている（過去3か年平均秀品率70.6%、部会平均63.0%）。

現在、「原口早生」の若木10.7aを育成しており、今後も老木化により収量や品質の低下が危惧される樹から優良品種への改植を計画的に進めていく。

表 過去3か年の堀氏実績および部会平均

		R 3	R 4	R 5	3か年平均
単収 (kg/10a)	本人	6,780	6,889	7,187	6,952
	部会平均	6,769	6,522	6,546	6,612
平均糖度	本人	11.6	11.9	11.7	11.7
	部会平均	10.6	10.8	10.6	10.7
秀品率 (%)	本人	50.2	87.7	73.9	70.6
	部会平均	53.9	70.7	64.3	63.0
MS果率 (%)	本人	58.9	66.8	68.0	64.6
	部会平均	48.7	50.6	56.9	52.1

※令和4年および令和5年の単収は、若木園10.7aを除いて算出。

#### (5) 地域への波及効果

堀秋利氏は地域の機械利用組合のオペレーターを務め、水稻の収穫作業等を通じて地域農業の維持・活性化へ貢献している。

さらに、平成17年度から令和元年度まで、長崎県の指導農業士として、青年農業者の育成に取り組んだほか、民間企業の新入社員や学校教員の研修を積極的に受入れるなど多岐にわたって活動している。

#### (6) 今後の経営展開

堀氏のハウスが標高約300mの高い場所にあり、早期加温型であるため、特に加温開始から冬季にかけて重油使用量が多い。現在、全ての加温ハウスで重油暖房機のみを使用しているが、燃油価格の高止まりの傾向が続き、重油代が経営を圧迫しているため、ヒートポンプの導入による重油使用量の削減を検討する。

また、現在の品種構成は「原口早生」と「宮川早生（持丸系）」の2品種であるが、今後は既存の品種より熟期が早く果皮の紅色が濃い「長崎果研原口1号」等の優良品種へ一部改植し、収穫時期の分散による収穫作業の平準化を検討する。

今後もハウスみかんと施設野菜ゴーヤとの複合経営を継続する予定であるが、施設野菜は現在栽培しているゴーヤに加え、毎年様々な品目を試作し、収益、経費、労働時間等の観点から新たな品目を選定し、所得の向上を目指す。

## II. 経営概況

経営 類型	温州みかん（ハウス）と施設野菜（ゴーヤ）の複合
----------	-------------------------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	67.0a
水田	a
普通畑	17.0a
果樹園	50.0a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積（うち成園）
① 温州みかん	50.0 a ( 39.3 a )
②	a ( a )
③	a ( a )
④	a ( a )
⑤	a ( a )

### 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

#### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
軽トラック	2		H28	
動力噴霧器	1		H28	
加温機	5		H1、H17	

#### (2) 主要施設

摘要	構造	規模（面積・延長等）	建築年	備考
ビニールハウス	パイプハウス	30.1a	H1	R 元年に借り受けた 20.4a を含む。
ビニールハウス	パイプハウス	19.9a	H17	

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (ハウスみ かん)	品目② ( )	品目③ ( )	
族	経営主 妻	52	300日	200日	200日	日	日	管理全般 (収穫を 除く)
		39	200日	140日	140日			
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日数				
	臨時雇用	延べ雇用日数		180日			収穫、出 荷調整	

(2) 10a 当たり総労働時間

品目・品種	10a 当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
温州みかん	591時間

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a 当たり
温州みかん (ハウス)	39.3a	50.0a	50.0a	26,646 kg	31,572 kg	33,246 kg	30,488 kg	6,566.0 kg

5. 販売方法別の割合

品目 ・品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等へ 直接出荷	直売 (宅配合)	観光園	その他
温州みかん (ハウス)	100%	%	%	%	%	%	%



6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H17	ハウスみかん 宮川早生（持丸系）	19.9a	ハウス新設	
R1	ハウスみかん 原口早生、宮川早生	20.4a	離農者からハウス2棟を借受け	
R1	ハウスみかん 原口早生	10.7a	宮川早生から改植	

注) 1 自力整備、補助事業による整備等主要なものについて年代順に記入する。

(2) 現在の園地の状況

・ハウスは自宅から車で約5分の場所に集約されている。全てのハウスで車両を横付けできるため、収穫した果実の運搬や薬剤防除等の作業性は良好である。
・水は河川水を園地まで引いており、こまめなかん水が可能である。
・暗渠を設置し、雨水のハウス内への侵入による品質低下を防止している。

7. 10a 当たり総労働時間

	品目① (ハウスみかん)	品目② ( )	品目③ ( )
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整枝・剪定	77 ( )	( )	( )
施肥	24 ( )	( )	( )
中耕・除草	5 ( 3 )	( )	( )
薬剤散布	47 ( )	( )	( )
薬剤以外の防除	( )	( )	( )
授粉・摘果	50 ( )	( )	( )
袋かけ	( )	( )	( )
蒔かけ・防風・防霜管理	( )	( )	( )
かんがい・その他管理	208 ( 31 )	( )	( )
収穫・調製	146 ( 146 )	( )	( )
生産管理労働	( )	( )	( )
生産関係労働時間計	553 ( 180 )	( )	( )
選別・包装・荷造り	30 ( )	( )	( )
搬出・出荷	4 ( )	( )	( )
販売	( )	( )	( )
小計	34 ( 0 )	( )	( )
合計	591 ( 180 )	( )	( )

8. 写真



写真1 堀夫妻



写真2 収穫期のハウスみかん



写真3 ハウスの管理作業の様子



写真4 集約している園地

# J A 徳島県 神山すだち振興部会

住所及び氏名

住所 徳島県 神山町

氏名 J A とくしま 徳島県 かみやま 神山 しんこうぶかい すだち振興部会

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

徳島県東部に位置する神山町は県下のすだちの産地であり、古くからすだちの栽培がおこなわれている。中山間地ならではの豊富な水と昼夜温較差が大きい気象条件下で栽培されている神山すだちは、鮮やかな色合いや香りの高さ、キレの良い酸味から、市場でも高い評価を受けている。

もともと各家庭で自家消費用に栽培されていたすだちであるが、昭和31年から組織的に商品化作目として栽培され始め、昭和35年以降は神山町鬼籠野地区を中心に本格的に全町内へ植栽された。昭和36年に徳島県からすだち振興地域に指定されて以来、周年出荷に向けた栽培改善が始まり昭和42年には貯蔵技術が実用化し、以来これらの技術改善を積極的に行い今日に至る。

現在は関係機関との連携を図りつつ、更なる貯蔵技術の発展、スマート農業導入に向けた検討、また各生産部会への栽培講習会や若手生産者の育成等、今後も高品質な青果の生産が維持されるよう、産地のさらなる活性化に向けて活動を行っている。

## 2. 集団組織を取り巻く環境

### (1) 立地条件

神山町は徳島県東部の名西郡に属し、昭和30年に5村が合併し誕生した。町の中央を東西に横断する清流、鮎喰川上中流域に農地と集落が点在し、その周囲を町域の約86%を占める300～1,500メートル級の山々が囲んでいる。年間降水量は2,100ミリメートル前後で寒暖差が大きい地域である。そのなかで徳島県を代表する特産物であるすだちの日本一の産地として知られ山フキをはじめとした山菜類・梅・花卉の県内有数の産地となっている。神山町には樹齢二百年と推定されるすだちの県下一の古木がある。



### (2) 地域の果樹農業事情

神山町で栽培される果樹はすだちを中心とし、梅・ゆずの栽培が盛んであり、特にすだちの栽培面積は約81haと全国有数の産地である。神山町ですだちは古くから自家消費用として家の庭先に植えられ、阿波踊りの頃には青い果皮をすりおろし、実が大きくなった9月頃には果汁を絞りにかけ、秋祭りには魚の姿寿司に利用するなど町民の食生活に欠かせないものであった。

昭和30年に合併により誕生した神山町は、農家の生活向上へ果樹の増産計画を打ち出し、町内各地区で競い合いながら栽培に取り組んだ。旧鬼籠野村の有志が集まり栽培果樹の議論を行っていく中で、日照時間・気温・降水量を鑑みて栽培環境の適応したすだちの栽培への取り組みを始め、昭和36年には徳島県からすだち振興地域に指定されるに至った。

標高が高く、雨が多く、冷涼で昼夜の寒暖差が大きい気象条件はすだちの栽培に適しており、鮮やかな色合いや香りの高さ、キレの良い酸味から、市場でも高い評価を受けている。

### 3. 対象集団組織の概況

#### (1) 集団組織の履歴

平成元年4月、もともと旧村での単独農協ごとに運営していたすだち部会が、徳島神山農業協同組合への合併を機に神山町での統一部会として発足した。現在は5つの支部（阿野支部・鬼籠野支部・神領支部・下分支部・上分支部）と、徳島県農業協同組合で構成されている。

#### (2) 集団組織活動の状況

支部長を5名、各地区から選任しそのうち1名を互選により部会長とし組織を構成している。

事務局は徳島県農業協同組合神山営農経済センターが担っている。

#### (3) 経営的特色

平成9年に選果場の建設とともに新しく選果機を導入し省力化を進め、平成23年に選果機を更新しさらに効率化を進めた。平成12年には新しい搾汁機を備えた搾汁施設を選果場横に併設し、加工品の果汁100%のすだち酢の搾汁能力の向上を図った。また、平成30年には従来の1キロ箱出荷に加え、消費者や量販店の要望に応えるため、3個4個詰めに対応する小袋包装機を導入し販路拡大を進めている。

#### (4) 技術的特色

##### ○省力化に向けたスマート農業機械の導入

栽培圃場の多くが傾斜畑や段々畑にあり、圃場管理作業には多大な労力を要することから、令和2年度からドローン等の無人防除機を用いた省力化試験に取り組んでいる。また同年度にロボット草刈り機が導入された圃場では除草作業が皆無となり、省力化に大きく貢献している。

##### ○気候変動に対応した技術導入

すだちは7月下旬の梅雨明け以降に果実肥大が盛んになり、8月から収穫期を迎える。しかしながら、近年は気温上昇に伴う猛暑や少雨により、肥大不良や早期着色などの影響を受ける年が多くなっている。

圃場の樹幹下にドリップ灌水用チューブを設置し、樹体への少量給水により肥効を高めることで、濃緑色の太玉果実や貯蔵性の高い果実生産に繋がっており、灌水作業の省力化が図られている。

##### ○新たな貯蔵方法の開発

神山町はすだち栽培の中でも特に貯蔵出荷に精力的に取り組んでおり、貯蔵技術向上のための研究を盛んに行っている。

硝酸カルシウムを土壌施用することで、貯蔵中における黄変や腐敗などの障害発生が少なくなり、健全果の割合が高まる手法を確立でき広く技術普

及できている。

また、発泡スチロール製大箱にポリ袋の数倍量を入れ、予措することなく低温貯蔵することで、簡便かつ省力的に濃緑色の果実を短期貯蔵できるよう試験を行っている。

#### (5) 集団組織活動による参加農家の経営効果

すだち振興部会としても販路拡大に努めながら、町内に拠点を置くNPO法人との連携によって加工品の販売取扱量が増加し、生産意欲の向上に繋がっている。

#### (6) 地域への波及効果

##### ○栽培技術の高位平準化に向けた取組

当部会では生産者の圃場を個別巡回し水挿しによる着花予想、着花量、着果量について定期的に調査を実施している。また生産者を対象とした高品質果実生産のための摘果摘葉講習会や冬季剪定講習会を開催し、各種情報の提供と併せて技術レベルの向上を図っている。

##### ○新たな担い手確保に向けた取組

神山町では親元就農を含めたすだち栽培を志す希望者を対象に、地域内の中核的生産者とJA・行政が協力し、研修生の受入態勢を整備している。これらの取組により、安定的に新規就農者がみられ、栽培技術の伝承に加え、優良園地の保全と産地維持に大きく寄与している。

#### (7) 今後の経営展開

人口減少や担い手の高齢化により、当地区を含め県内の栽培面積は年々減少傾向にある。「徳島かんきつアカデミー」をはじめとする、就農希望者が技術習得可能な場所を提供することで新たな担い手育成を図り、日本一のすだち産地として産地の維持と魅力発信を継続し続ける。

また、徳島県育成の晩成新品種「勝浦1号」を広く導入し、優れた貯蔵性を生かし、生産者の所得向上・栽培意欲の増進を期待している。

## II . 経営概況

### 1. 集団組織の現状

#### (1) 集団組織の参加戸数及び経営規模

全戸数	総戸数	0.5ha以下	0.5～1ha	1～2ha	2～3ha	3ha以上	1戸平均	
							経営面積	うち果樹作
専業	戸	戸	戸	戸	戸	戸	ha	ha
第1種兼業								
第2種兼業								
計	490	482	8					0.16

#### (2) 集団組織タイプ

選果場共同利用

#### (3) 集団組織の労働力構成

性別	男 (人)					女 (人)					合計	主たる 分担作業
	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計	29才 まで	30～ 49	50～ 64	65 ～	小計		
構成員												
構成員の家族												
計												

#### (4) 集団組織の雇用労働の状況

常雇	性別	人数	年間雇用日数	主たる分担作業
		人	日	
臨時雇用	延べ雇用日数	160日	(5人・32日)	共同選果場での選果作業

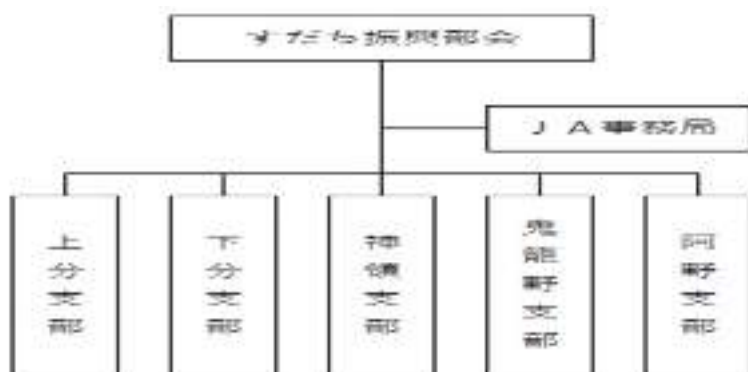
### 2. (1) 耕地の概況

総耕地面積	509ha
水田	41ha
普通畑	232ha
果樹園	236ha

### (2) 左表の果樹園のうち集団活動の 対象となる果樹園面積

品目	栽培面積 (うち成園)
① すだち	81.0ha ( ha)
② うめ	49.5ha ( ha)
③ ゆず	9.0ha ( ha)
	ha ( ha)
計	139.5ha ( ha)

### 3. 集団組織の組織図



#### 4. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

##### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
選果機	1台		平成23年	
搾汁機	1台		平成12年	
小袋包装機	1台		平成30年	

##### (2) 主要施設

種類	構造	規模(面積・延長)	建築年	備考
選果場	鉄骨平屋一部2階	1,046㎡	平成9年	
搾汁施設	鉄骨2階建	656㎡	平成12年	

#### 5. 果樹生産・出荷の概況

##### (1) 生産の概況

品目・品種	収穫面積			収穫量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a当たり
すだち	81ha	81ha	81ha	1,025 t	403 t	868 t	765 t	944kg

##### (2) 選果及び出荷の概況

品目・品種		共同選果量 (kg)			出荷額 (千円)			
		前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均
すだち (青果)	露地	197,325	84,743	142,745	80,812	66,314	94,690	80,605
	貯蔵	215,908	104,426	186,267	174,667	311,613	181,491	222,590
すだち (加工)		600,318	204,448	526,974	60,031	20,444	63,236	47,903
全体		1,013,551	393,617	855,986	315,510	398,371	339,417	351,098

##### (当年産出荷の特徴)

令和5年度産の総生産量は前年比214%、青果出荷は前年比171%と非常に多い出荷量となった。前年比で見ると令和4年産が県下一円、すだちの栽培史上まれにみる不作であったため、このような数字となっているが、過去10年で見てみるとおおそ平年並みの生産量となっている。本年度の生産は、平均気温の上昇による果実の熟度の前進や、降雨の少なさによる日焼け果の発生など、例年に比べ状態の悪い果実となった。販売面においては、コロナウイルス収束に伴うインバウンド需要により、荷動きは良く良好な販売となっている。



6. 当年の販売方法別割合

品目・品種	販売方法別の割合						
	農協	集団組織で 市場出荷	集荷業 者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
すだち	100%	%	%	%	%	%	%

7. 園地の状況

(1) これまでの対象集団組織の園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H21_3次	すだち・神山4号	2,921	改植 4園地	
H22_3次	すだち・神山4号	5,180	改植 8園地	
H23_2次	すだち・神山4号	9,722	改植 15園地	
H24_1次	すだち・神山4号	2,050	改植 4園地	
	すだち・にしまた系	1,100	改植 2園地	
H24_2次	すだち・神山4号	2,672	改植 5園地	
H26_1次	すだち・神山4号	3,941	改植 8園地	
H27_3次	すだち・神山4号	4,790	改植 9園地	
H29_2次	すだち・神山4号	4,081	改植 5園地	
	すだち	1,067	園内道の整備 1園地	
H31_1次	すだち・神山4号	1,772	改植 4園地	
R2_1次	すだち・神山4号	2,078	改植 5園地	
R2_2次	すだち・神山4号	2,498	改植 3園地	
R3_1次	すだち・神山4号	919	改植 2園地	
	すだち・神山4号	829	新植 1園地	
R3_2次	すだち・神山4号	375	改植 1園地	
	すだち・神山4号	6,901	新植 9園地	
R4_1次	すだち・神山4号	2,319	改植 3園地	
	すだち・神山4号	1,746	新植 3園地	
	すだち・にしまた系	1,503	新植 1園地	
R5_1次	すだち・神山4号	1,432	改植 2園地	
	すだち・神山4号	1,876	新植 3園地	
	すだち・にしまた系	1,506	新植 2園地	

(2) 現在の集団組織の園地状況

--

8. 選果及び出荷の状況

(1) これまでの対象集団組織の選果及び出荷についての整備状況

年次	対象品目	能力	整備の内容	備考

(2) 選果及び出荷の改善状況


9. 集団組織活動の効果

項目	集団組織に参加している農家		集団組織に参加していない農家又は地域の平均	
収量	1,600kg/10a		1,600kg/10a	
労働時間	露地：353時間 貯蔵：429時間  神山町は中山間に位置しており一枚の畑の大部分が小さい棚田が占めている。そのため一つの作物では経営が困難であるため、昔から二品目以上の作物を栽培する複合経営が中心となっている。  集団組織に属することにより、すだちの出荷作業の時間が短縮され、他の品目栽培に時間をさくことができ、結果として全体の所得向上につながっている。		露地：413時間 貯蔵：639時間	
品質	共同選果により、個人間の品質格差がなく、出荷期間通じた品質の安定が図られている。		生産者間で品質格差が生じる。	
生産コスト	露地	貯蔵	露地	貯蔵
	644千円/10a	707千円/10a		
平均的経営収支	露地	貯蔵	露地	貯蔵
	粗収益	1,377千円/10a		
	経営費	707千円/10a		
所得	103千円/10a	670千円/10a		

10. 経営の優秀性等

(1) 集団組織としての栽培技術上のポイント

○着花調査 5月
○着果調査 7月
○摘果・摘葉講習会 7月
○貯蔵状況調査 12月
○花芽水差し調査 1月
○剪定講習会 2月

(2) 集団組織としての経営管理上のポイント

○出荷協議会 (出荷規格・出荷に関する注意事項等の共有)
○販売反省会 (今年度の生産・出荷・販売を振り返り、課題点の検討と情報共有)

11. 写真

すだちの古木



ロボット草刈り機



灌水チューブによる点滴灌水



ドローンによる省力化実証試験



剪定講習会



自走式無人防除機



東京高円寺阿波踊りでの消費宣伝



選果場



搾汁施設



改植・新植園地



すだち G I 表示出荷箱



# 宮後 英子

住所及び氏名

住所 北海道 七飯町  
氏名 みやご えいこ 宮後 英子 (70歳)

## I . 推薦理由

### 1. 推薦要旨

宮後英子氏は北海道七飯町を代表する果樹専門農家で、地域の模範となる栽培技術や果樹経営を実践している。

就農時の昭和62年は果樹・野菜の複合経営であったが、就農を機に経営の安定化のため果樹専門経営へと転換を図った。併せて、地域の果樹生産者の中には少なかった観光直売型果樹園を実現、果樹生産者はもとより七飯町でも初となる女性農業経営者として地域を牽引する優秀な人材である。

りんごを主品目に生産しており、直売を主体に収穫体験などを行い消費者に顔の見える販売形態を取り入れている。さらに多様なニーズと長期間の販売に応えるために8月下旬から11月中旬まで収穫できるりんごの品種構成を工夫している。また地域としては珍しいおうとうやブルー、ブルーベリーなど多種にわたって生産販売している。

労働面においては、せん定作業は地域の果樹生産者に委託、病虫害防除でスピードスプレーヤーに乗るなど機械作業全般を行っている。薬剤による摘花・摘果を積極的に導入、平成26年に北海道では初となる「りんご高密度植栽培」を導入するなど省力化栽培にも先駆的に取り組み地域をリードしている。また、従業員との作業の役割分担や労働安全を意識し、効率化とゆとりある管理作業、農業経営を実践している。

宮後氏は「七飯町果樹組合」の役員を歴任し、地域の果樹振興に貢献している。また、女性農業者グループの「ウェーブネットおしま」「アグリネットななえ」、子供の食育を考える「ななえの食を考える会」「七飯町物産協議会」で副会長、会長を歴任、現在は「七飯町農業委員」として果樹産地発展、さらには地域農業発展のため女性農業者として中心的に活躍している。

七飯町の果樹は高齢化、後継者不足から農家が減少し産地存続が厳しい状況の中、女性農業者の視点での取り組みは産地維持発展への貢献度は大きい。

### 2. 対象経営を取り巻く環境

#### (1) 立地条件

七飯町は、北海道渡島半島の南部に位置し、北海道の門戸函館市から約16kmの距離にあって、総面積は216.75km<sup>2</sup>、人口2万8千人の町である。

北は活火山の秀峰駒ヶ岳(標高1,131m)と大沼国定公園の大沼湖に注ぐ宿野辺

川を境として森町に、北東は鹿部町に、西及び南部の一部は田畑で北斗市と、東南は横津岳の山頂より蒜沢川を境にして函館市と接している。地形は、北部と南部に別れ、北部の大沼地区には、駒ヶ岳と大沼湖を擁する大沼国定公園があり、平坦地は水田に山麓一帯は酪農地帯となっている。南部は、ほぼ中央を国道5号が横断し、国道沿線は市街地として、東側の丘陵地帯は普通畑と樹園地に、西側の平野部は水田に利用されている。

気候は、年間降水量が1,149mmと比較的少なく、年平均気温は8.6℃、最大積雪深は40cm前後で道内でも温暖な気候に恵まれ、四季の区別がはっきり感じられる自然環境を有し、全道の中でも多様な作物が集約的に栽培されている。耕地面積2,990ha 農家戸数329戸、1戸当たり耕地面積9.1haであり、北海道では小規模な農業地帯である。経営形態は、水稲野菜複合経営、野菜専業経営、果樹専業経営、花き専業経営、肉牛経営、酪農経営など多様な農業が行われている。



写真1 風光明媚な七飯町

## (2) 地域の果樹農業事情

七飯町の果樹栽培の歴史は古く、明治2年(1869年)、プロシア人のガルトネルが母国から取り寄せたりんごを含む果樹苗木を植え付けている。このほ場は、明治3年(1870年)に開拓使が買い上げ明治6年(1873年)に七重開墾場を開設、明治7年(1874年)以降、苗木の養成を行い各地に配布している。民間による果樹栽培は開拓使が廃止された明治14年(1881年)以降に本格化しており、西洋りんご発祥の地とされている。

七飯町の果樹栽培は「鳴川」「大中山」の2つの地区で行われており、「鳴川」は果樹専業経営、「大中山」は果樹野菜複合経営となっている。りんごを主体にブルーベリーや雨よけおうとう、ハウスぶどう栽培が行われている。

りんご栽培は平成5年に123haであったが、ながねぎ、にんじん等の野菜栽培への切り替えから栽培面積は約30%に大きく減少した。

平成6年に先進的農業生産総合推進対策事業で傾斜地用多目的管理機を27台導入、平成7年には、高収益農業推進緊急対策事業で高所作業台車3台とおうとうの雨よけハウス等を導入し、高齢化に対応した省力化の推進を図った。

平成10年にりんごわい性苗木養成事業でJM台木の導入と挿し木繁殖により1,000本を養成、翌年、早生ふじ系品種の導入を図った。

平成13年度にりんごで北のクリーン農産物表示制度「YES! clean」の認証を受け、減化学農薬、減化学肥料に取り組み、産地のPRを図った。

平成16年、8月20日の台風15号と9月8日の台風18号の2つの台風が道南地方を通過した。特に、台風18号では海水が葉に付着し、塩分による潮風害が発生した。

りんご離れと顧客の高齢化が続く中、新たな顧客開拓を図るため、北海道立中央農業試験場と試食等の検討を重ね、蜜入りで食味に優れた「ぐんま名月」に着目し、平成19年に七飯町果樹組合で導入推進を決定した。さらに、七飯産りんごの新ブランド化を図るべく、ブランド名を公募、応募された226件から果樹組合で「ななみつき」と決定し商標登録された。

平成17年に地元企業の声かけをきっかけに、中央農業試験場の協力のもと加工用品種として酸味の強い「ほおずり」を選定し、シードル用途として原料の供給を行った。さらに、平成26年には七飯町の企業と農商工連携事業で、中央農業試験場で開発された「レアフル」加工で商品開発を図り原料供給を行っている。

令和元年9月に全国りんご大会を北海道七飯町で開催した。日本への西洋りんご植栽150年の年と相まって盛会に行われた。

### 3. 対象経営の概況

#### (1) 経営の履歴

宮後氏は、昭和62年に就農。当時は、父の新一氏が七飯町農協協同組合の組合長を行いながら、果樹(りんご)2haと露地アスパラガス1haの複合を行っていた。就農時は全て普通栽培(丸葉台)で品種構成は「スターキングデリシャス」、「レッドゴールド」、「ゴールドデンデリシャス」等の品種が中心で価格も低迷していた。宮後氏は北海道果樹協会の研修会や果樹組合の先進地視察に積極的に参加しりんごの栽培技術について学んだ。平成元年から4年にかけて、露地アスパラガスから北海道育成品種の「ハックナイン」と「つがる」等のりんごへと転換、併せて栽培方法を普通栽培からわい化栽培へ計画的に品種更新とともに進め果樹専業経営となった。平成10年に父の死去とともに経営移譲し経営主となった。それまで、販売形態も系統出荷70%、直売30%であったが、売り上げや所得が無かったことから徐々に直売にシフトし、同時に「ぐんま名月」、「ひめかみ」、「シナノゴールド」、「着色系ふじ」など売れる品種に積極的に改植を行った。

りんご以外では、平成7年におうとうを導入、平成14年にプルーン、平成20年にブルーベリーを植栽、平成28年にはおうとうの雨よけ施設を設置するなど果樹複合経営を行っ

ている。

#### (2) 経営の状況

宮後氏の経営面積は3.5haで、りんご2.6ha、プルーン0.4ha、おうとうが0.2haで、りんごの販売が、農業収入全体の約8割を占めている。七飯町の果樹生産者はりんご栽培のみの経営が多く規模も平均1.5ha程度であるが、その中でも



写真2 宮後英子氏



規模が大きくかつ果樹複合経営を女性一人で25年行っている。

そのため年間の労働力は、せん定作業を近隣の果樹生産者に委託しており、それ以外の作業は宮後氏と臨時雇用のパート従業員で行っている。令和5年に長女夫妻が就農し、後継者として果樹経営を学んでいる。

表1 宮後氏の収穫、販売期間

栽培樹種	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
おうとう										
ブルーベリー										
ブルーン										
りんご										
リンゴジュース										

### (3) 経営的特色

#### ①女性経営者ならではの経営管理

宮後氏の就農時は、果樹と野菜の複合経営であったが、労働力が臨時雇用のパート従業員であったため、果樹専業経営に切り替え労働の集約化を図り、販売方法も宮後氏が直接消費者と対話できる顔の見える直売所での販売に切り替えた。そのため、宮後氏は直売所での販売をする傍ら、園地の状況や作業の進捗状況を常に把握しパート従業員と二人三脚で作業を進めた。効率よくゆとりをもって作業し、かつ販売できるように樹種の構成とりんごの品種構成を見直し、無理なく作業しながら長期販売を可能にしている。

#### ②情報メディアの活用と高付加価値化の販売

ホームページの開設は七飯町内でも早く、常に情報発信を意識し活動している。また、NHKの地域版ニュースに年2～3回出演し地域のりんご情報を発信、道の駅で開催された「アップルスクール」の講師を務めるなど七飯町果樹生産者の顔的存在になっている。

高付加価値化の取り組みでは、自らも加工施設を設けジנגイスカンのタレを製造販売(現在休止)、現在はりんごジュースを委託加工し品種の特性を活かすためブレンドはせずに品種ごとに製造している。味にこだわりビタミンC無添加「りんごそのまま果汁」を年間5,000本を直売所や道の駅で販売している。

北海道中小企業家同友会函館支部会員、ななえの食を考える会副会長、



写真3 道の駅とタイアップしたりんごジュース

七飯町物産協議会副会長を歴任し、果実の高付加価値化を地域とともに進めている。

#### (4) 技術的特色

##### ①作業性、販売を意識した品種構成と計画的な更新

直売所での対面販売が中心になるため、消費者の声に対応した品種構成を意識し、さらに長期間の販売を目指しているため8月下旬に収穫する「恋空」「つがる」「昴林」とリレーする形態で「ふじ」「はるか」までの多品種で構成している。また、計画的に樹を更新し、生産量を維持しながら幼木、若木、成木、老木を配置し常に園地を若い状態に維持している。

##### ②省力化を意識した技術の積極的な導入

七飯町のブランド品種「ぐんま名月」ブランド名「ななみつき®」を中心に、「トキ」「シナノゴールド」等の黄色品種を約30%を導入し着色管理の省力をするなど積極的に省力化を考えた品種構成としている。

また、薬剤による摘花・摘果を実施し、摘果作業の省力を図るなど女性一人でもできる果樹経営を実現している。

表2 宮後氏のりんごの品種構成割合 (%)

品種名	宮後園	七飯町	北海道
ふじ	40	35	13
ぐんま名月	13	10	3
つがる	9	7	21
シナノゴールド	9	1	1
シナノスイート	8	2	3
王林	3	5	3
早生ふじ系	2	5	11
レッドゴールド	1	16	6
その他	15	19	39
わい化栽培率(%)	98	94	62
黄色系品種比率(%)	30	21	10

##### ③道内での先駆けとなったりんご高密度栽培の導入

平成24年に七飯町の果樹生産者とともに行った長野県の「りんご高密度栽培」の視察を機に、北海道では初となる「りんご高密度栽培」を平成25年に導入した。

道内での栽培事例がなかったため試行錯誤しながら栽培を工夫し、現在では平均6t/10aの極めて高い収穫量を上げている。これは、宮後氏が毎年先進地視察に参加、そこで学んだことやいいなと思ったことを試験的に導入するチャレンジ精神と自分のものにする研究心の表れである。

## (5) 地域への波及効果

### ①女性農業者としての活躍、地域貢献

宮後氏の就農当時は七飯町の果樹農家はもとより、農業者にも女性経営者はいなかった。そんな中、宮後氏が自立した果樹経営を行えたことは地域の優良事例となり、果樹の女性経営は徐々に増えている。渡島管内の女性農業者で組織する「ウエーブネットおしま」の会長を平成22～23年に務め、現在は、七飯町の農業委員として新規参入者の定着や女性農業者の活躍の場づくり等の活動をしている。

### ②高密度栽培の波及

先駆けとなった高密度栽培は、令和元年に七飯町で行われた全国りんご研究大会北海道大会の視察園地となり注目を集めた。それがきっかけとなり、町内で2戸が導入、さらには全道に波及しつつある。

## (6) 今後の経営展開

七飯町の果樹面積は年々減少傾向にある。西洋りんご発祥の地、七飯町ブランド品種ぐんま名月「ななみつき」維持発展を危惧し、りんご面積維持のためぐんま名月の植栽を進めている。

地域は高齢化、後継者不足が深刻となっているが、宮後氏は、高齢者や女性でもできる農業「もうける」より誰でも続けられる農業を今後も考えている。

令和5年に長女夫婦が就農し果樹経営を学んでいる。数年後に経営継承を考えており、そのために改植を行い園地の若返りや規模拡大により続けられる農業の基盤づくりを進めている。

## II. 経営概況

経営 類型	果樹専業
----------	------

### 1. (1) 経営規模

総経営耕地面積	a
水田	a
普通畑	a
果樹園	350 a

### (2) 果樹品目別面積 ((1)の「果樹園面積」の内訳)

品目	栽培面積 (うち成園)
① りんご	260 a ( 250 a)
② プルーン	40 a ( 25 a)
③ おうとう	20 a ( 15 a)
④	a ( a)
⑤	a ( a)

## 2. 果樹作関係主要機械・施設の整備状況

### (1) 主要機械

種類	台数	仕様	導入年	備考
リフト	1		H17	
多目的管理機	1		H6	2戸共同
乗用草刈樹	1		H22	
乗用草刈機	1		R1	
トラクター	1		R5	
オートローダ	1		R5	
軽トラ	1		R1	
重量選別機	1		H23	
スピートスプレー	4			20戸共同

### (2) 主要施設

摘要	構造	規模 (面積・延長等)	建築年	備考
倉庫	鉄筋コンクリート	85.9 m <sup>2</sup>	S40	旧住宅改装
倉庫	木造	59.8 m <sup>2</sup>	S47	旧住宅改装
倉庫	鉄筋コンクリート	33.0 m <sup>2</sup>	S35	
倉庫	鉄筋コンクリート	92.5 m <sup>2</sup>	S47	
雨よけハウス(おうとう)	パイプ	3連棟ハウス	H7	
雨よけハウス(おうとう)	パイプ	4連棟ハウス	H29	

3. 農業労働力の状況

(1) 農業従事日数

家 族	続柄	年令	年間農業 従事日数	うち果樹 農業従事 日数	うち品目別			主たる分 担作業
					品目① (りんご)	品目② (プルーン)	品目③ (おうとう)	
	経営主	70	200日	200日	165日	20日	15日	生産労務 生産労務 経理販売
	長女夫	43	290日	290日	270日	10日	10日	
	長女	43	10日	10日				
雇 用	常 雇	性別	年令	年間雇用日 数				
	臨時雇用		延べ雇用日数 1,000人			(人・日)		生産

(2) 10a当たり総労働時間

品目・品種	10a当たり総労働時間 (うち「生産関係労働時間」)
りんご	215.5 (165.0)
プルーン	225.6 (145.6)
おうとう	174.3 (97.6)

4. 果樹生産の概況

品目・品種	収穫面積			収 穫 量				
	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	前々年産 (R3年)	前年産 (R4年)	当年産 (R5年)	3か年平均	
							収穫量	10a当たり
りんご	260a	260a	250a	65,600kg	68,000kg	62,500kg	65,367kg	2,550kg
プルーン	25a	25a	25a	4,000kg	4,000kg	2,000kg	3,300kg	1,300kg
おうとう	15a	15a	15a	430kg	430kg	430kg	430kg	290kg

5. 販売方法別の割合

品目 ・ 品種	販 売 方 法 別 の 割 合						
	農協	個人で 市場出荷	集荷業者	スーパー等 へ直接出荷	直売 (宅配含)	観光園	その他
りんご プルーン おうとう	5%	%	%	25%	69%	1%	%

注) 「品目・品種」欄の品目・品種については、第4表と同じものを記入する。

6. 園地の状況

(1) これまでの園地整備、品目・品種更新等の状況

年次	対象品目・品種	面積	整備等の内容	備考
H1~4	りんご	100 a	野菜からの転換、わい化栽培導入	
H7	おうとう	20 a	新たな品目として植栽	
H14	プルーン	40 a	新たな品目として植栽	
H24	りんご	20 a	高密植栽培の導入	
H28	おうとう	20 a	雨よけハウスの導入	
R3	りんご	30 a	品種更新	

(2) 現在の園地の状況

・園地は1ヵ所に集約されており、自宅周辺にある。
・大きな道路に面しているため運搬作業もスムーズに行うことができる。
・園地は平坦で機械作業には支障がないが、高台に位置しているため強風害は受けやすい。

7. 10a 当たり総労働時間

	品目① (りんご)	品目② (プルーン)	品目③ (おうとう)
	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)	時間 (うち雇用)
整枝・剪定	17.5 ( 17.5 )	16.0 ( 16.0 )	15.0 ( 15.0 )
施肥	5.0 ( )	4.0 ( )	4.0 ( )
中耕・除草	4.0 ( )	4.0 ( )	4.0 ( )
薬剤散布	4.0 ( )	4.5 ( )	3.0 ( )
薬剤以外の防除	( )	( )	( )
授粉・摘果	70.0 ( 56.0 )	52.0 ( 47.8 )	13.3 ( 10.6 )
袋かけ	0.2 ( )	3.2 ( )	( )
蒔かけ・防風・防霜管理	( )	( )	( )
かんがい・その他管理	18.6 ( 14.8 )	( )	( )
収穫・調製	40.7 ( 32.6 )	60.0 ( 49.8 )	53.3 ( 46.6 )
生産管理労働	5.0 ( )	1.9 ( )	5.0 ( 4.0 )
生産関係労働時間計	165.0 ( 121.0 )	145.6 ( 113.6 )	97.6 ( 76.2 )
選別・包装・荷造り	20.5 ( 17.4 )	20.0 ( 16.0 )	30.0 ( 18.0 )
搬出・出荷	( )	( )	( )
販売	30.0 ( )	60.0 ( 20.6 )	46.7 ( 7.0 )
小計	50.5 ( 17.4 )	80.0 ( 36.6 )	76.7 ( 25.0 )
合計	215.5 ( 138.4 )	225.6 ( 150.2 )	174.3 ( 101.2 )

## 8. 写真



全国リンゴ研究大会で園地説明をする  
宮後英子氏



函館山を望む宮後英子氏の果樹園



北海道初のりんご高密度植栽培  
(平成25年に導入)



収穫体験で説明する宮後氏（中央）



地域としては珍しいおうとうの雨よけ栽培



改植を計画的に行い園地を若い状態に保っている

